女鑑
（毎月二回五日、廿日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）
明治三十五年十[illegible]十四發兌
第貳[illegible]七號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



!!! 新年初刊豫告 !!!

女鑑第二百六十八號は來三十六年一月一日に發行し口繪には左に記せる外十數種の人物風景等を收む

皇族妃殿下及姫宮御肖像

赤十字社特志看護婦會（アートタイプ菊判四倍）

小松宮及同妃殿下を始め奉り各貴顯令夫人令孃等特志看護婦會に關係ある方々の寫影なり一見勇武の氣象を喚發し報國盡忠の志を起さしむ

副島伯爵の家庭

老伯夫妻を中心として伯爵邸深樹蓊鬱の中に全家團欒の眞景を寫し和氣洋々春風堂に滿つるの思あり

又記事には

婦人教育と衞生の關係

前警察醫長 醫學士 山根正次

老人の看護に就て

東京女子高等師範學校教諭 後閑菊野女史

わらはに嬬の字　大槻如電

戰國時代の婦人　文學士 小林雨塔

女優美巴孃　萬朝報記者 河村てる子

三大女工傳　須藤右馬

趣味論　文學士 沼波瓊音

新年の動植物　林壽祐

加賀の千代　小泉三申

等其他諸名家の寄稿せられたる有益にして興味ある論說、記事を載せ猶は

新年大附錄

として左記諸大家の筆に成れる小說並に隨筆を掲く

巴御前　塚原澁柿園

漁夫の妻　遲塚麗水

新年の俳句　幸田露伴

女鑑第貳百六拾七號目次







鍋島侯爵夫人榮子



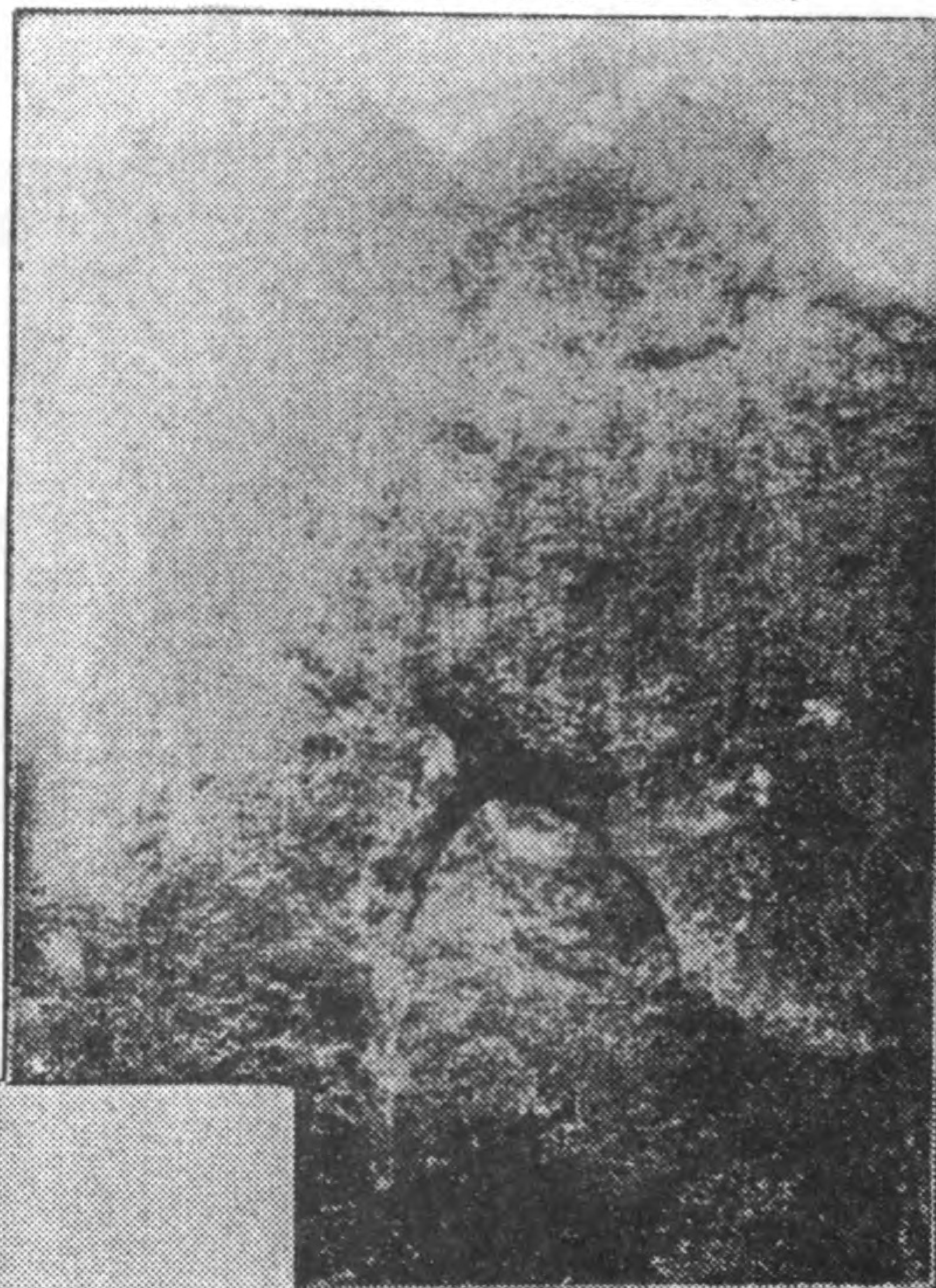
谷子爵夫人くま子

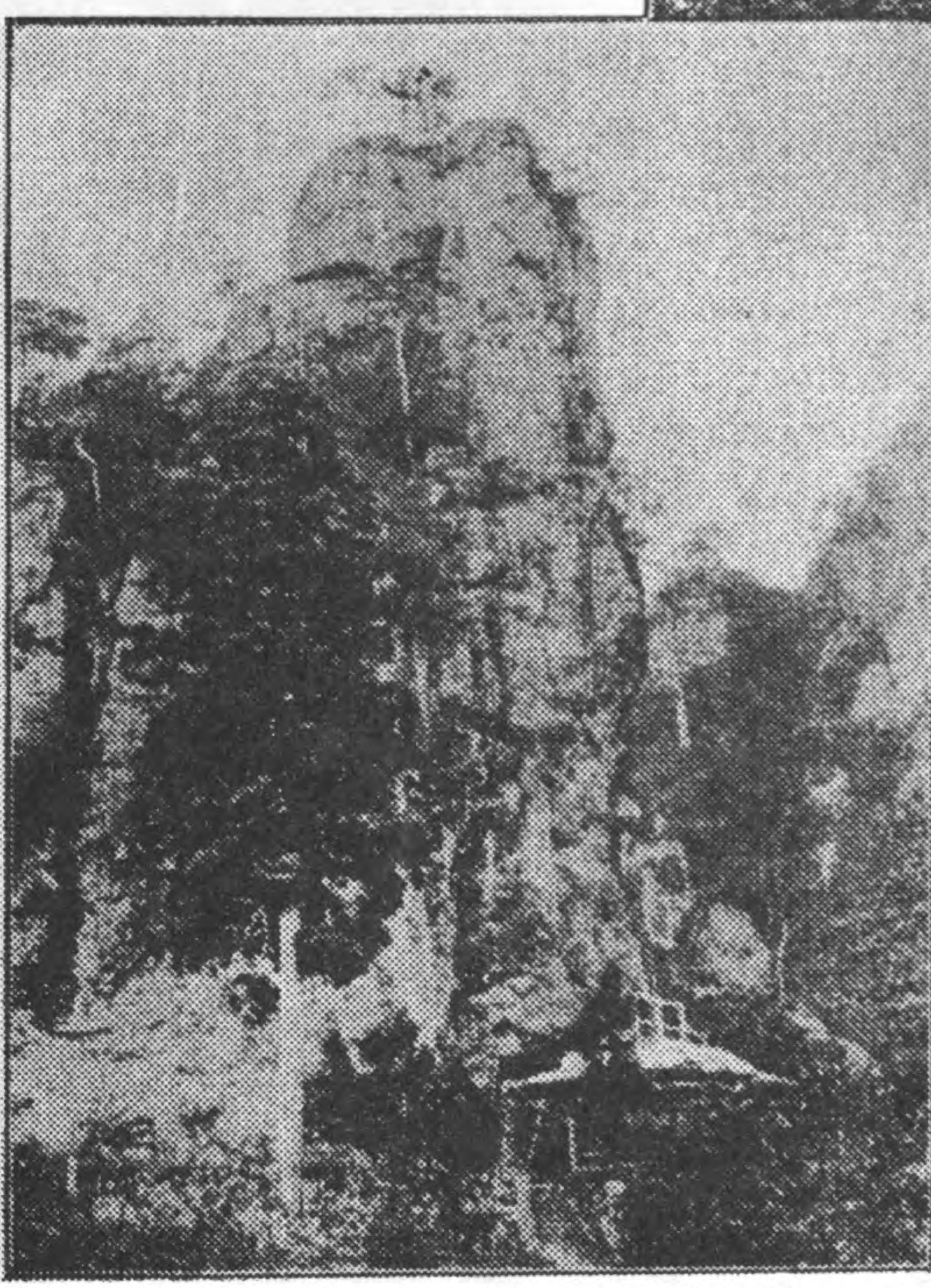


鈴木男爵夫人きく子

金剛山中の景色

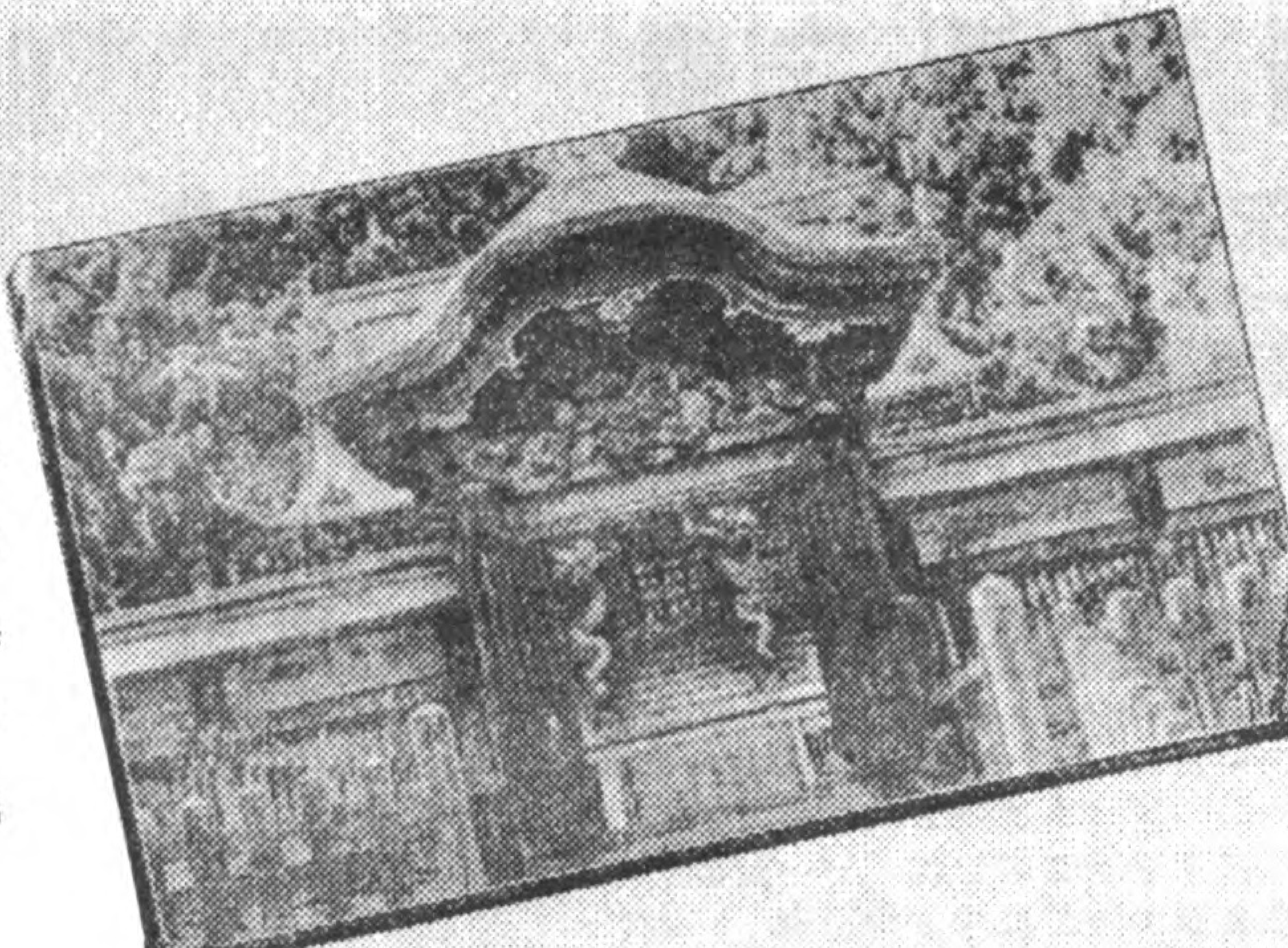
（其一）金剛山中第一石門



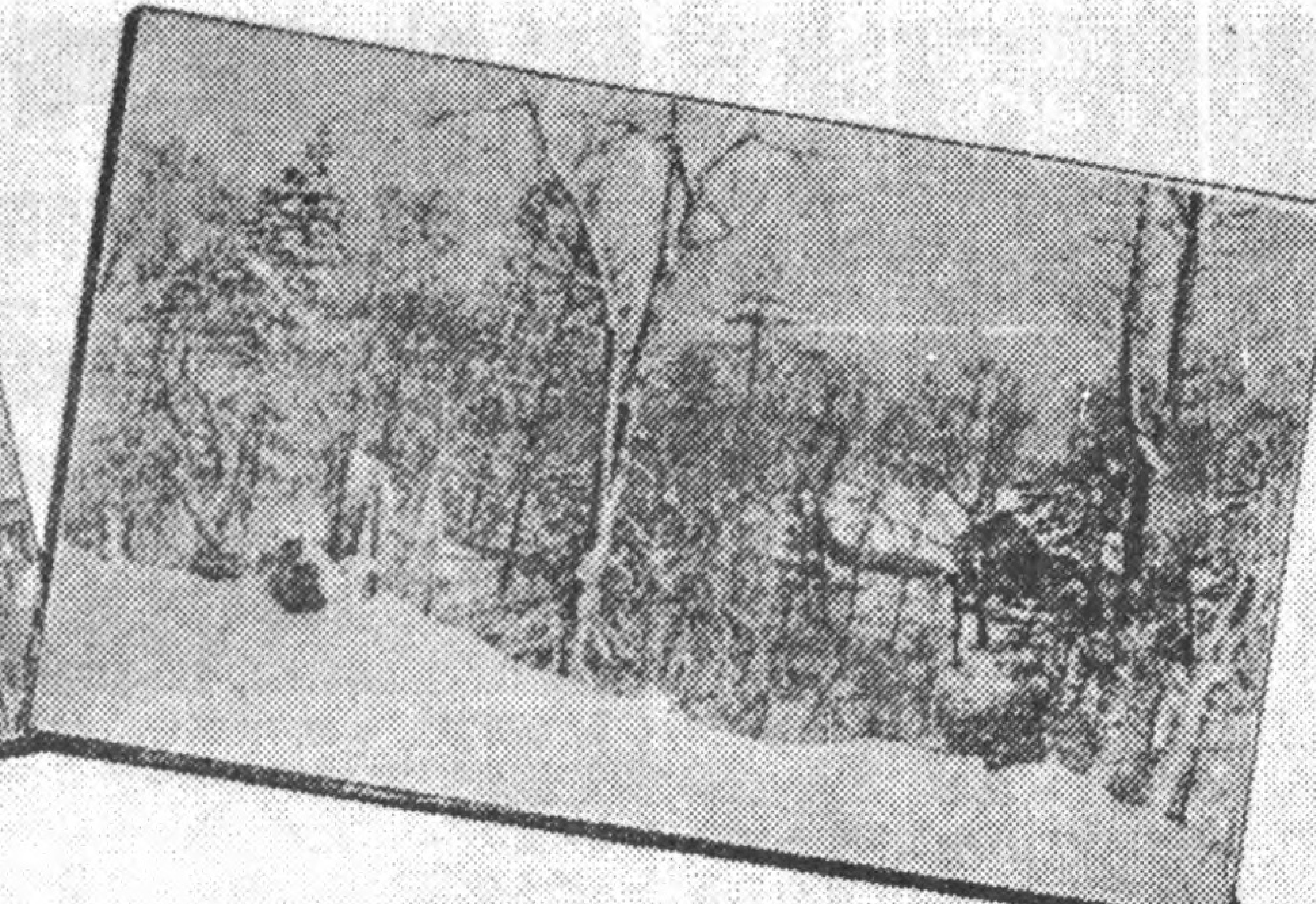


（其二）金剛山旭獄

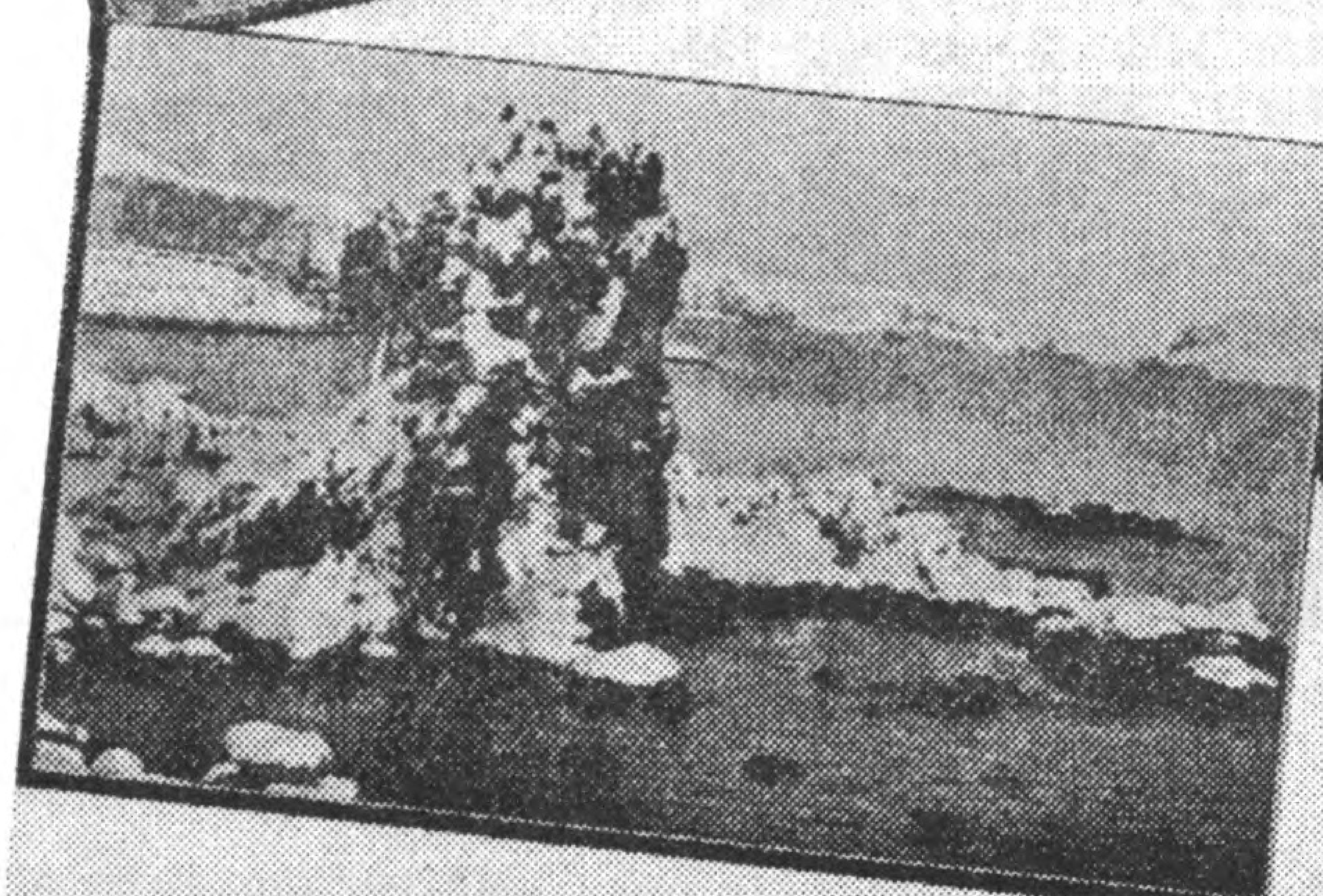
青森の景色



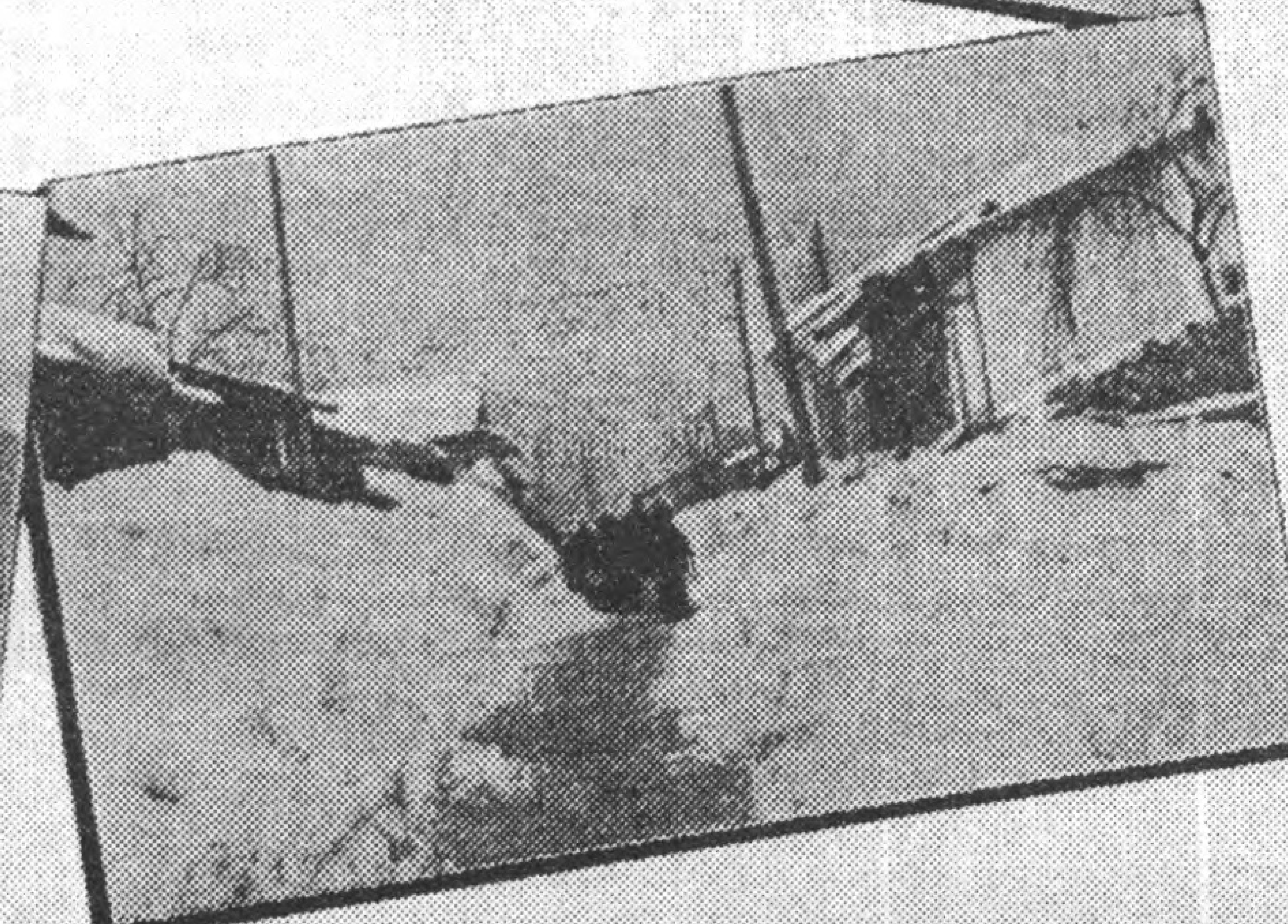
岩木山奥の院



田茂木野



浅虫海岸裸岩



雪の青森市

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人中郁秋香著
華族女學校講師小野鷲堂書

新編書簡文例

本版半紙摺[illegible]六錢

新編女子書簡文例

本版半紙摺高尚優美本定價六拾錢郵税六錢

●書簡の文體は直に其人の品位を上下するに足るべく其人の智識を推測し得べきものなり斯の如く交際上貴重のものなれば一日も苟もすべからざるは論を俟たず本書の文例は現代の文豪中郁先生の腦漿より迸出せしもの一言一句津々たる趣味あり擬古に陷らず流俗に同せず繁簡宜しきを得眞に今日書簡文の好模範たり書は筆硯界の巨擘鷲堂先生の手腕になりしもの習字の龜鑑として上乘の書なり曩に新編女子書簡文例發刊以來女子大學校初め各女學校の參考書或は教科に採用され異數の世評を得たるは茲に贅せず今書新に男子文用の例を發賣す世の文筆に志あるの士は座右に一本を供せられよ

◎發兌元　東京市日本橋區箔屋町　前川文榮閣◎

●女生徒募集

授業開始入所當日

當女子部は女子に簿記法を教授し家計整理又職業としては計算事務員たらしむる外○華族紳士商家與員家計整理員○女學校其他出教授向女子部計算事務員紹介保證の依頼に應ず

東京市神田區裏猿町四番地

私立 銀行事務員養成所女子部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

わきが

根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**することを確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

肉體白色新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良最新式時計形文具兼用錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニツケル側十九形兩蓋開きにて一面は**文具**墨池肉壺檢印等を備へ一面は**錢入**銀貨金貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上等製八拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割增し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**

女鑑

第貳百六拾七號



明治三十五年の女子問題

歳云に暮れんとす、本年間に生出したる婦人社會及び女子教育に關聯せる問題と、之に對する感想とは、教育當局者は云ふまでもなく、我國婦女の前途を思ふ有志婦人、並に當事者たる諸孃子が歳暮感懷の重なる部分として、永く忘るゝ能はざるところなるべし。

女子といへる問題が社會萬衆の注目を牽きて、その批評の中心點となりしこと、今年の如きは、蓋し我國稀有の出來事なり。此點よりして觀察するときは、本年は寔に日本婦人に於ける一大時期なりといふを得べし。而して此の一大時期は婦人社會將來の盛衰に關するチレンマたらざるべき乎。女子教育の

浮沈に關するクリシスたるなきを得る乎。是れ一個の重要問題なり。

舞踏會の盛んに流行したる明治廿一年の頃にありては、上流婦人が或る事情の爲に要求せられたる所のものは英佛語なりき。西洋禮式なりき。新形流行のドレスとボンチットなりき。凡ての西洋風の嗜好にてありき。而して此の流行は未だその要求に對して十分の報償を拂はざるに、早くも一大打擊を蒙りて反對の叫聲の裏に埋沒せられ、復び其の頭を擡ぐるを得ざりき。且つ之と同時に社會は復び舊體に返りて、徒らに日本婦人固有の美を稱揚し、あらゆる西洋主義の敎育、文學、嗜好等を斥ぞけて、之と齒するをすら耻づるの有樣となれり。されば、之より後數年間、人の復た西洋主義の女子敎育を說くものなし。

一時特殊の事情の爲めに、或る一部の婦人間に行はれたる流行に對しても、社會反動の勢力の甚だ銳く且つ强きこと實に斯の如くなりしにより、一般女子敎育の之が爲めに蒙むりたる損害も亦、實に輕少ならざりしことは、心ある者の今尙は記臆して忘れざるところなり。されど一面より見るときは、一打擊の爲に脆くも挫折したる當時の女子敎育が、如何に根帶なく、基礎なく地盤なくして、其の力の極めて薄弱なりしことも亦た想像するに足るべき也。故に此點より見るときは、當年の女子敎育の程度と進步とが、甚だ薄弱なりし爲め、容易に失敗を招きたりといふの寧ろ適當なるを信ず。

本年に於ける女學生問題は、一時の流行に對する反動にはあらざりき。特殊の事情の爲めに或る一部の婦人間に行はれたる嗜好に反して忽然起りたる打撃にてはあらざりき。過ぐる最近の數年間は女子敎育勃興の時代に屬し、女子敎育は一の流行の如くありて、大小公私の女學校は恰かも雨後の筍の如くに發生し、地方より都下に集注せる女學生は恰かも水の低きに就くが如く陸續として絶えざる有樣ありき。而して女子に關する著書、雜誌、新聞樣のものもまた漸やく世に公にせられ、昨年末より今年にかけては、女子の讀物の書肆店頭に排列せらるゝもの幾百種といふを知るべからず。斯の如くにして、兎にも角にも女子敎育は、根蔕を生じ、地盤を造り、基礎を固めて、將來の盛運を待つの域に達せんとしつゝありき。而かも大なる打撃は忽ち起れり。而て此の打撃は、女子に取りて女學生に取りて、女子敎育に取りて、最も痛切なる反動の打撃なりき。何となれば、女性に最も重んずべき品行、貞操、德義等に向つて其の鋒先を向けたればなり。地方在住の父母たる者、兄弟たる者、焉んぞ一驚を喫せざらむや。その子女を遠く東京に遊學せしむるの頗る危險なるを顧はざらむや。或は極端の觀察を以て、女子敎育なる者の品性を高うし、貞操を重んじ、德義を全うする所以の道にあらざるを臆斷して、敎育そのものは、子女に必要且つ有益なるものに非ずとの感念を起せしものなきにしも非ざるべし。

是に於て學政當局者は各女學校を巡視し、嚴重なる監督を爲して、敎師及び生徒を警戒し、警察官は風

紀董督の爲めに、女生の寄宿舍、下宿等を取調べて、弊風を矯正せんと力めたり。縱ひ事實はさまで大ならずとするも、斯くまで社會の表面に形はれたる問題とありし以上は、女子教育上一大恐慌を生せしも、豈に宜ならずとせむや。

斯の如くにして、明治三十五年の歳月は、その終局を告げんとす。來るべき三十六年こそ、我輩の尤も注意すべき時ならずんばあらず。本年を以て果して婦人問題に於けるヂレンマ女子教育に於けるクリシスなりとせば、盛衰浮沈の如何は今日以後に始めて其の實影を認め得べきものなれば、明年は女子教育當局者が、最も注目を怠るべからざる歳月たらずんば非ざるなり。

顧ふに今日の女子教育は舞踏會時代の如く薄弱なるものにあらずと雖も、反動の打擊もまた當時に比して强力なるが故に、局に當る者は、宜しく警戒を怠るなく、無事に此のヂレンマを通過し、無難に此のクリシスを切拔けて、眞正なる意味に於ける女子教育の發達を、來るべき光榮ある三十六年の天地に顯出せしめむことを期待せざるを得ず、吾輩は此に此の禍ある三十五年を送り、新に三十六年の歳月を迎へて、吾が女子教育が愈よ完全なる成效を現せむことを、希望して止まざるなり。

天に私覆なく地に私載なく日月に私燭なく四時に私行なし（呂氏春秋）



修德の必要を論す

東京帝國大學講師兼東京外國語學校講師
文學士　村上辰午郎口述

私は以前『道德の眞意義』といふ題で、道德といふものは、四角四面な、かたくるしきもの丶みではなく、日常の行爲に就て、道德、不道德といふ名稱を下し得るものである、といふことをお話致しました、が、今回は、尚一歩を進めて、何が故に、お互は、德を修め、道をふまねばならぬか、といふことを論ぜんと思ふのであります、いふまでもなく、お互は、自分の人品を高尚にせねばなりません、人品の高尚といふことは、一體どのやうなことから來るのであるか、と申しますれば、德を修め、道をふむによつて來るものであります。なれども、決して、自分のみのために德を修むるのではなくて、これが合せて、先代の人々に對する義務である、といふことを御承知なくてはありませぬ、如何樣なる故で、德を修め、道をふむのが、先代の人々に對する義務であるか、といふことを明かにせんため、これから、その理由を說明すること丶致しませう。

現今の我日本國家は、昔時の日本國家に較べて、進步したであるか、若しくは、退步したのであるか、と申しますれば、勿論、非常に進步發達して

ざゐりました、ところが、時には、現今の我邦は、古き昔の頃よりは、道が廢れ、德がなくなつてきたかのやうに歎じ、今の有樣を改良して、昔の有樣のやうにせねばならぬやうに述べらるゝ人があります、が、これは大變なる思違であります、成る程、昔の時代には、楠正成のやうな忠君愛國の臣が出た、または、近江聖人中江藤樹のやうな學德兼備の人が出た、又二宮尊德のやうな道德實行家が出た、今の世の内では、とても、このやうな人は眼に附かない。それ故、今の世の中が退歩したと申さるゝのでありませうか、若しも、かゝる理由を以て、今の世が退歩したと申さるゝならば、それは、大なる誤念であります、今の世の中に於て、特別人眼につく位な道德家がないのが、これ明に世の中一般の道德心が進んだ所以であります。かくの如くに申しますれば、少しく奇妙にきこゆるかは知れませぬが、今譬を以てお話致しますれば、直ぐとその道理を御了解になることができます、一寸考へて御覽なさい、平原にあるところの小山は、左程に高くはないが、然かし割合に高く見ゆるではありませぬか、その高くなつてみゆる所以は周圍が低いからでありませう、ところが、山嶺相連る間にある高山は、左程に高いとも思はれますまい、何せなれば、周圍の山が高いからであります。昔は有德な人が出た、現今はかゝる人が出ないやうに見ゆるのも、これと同一でありませう。昔は世の中の一般の道德心が低くかつたもの故、特に有德な人があれば、直ぐと人の眼に附き易い。それから今の世の一般の道德心が高いから、特にこれと人眼に立つ位な人がないやうに思はるゝのでありませう。楠正成などの時代は、逆臣横行して、天下も亂れたる頃であつたのであ

りますから、正成のやうな忠臣の人があるならば、兵を擧げて逆臣を征伐し、心の中の忠を、行の上に現すことができます、ところが、現今の我が邦は、實に治まれる御世でありまして、誰れ一人として、忠の心のないものはありませぬ、兵を擧げて、敵を征伐し、以て正成のやうに、心の中の忠を、行の上にあらはす必要はありませぬ。このやうな譯でありますから、人の眼につかないから、今の世には、忠臣が居らない、道徳家が居らない、といふことは、どうしても申されませぬ。それからまた、遠くから物を見ると、奇麗に見ゆる者ではあります、が近くから見ると、奇麗なものでも、左程とは思はれないものであります。譬を以て申しませうか、向島の櫻の花の咲きたるのを、待乳山から御覽なさい、雲かとばかり疑がはれ、透き間もなく咲き滿ちて居るやうで、如何にも奇麗と思はるゝでありませうところが、樹の下に立ちて、同じ花を御覽なさい、待乳山で透き間もなく咲き滿ちて居るやうに見へたのは、如何にも不思議な位で、花と花、それから、枝と枝との間は、透き間ばかりでありませう。又、油繪も左樣でありませう、少し遠ざかつて見ますれば、殆んど實際の景色を見るやうに思はれますが、近寄つて見ますれば、粗末なもので、見られたものではありません。今の世の人が、昔のことを思ふのは、丁度、遠くから花や油繪を見たと同樣で、現に透間があるのに、それを見出すことができぬ、實際粗末なものでありながら、それを美なりと思ふのではありますまいか、どうもさうであらうと思はれます。それ故眞にその昔の時代に生存して居つたあらば、今の人が思ふ程に道徳が高かつたでもありますまい。一體このやうな譯でありますから、人の

眼に立つ程の有德な人が現れないから、それ故、今の世が、昔より退歩したとはいはれませぬ。

なれど或る一部の方面の人々で、隨分狡猾な手段を行ふ人もあります。智識が進めば、惡しき智に長ずる人も出できます。現今我邦の智識の進歩は、昔に比して非常なものである、といふことは、これは、何人も疑を容るゝことの出來ないことであります。それと同時に、隨分猾智に富みたる人があることは事實であります、然らば、或る一部分に於て、此の如き惡智に長ずる人があるから、それ故世の内一般の道德心が廢れた、とこのやうに申さるゝのでありませうが、これも決してさうは申されますまい、一部分のみを以て、全體に説き及ばさんとするのは、これは論鋒を過つたるものであります。たとへば、商人社會の信用がなくなつたといふことがあるならば、それは、商人社會だけが、その道德的方面に於て、退歩したので、決して日本の國家全體が、退歩したものではありませぬ。これも一つの譬を以て申しますれば、容易に御了解になることができませう、先づこゝに一の果物の樹があると假定せられよ、そして、當年その樹に生じたる果物は、先年よりも大であるなれば、その果物につくところの虫も、また大であるかも知れません、虫が近年よりも大であるから、それ故その果物は近年よりも小であるとは申されますまい。果物は果物、虫は虫で、自ら別でありませう。現今惡智に長ずる少數の人は、丁度果物に生じたる害虫のやうなもので、かゝる害虫は、吾人がつとめて退けるやうにせねばなりませぬ、なれども、かゝる害蟲あるが故に、全體の國家が、退歩したなどのことは申されませぬ。

昔時と現今との風俗習慣等比較して見るなれ

は、明に今日の道德心が高まつたことを知ることができます、今一二の例を示して見ましやうか現今は昔よりも大に人の生命と權利を貴ぶやうになりました。これ明に道德心の程度が高まり、又その範圍が廣くなつた證據であります、昔は人の生命を輕んずると實に甚だしく、例へば一國の主とでもいふべき地位の人であると、自巳が貴重なる物を、その臣下が破損したとか、又は紛失したならば、忽ち一刄の下に二つとせられ、他から見るものも、それを以て無慘であるなどは、少しも考へず、君の御重愛の物品を破損せば、殺さるゝは當然であるといふやうな考であつた又平民であるならば、士族に過言をいふたとて、そのため殺さるゝとも、嚴にその殺した人を罪するでもなく、士族が平民を殺したものであるからとて、大目で見て置き甚だしきは、斬棄御免とあつて、求めてその罪を問はなかつたこともある、要するにこの頃は、名義上の階級のために、倫理上尤も大切なる人格といふところへ、氣が附かなかつたものといはねばなりませぬ、このことを換言すれば、人人互の權利が、平均しなかつたものと申さねばなりませぬ、殊に男女互の間に於ける權利の不平均であつたことは、實に驚くより外はありませぬ、これまであまり女の權がなかつたもの故此頃になつて、その反動として、男女同權であるとか、甚だしきは、女尊男卑であるとか、理屈にも合はぬ非理屈を述べ立てるやうな、極端な論者が出來ましたが、これらはたゞ笑ふべき說で、眞に男女同權で、世の中が立つてゆくものでもなく、それから、女尊男卑のいはれもありませぬが、兎に角、現今は女子の權利が非常に擴張してきたのは、實に喜ぶべきことであります、否かくならねばなら

ぬことであります。これも男女互の人格といふ考が高くなつてきた結果即ち一般の道德心が進んだためであります。昔は女子は夫を喜ばすべきものであれば、教育などを授くべきものでない、などの考が熾でありまして、これまでの女子教育ともいふべきものは、丸で教育といふ程の名義も附けられない位で、男の子は立派に教師に就て教を受けたが、女子はたゞ母若しくは祖母より家事向きのことを習ひ他は夫を喜ばせることをつとめて習ふたまでゞあります『子なければ去る』などの教のあるのを見ても、如何に女子は壓制的に取り扱かはれたものであるか、といふことが知れるのであります。中江藤樹が鑑草を著し、貝原益軒が教女子法を著はされてより、多くの人が、女子教育の必要を知るに至つたとはいふもの丶、益軒の主義とても、今日吾人が意味するが如き教育ではなくて、矢張り夫に事ふることなどが主となつてあります。勿論、夫に事へる道を心得置くことは、如何にも大切であるが、それらの方面のみでは、妻たる人の教育としてはよからうが、女子としての教育としては、不完全であります、佛蘭西にルウソー（Rousseau）といふ教育學者がありまして、その人がエミールといふ教育上の書を著し、その終に、ソフイヤといふ女子を教育したことを書いてあります、エミールといふのは、これは男の子の名で、先づこのエミールを教育した方法を書し、次にエミールの配合者たるソフイヤを教育したことを書いたのでありますが、後の學者が、これを批評して、ソフイヤを教育した方法は、甚だ不足である、何せならばルウソー氏はソフイヤを以て、エミールの妻といふ眼で教育したものであるから、女子としての教育ではない、どうしても、女

子と妻と同一である、とはいはれない、と申して居ります。益軒が女子を教ゆる法も、ルウソーと同一の非難は免れまい、と思ふのであります。ところが、現今が女子教育が盛になり、各種の女學校のあるを見るのは、如何にも喜ばしいことではありませぬか。それから序であるから申しませうが、婚姻の風儀は古き昔は如何であつたといふことを知るならば、如何にその頃は、女子の權利がなかつたものであるか、といふことが知れるであります。一例を擧げて見ませうならば、私の古郷即ち石川縣金澤市のことでありますが、近年は大に止みましたが、數年前頃までは、妙な風習が行はれてありました、それは如何様なることか、と申しますれば、某の家に嫁入があると、いふとその近邊のものが、その家の前へ集り來り、嫁がその家に入るや否やドン〳〵と大小の石を、門へなりとも、店の内へなりとも、投げ込むところの、いはば、いたづら半分の風習がありました。それ故嫁入の家には、非常に注意をして居らないと窓からなりとも、大石を投げ入れられ、家具を破損することが、毎々であります。又門のある家であれば、嫁入の翌日見ると、門の戸は、甚だしく破損せるのが通常であります。それ故門の戸の破損せるので、昨夜この家に嫁入があつた、といふことが直ぐ知れる位であります。かゝる惡戲半分の風習は、如何なるところから起源したものであるか、と申しますれば、古郷の人が一般に言ひ傳へて居りますには、これは嫁が再びその家から去らないやう、石にて堅く打ち込めて置くのであるとのことであります。ところがその實、左様ではありませぬ。一體何處の國にでも、古き昔にはあつたことで、男が妻を得んとするときは、その女を奪ふ

てきたものであります、それ故その女を奪はれた家の人々は、腕力を以てその女を取り返へさんとし甚だしきはその男の住所までへも亂入したことがあつたので、金澤で石を投げ込むのは、全く古き昔に女を奪はれたる家の人が、男の家に亂入したときの形が、今に殘り、近邊の若者等が、以上の如き惡戯をするのであります、如何に古き昔とは申すものゝ女が物品同樣に取扱はれて、男に奪はれたといふことは、如何に、女子に權利がなかつたか、といふことが知らるゝでありませう。これらのことを思ふに就けても、今日は如何に女子の權利が高まつたか、といふことは明であります。

それから、又近年になつて、公德といふことを、八釜敷いふやうになつたのも、これまた、明に昔に比して、道德の範圍が廣くなつた、といふことを證據立てるものであります。何にも、昔あつた公德が、現今に至つて、欠乏したから、このやうに八釜敷いふのではなくて、昔は何れも私德であつたところが、昔は必要を感せなかつたところの、公德の必要を、現今の世の中が感ずるに至り、そこで、二三の人の口、或は、筆を借りて、斯樣に八釜敷いふやうに至つたものであります。

外に例を擧ぐれは、まだ〳〵澤山ありますが、あまり長きに失しても、如何かと思ふにより、それ以上の例は止めと致しませうが、兎角これらの例で、現今我邦の道德心は過去の時代よりも、進歩發達してきた、といふことは、御了解になつたでありませう、智識の上にも又道德の上にも、著るしき進歩を來たし、昔の日本國家ではありません、國家はたゞに年代を經るのみで、進歩發達するものでは、勿論ありません、昔は、花を咲かせ

たが、今は見る影もないものは、少なくはありませぬ、彼の印度の如きは如何でありませうか、その昔にありては著るしき開化でありました、西洋各國の未だ充分に開化せない頃、已に印度には、婆羅門などの學者が數多ありまして、今日から見ても、科學上の智識に一致せるやうな教は、少なくはありませぬ、それ位に、一時は開化をしたところの印度は、現今は如何でありませうか、英國人等の支配の下に服從して、眞の印度人は、その權利を伸ばすことができないではありませぬか。又ジユスは如何でありませうか、これも昔は立派な國でありましたが、今はジユス人なるものは、各地に散在せる迄で、土地はありませぬ。ところが、我日本は、建國以來　一天萬乘の天皇陛下を戴き皇統連綿として、國家は次第に進歩し以て今日に至れるものは、これ何に依て然るを得たるのでありませう。　御歷代御聖德の致すところたるはいふまでもなく、その外吾々先代の人々の修德勤勉の結果と申さねばなりませぬ、してみますれば、吾々、相互はこの立派なる御世に生れ出でたることを難有思ふと同時にまた先代の人々に對して、大にその志を感謝し尙も進んで、先代の人人の志を繼ぐことがなくてはなりませぬ。志を繼ぐとは、如何樣なことであるか、と申しますれば、先代の人々が、その當時の世よりも、進歩したる世を、吾人に傳へられたるが如くに、吾人はまた現今の日本國家を、一層進歩發達せしめんとして、子孫に傳ふることをいふのであります、このやうな道理でありますから、德を修むるものは、自己のためのみならず、合せて先代の人々、從て子孫に對して、必要欠くべからざるところの義務であることは明であります。古語にも、「國を治め

んとするには、先づ家より始め、家を治めんとするには、自己より始めよ』とある通り以上述べてきたところの道理が辨へられた以上は、先づ、智を磨き、身を修むることを怠らないやうにせねばなりませぬ、この道理は、どうあつても忘れてはならぬことであらうと思ひます。（完）

婦人の体育に就いて（承前）

土肥羊次郎

我邦婦人體育の不完全なる原因は甚はだ多いが、從來の家屋が少なからぬ弊害を與へるかの感がある。夫れは椅子腰掛の如き物に倚らずして疊の上に靜座する一事である、足部を屈曲して血液の循環を自在ならしめざるが如き、或ひは此の靜座の習慣が作る處の不性となり、一寸と座邊の物を執るにも成るべく起居せずして之れを果たさんとするが如き、遂には此の靜座癖の爲めに成るべく一室にのみ閉ぢ籠つて外出を厭ひ、我れから氣を沈鬱ならしめて病症に陷るか如き、確かに彼等が活潑有爲の性情に遠ざかる一因ではゐるまいか。加之我邦には一種の禮法なるもの古來より存して、少しく嚴格なる家に至れば戸障子の開閉より室内の歩行に至るまで、一として此の禮法に從ふが如き、又た來客の有無に拘はらず成るべく靜座して用のなき外には室内の歩行も爲さぬが如きは、最も著るしき弊害を彼等の將來に傳へはせざるや、禮儀を重んずるは可なり、然れども身體の發達を妨げてまでも、是れを重んずるの必要はあるまいと信ず。況んや明けても暮れても置物然

として座敷の中央に端座のみして、些しの運動もなさゞるが如きは吾人決して其當を得たるものとは思はれぬ。今少しく何とか工夫して殊更に運動と稱さゞるまでも、彼等の一擧一動が能く運動に適し、又た體育に叶ふべく家屋の制を改め度く思ふのである。疊を廢して板張りとなし、倚子を用ひ、寐臺を用ひ、天井を高くして光線と空氣の流通を宜くし、床下を高くして濕氣と腐敗せる空氣の充滿せざるべくなすは最も的確の改良法ならんと信ずるのである。我邦婦人の多くが、沈鬱症となり頭痛持となれるは運動不足、營養不良、消化不良等の原因もあるあらんが、一つは此の天井の低くして光線の遠さ、空氣の疎通せぬ幽暗なる一室にのみ閉ぢこもり居る結果に基くものである。又た彼のレウマチスとか寸白とか子宮病とかに常に侵害さるゝは、主として床下の低さ、其裡には少しも空氣の流通せぬ、濕氣と腐敗したる空氣とのみ充滿した家屋の内にのみ、常に起臥する結果であらうと吾人は信ずるのである。倘は此以外には服制の弊であるが、目下此點に着目する人士も漸くに多きを致し、餘り袖の長からぬ衣服に、廣帶を廢して之れに代ゆるに蝦色の袴を用ふるが流行し來りしは吾人の最も多とする處である。併し是れとても僅かに女學生の一部に止まれるが如くなれど、行く〳〵は大いに進歩發達する事ならんと信じつゝあるのである。是れに就き是非とも一言せねばならぬは、今日此の改良服制を用ひつゝある女學生諸子である、從來の如く腰部より胸腹部へかけて緊着した廣帶を用ひ居らざるにも拘はらず、靴もしくは履物を穿ちて路上を歩行する樣は、依然として舊體を脱却し得ざる一事である。兩足を内股に彎曲して前に俯し、宛かも家鴨の歩

するが如くに不格好に歩み行く一事である、斯くまで輕裝を用ひて尙ほ此の歩行振りをなすは、些細の事ながら何となく不滿足に思はれるものである。何に依つて然るか、他なし、全く家屋の制の宜しからざるに起因するものと吾人は思ふ。如何に外出の時のみ衣服を改めるとも、日常自家に在つて彼の疊の上に靜座のみしてありたらんには、勢ひ兩足は彎曲形を爲さゞるを得ず、故に彼等の歩する亦た決して舊時と異ならぬのである。要するに衣服家屋の改良は尙ほ車の兩輪の如きものにはあらざるか、其一を改めて其一を改めざれば殆んどその効をも見ざる結果に終りはせざるや、吾人は聊さか疑がはざるを得ざるものである。故に、女子體育の急を思ひ、婦人服裝の改良を思はるゝものは、此際宜しく大局に眼を注ぎ、僅々たる一小部分の根繼的改良に心醉滿足せずして、根本的

大改良の實を擧げ得べく勵行あり度きものである。否らざれば折角の改良も殆んど何の見るべき處なき結果を來すやも圖られぬ。百尺竿頭一歩を進めて斷行せられ度きは實に本邦家屋制の改良である、而かして其改良の結果が實に婦人の體育に容易ならぬ美果を收むるに相違ない事は、吾人の飽までも保證する處である。

次ぎには早婚の弊である、此の弊が多數の年少の婦人を驅つて如何に其の體育を不完全ならしむるかは明白なる事實である。聞く支那人は、本邦人と比して未開極まる不攝生なる人民である。然れども彼國婦人等の體格は、又た本邦婦人の如く脆弱ならぬは事實である、其原因は多く早婚でないからと或人は曰ふた、彼等の俗は妻を娶るにあらずして寧ろ妻を買ふのである、百金もしくは數百數千の金を婦家に贈らねば婦を娶る事は出來ぬ

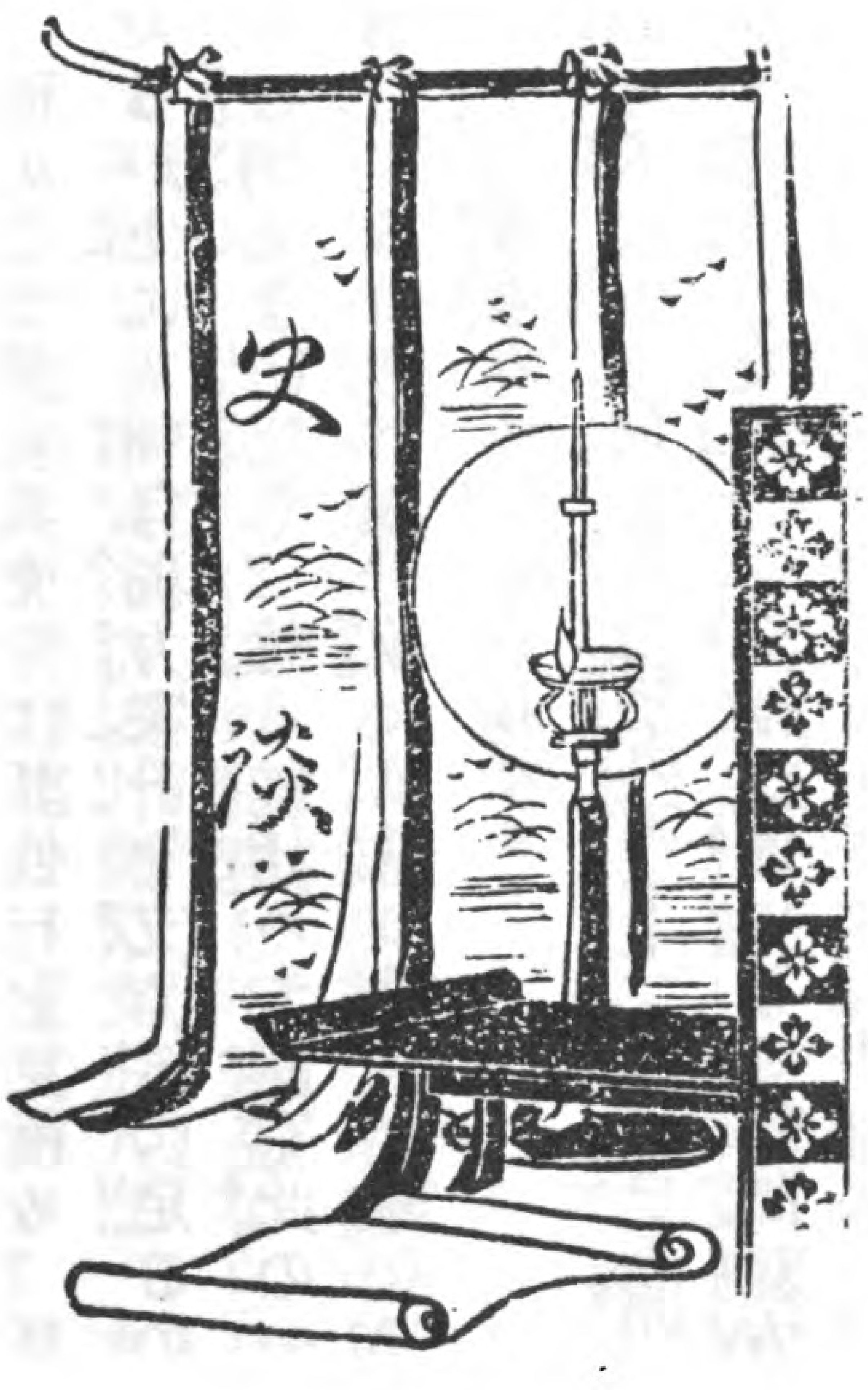
のである、故に赤貧の民は妻を娶る事が出來ぬ、然しながら人情生涯獨身の不幸を恐れて、孜々として働らき、鋭意專心黄金を貯蓄せんと力むるのである。宜なり、彼等の多くは故國を離れて遠く海外に漂泊し、如何なる賤業と雖ども辭するなく、如何に至難の事たるも避くるなく、其身を勞して厭はざるは一に此の妻を購はんとの初一念に外ならぬのである。故に、彼等が前半生の境界は妻を娶らんが爲めに稼ぎ働きつゝあるのである。茲に於いてか彼等は勢ひ幾年かの歳月を此の貯蓄の間に消さゞるを得ず、而かも彼等が其意志を起せるは何れも青年に達したる時期であるからは、晩婚となればとて決して早婚の弊は起さぬ理由ではないか。

之れに反して歐米人は爾らず、彼等は流石にも此の結婚を以て神聖なるものとして非常に重んずる者である、故に、其式は會堂に於て擧げ誓ひは神父に向つて爲すのである、而かも一度結婚するや法廷の判決を待たざれば單に一方の意思のみを以て自由に離婚する事は許さぬのである。果然、彼等は其當初に於いて之れを謹しむ事の大なる事を、而かして男女共充分に其性行を見極め、見極めたるが上にも各自獨力家計を支ふるに足るの學藝と伎倆とを研究し、然る後始めて能く此の一事を擧行するのである、故に早婚の弊あるなく、亦た離婚の數極めて僅少である。

本邦人は全く爾らず、媒介する人々の言を聞き、或ひは寫眞を交換し、又たは僅少なる時間双方の接近して以て見合と號するのである、而かも尚ほ男女一定の年限に達すれば以て忽地に之れを擧行するのである。故に其の離婚の多き、全世界に多く其比を見ざる程である。試みに一の統計を擧げ

んか、曰く、明治二十二年中の結婚は三十四萬四百五十餘にして離婚は十萬七千四百七十餘、即ち三割一分强に當り、三十年は結婚三十六萬五千二百餘に對して離婚十二萬四千餘、即ち三割四分の比例を示しつゝあるのである。之れを海外諸國に對照すれば、合衆國は僅かに四分餘、獨逸は一分五厘、佛國は一分二厘、英國は五厘といへる恐るべき差違を生じ來れるのである。

支那人と歐米人との結婚の結果は、事實に於いて甚はだ相酷似したるものあれども、其原因に至つては實に天地の相違を認むる事が出來る、我邦人たるもの此れに鑑みて、支那人を取らずして歐米人に學ばねばならぬは無論である、而かも捨てて取るに値ひせぬ支那人の風習すら、原因は兎に角、結果に於いては我邦今日の現狀よりむしろ數段の優を示しつゝあるに至つては如何、新興强國の國民を以て自任する我邦人たるもの、能く之れに對して辯ずるの勇あるか、萬一にも之れなしとすれば實に耻かしさの極みならずや。(完結)



佐野政言の母、(承前)

月巴道人

是より先き善左衛門は田沼父子に欺かれて大切なる家の系圖を取上げられ、剩さへ僞物を作りて

返却なしたるさへ其罪盜賊と擇ぶなく、まだ其上にも權威を弄して領地引替へ等を行なひければ怨み骨髓に徹し、如何に天下の老中たりとも、斯くの如き非道の曲者を此儘に差置なば、天下の政道の妨げとならん、若かず彼等父子の內一人を討取つて後世の害を除かんと決心なし、老母の一室に至り奴婢を悉く遠ざけて形を正し『母上、少々申上げ度存じまして』オヽ倅か、大層に改まつて何事か出來ましたか』ハイ、申上げて御嘆きを掛けますよりは寧そ何事も申上げまいとは存じましたが、又た熟々と考へますと無斷で諸事を計ひますも却て不孝に當らうかと存じて實は是れへ參じました』アー左樣ですか、何かは知らぬが其方の母ぢや、如何な事なと遠慮は要らぬ言うて下さい』ハイ、實は誠に去り難き一の大事出來致し、其爲に先立ますする不孝の段何卒御許容を願ひ度う存じます』意外の我子の一言に狼狽なすかと思ひの外片頰に笑みて身も動かせず『日頃から智慮分別も人に勝れた其方の口から出るならば能く〳〵の事であらう、又た武士が一旦斯うと決心したからは所謂も無う止るやうな母ではない、如何にも望み通り暇を遣はしませう』恐れ入た御決心忝けなう存じます、就ては一應申上て置ますが其譯は當時老中筆頭田沼主殿頭事、家系なきを恥とし竊に某の家の系圖借用を申込ども、外の品と異り大切の家寶なれば確く辭退致したる處子息山城守席に假托又た〳〵某を招き、田沼家の先祖が佐野家へ奉公せし事杯耻を捨て打明し、何卒系圖一覽を枉て承諾し吳れとの餘儀なき賴みに止むを得ず、先頃用立申たるに更に返却せず、度々催促に遣はせば不埒にも謀書を作つて某を欺き、剩へ所謂もなく此度の知行替へ、是みな彼等父子の計

らひ、怨み骨髓に徹したるも御老年の母上に禍ひを及ばさんかと夫のみに心を惹かされ、今日までは忍びましたが、此頃承まはれば、佐野家の系圖を盗みたる惡事露顯を恐るゝの餘り某の落度を見出し押片附ん結搆ある由、此上は是非に及ばず手を束ねて彼等の爲めに自滅を取るより我身を捨て彼を仆し、天下に蔓る禍ひの根を斷つが上への御奉公と決心を極めました、尤も家の系圖、知行替へとも遺恨は遺恨に相違なけれど、天下の大事に比べては風前の塵、取るにも足らぬ事ながら、某の外誰あつて彼等を挫ぐ者もなし、依て私の遺恨を幸ひ、父子の中いづれか一人を打果さば威勢も挫けて我意我儘も止候らはん、其上公儀の政道をも正されなば萬民の幸福、此上は最早や猶豫する處にあらずと決心はしたものゝ、扨て行末は如何かと思へば悲しさやる方なく、別けて御老年の母上の此先如何召さるゝかと夫のみ心痛致し居りまする』決死の勇士もしかすがに恩愛の情には脆く、玉なす熱涙に襟を浸して默然たり。

稍やあつて老婆は涙堂に玉なす涙を袖もて拭ひ襟を正して我子に向ひ『アー適れお心底、宜うぞ決心してくれた、世には疎き此母の耳にすら田沼父子の評判は聞えて居ります、天下の御用に立つ事なら何の止ませう、定命よりは生延びた自らの未練もなければ望みもない、決して此身は案じるに及ばぬが嫁女と孫娘、これの始末は如何する心得か』『ハイ、其儀は篤と勘考も附け置きましたから、一時里方へ戻さうかと存じます』『オウ〳〵夫れがよい〳〵、就いては云々に計ひなさい、又た男女の雇人どもコレ〳〵、後に禍のかゝらぬ樣手落なく致されよ、其後は自から一人踏止まつて耻かしからぬやう計らひませうぞ其所處は懸念なく

「ハッ、、何から何まで御注意の段忝けなう存じます」

斯くて政言は母に注意を受けたる如く、殿中の刄傷に先立つ十二日夫となく妻女を離別し、當年六才の娘もこれに伴なはせ、直ちに此段を組頭へ届けおき、領地引替を口實として用人以下の諸侍に暇を取らせ、小者端多に至るまでも後難なきやう取計らひ、扨てこそ三月廿四日母子一世の盃を汲かはして出仕なし、思ひのまゝに山城守を討果したるなり。これ政言の義勇は左る事ながら一には義烈稀に見るの母堂のこれを保護せるにも因れるならんと人皆彼を稱へざるは無かりしとぞ。

當時専ら江戸市中に流行せしものゝ二三を採れば、

『山城守手疵負ひ御疊大變よごれたれば、取替申すべきやと御作事方より伺がはれたる處扨てお

けまた序があらうから。』

『佐野ほどの者が山城を斬るに何ゆゑ後から斬つたらう』

『面の皮が厚いから後から斬つたのさ』

田沼どうしやうじ

『佐野がうらみは數々ござる諸家の金を取るときは世上むせうに詰るなり、佐野が尻を突く時は滅多無性に逃げるあり、進上の饗應は椎茸干瓢入相に生滅那落と響くなり、聞いて悲しむ人もなし、我も登城の雲晴れて親父の罪を數へあかさん。』

厄はらひ

『親子拂ひましよ〳〵、ヤアヲ今度の吉凶申さば上は混亂下は豐年、喜ぶ者は八百萬人悲しむ者は二三人、築地の老爺が百年目庄司が首へ繩をかけ伊豆守までサラーリ〳〵、御役あがりまし

よ〳〵。』

狂歌

山城の白の小袖が血にそみて
　赤年寄と人はいふなり
山城を討ちにきたの〻善右衛門
　はやくと駈けていき對馬どの

何れも皆な田沼父子の非政を怒らざるはなき程なりし、尚ほ頗ぶる巧みなるもあれど如何せん言辭卑猥に失して錄すべくもあらざれば省く事とはなしたり。

斯て政言は刄傷の當日、即ち三月廿四日より揚屋入りとなり、大目附牧野大隅守、町奉行曲淵甲斐守、御目附柳生主膳正の三名掛りを命ぜられ、取調の結果四月三日傳奏邸へ召出され左の申渡しを受けたりと。

其方儀亂心とは申ながら殿中に於て田沼山城守

に手疵を負はせ右疵にて相果候に付重き罪にも宛行ふべきの處格別の御情を以て切腹仰付られ候者也

政言滿面に笑を含み有難く御受に及び、其場を退ぞき豫て用意に及びたる淺黄の上下白小袖と改めて切腹の場にとは臨みたり。

檢死としては御目附山川下總守、御徒目附米若政七、萩藤右衛門、工藤八右衛門、町與力藤田助十郎、田頃忠五郎、御小人目附神田德右衛門、本介錯渡邊茂兵衛、高木伊助、添介錯蘆部九郎次、三方持杉山幸助等なりし、頓て杉山白木の三方に九寸五分を載せたるを差出す、政言受て押頂き我が前に置き兩肌脫いで、胸押ひろげ、例の短刀を逆手に持て介錯の人々に打向ひ『何卒今某しが口吟む一首の辭世、老婆の許まで御傳へを願ひ度し』とて空を仰ぎ、

消えて行く雪も民をばあはれみて
天理にかなふ今日の嬉しさ

二三遍繰返し靜に左りの脇腹に突立て丶もの丶見事に切腹なし、兩手を合せて南無と一聲俯伏したり。稀れに見る殊勝の最期と檢死一同も落涙なせしとは左もありなん。斯くて遺骸は同僚輩の願ひに依て下渡されたれば、早々菩提所なる淺草東門跡寺中神田山德本寺へ埋葬なせしと、法名は『元良院殿釋以眞大居士』と稱する由なり。扨も老婆は小女と共に一時繩にはかけられしかど、上役よりの沙汰とあつて直樣許され、兩人共親類預けとなり居りしが、前記の辭世と共に政言最期の光景を傳へ聞き、嘆きの中にも我子の勇氣を喜び居りしと、氣節を尙ぶ武士の母としては得易からぬ烈女と云ふべし。

(をはり)

シヤトブリアンの事を記す(つゞき)

菊地雪子

母君は多年かく夢想したる末遂に兒をドール中學校に入らしめたり、此に於て、シヤ氏は傳來の記臆力を發揮するの機會を得たり。校舍の例として每夜生徒に祈禱を勤めしめ、然る後校長自ら名家の傳記言行錄を讀み上げ、終りて生徒に指名して、口答にて之を誦へしむ、然れども生徒等は日々の遊戲奔走に疲勞し、夜に入れば睡眠を貪りていづれも指名せられんを恐れ、師の目を掠めて我先にと告白室(罪を懺悔する所)に逃げ入るを常とせり、然るに一夜シヤ氏も亦急ぎ此處に遁れしに、校長之を認め、彼をして他の生徒の訓誡に供せんと欲し、暫時「マシヨン」の演說集篇を誦して後、不意にシヤトブリアンを指名したり。此時居

眠せる聽者のみ多かりしかば、答へ得る者は實に僅少なりしにシャ氏は年に似氣なく難解の散文を遺漏なく誦讀せしかば、校長の感嘆一方ならず、其の報賞として翌朝食事頃まで睡眠を許されたり朝寢好きなるシャ氏には斯る報賞は如何ばかり喜しかりつらん。

母君は固より兒をして僧たらしめんと心に誓ひしかども氏の中學を卒業したる時には敢て之を強ひざりしは卓見と謂ふべし。母君は兒が處世の方法を撰ぶとに就きては、其の志すところに任せて強て勸告したる事とてはなかりき。故にシャ氏自らも言行錄に記して云ふ

『一夜眠に就きしに、母君は我寢床の側近く來り給へり、そは余が將來の目的を定めん時期の來りしかば、母君もわが前途に就き幾多の計劃を成し給ひたればなり、母君仰せ給ふやう、我汝が一たび宗門に入り、後に破誡の僧と成るを見んよりは寧ろ初より俗人たるを好むものなり』

と母君の溫良柔和にして思慮深かりしことは、これにても知らるゝなり。

シャ氏は母君最初の希望の如く僧とはならざりしかども、我に宗教を授け吳れたる母君を思ふの念は、時々刻々其心を離れざりき。氏の信仰は母に對する謝恩の心より出たり、故に氏自らも語りて曰く、

『我信仰は一片の心より出でたるものなり、我は淚を流しつゝ信せり』と。

果せるかな、母君死去の凶報と、姉君の書狀とに接するや、シャ氏は感激の情に堪えず、その嘗て天使と呼び、聖女とまでも敬ひたる母君の遺言を見て嘆じて曰く、

『母君はその言動性質に就きて見るも、愛嬌ありて爽快温順に在せしかば、確かに至美至粋の家庭を造り給ふべかりしは、一度父君に酷待せられては爛熳たる眞美の俤は消えて、靜にに其幽居に想を練り膽を碎きつ、七十二歳の長き月日を暗室に過し給ひ、遂に最と粗末なる寢床の上に死去し給へりしは、遺憾の極みあり、其の臨終に及び姉君に囑して余をその深く信奉せる宗敎に歸依せしめんことを勸められたり。然るに姉君の書狀が、余の許に達したる時は、はや既に姉君も亦此世に在らざりき。嗚呼墓所より出づる二人の聲を聞きて、われ爭で感動せざるを得むや』と、

原來シャ氏が如何なる心より、宗敎を信奉したるかに就きては學者の間に區々の議論ありて未だ一定せざれども、自身一個の確信より出でたりと云ふよりも、幼時の敬虔なる紀念より出でたりと云ふ事は、確に憑據ある說あるが如し、且此說に據れは氏の

『慈母は我をして加特力敎を離れしめざるやう努め給ひたり云々』

の言も亦益々根據あるを見るなり、蓋母君在世の時は、家庭及宗敎上の祝祭には、熱誠を込めて愛兒の上に天の祝福を祈れり。されば此等の事柄は深くシャ氏の心に印して、終身忘るゝ能はず、後日屢々母君の事を想起する每に書き記したる如く

『我名譽幸福は慈母の賜なり、そは吾母は我をして宗敎を離れしめざるやう務め給ひたればなり』

と語りし所以なるべし。また文學の嗜は、シャ氏の家に於て世襲なるが如し、叔父君二人あり

一は學者となり、一は僧となりしが、何れも詩を好み、又兄君も歌道に名ありて、姉なるルシルは天才ある詩人なりき、尼になりし姉君にも又隨筆ありて、世人は大方ならず之を珍重したれども、姉君自ら亂筆也と稱して謙遜せり。然れども是れ謙遜の辭にして、實は甚だ誦讀すべき價値ある美文なりき。

猶茲に一の面白き事ありて、殆どシャ氏世襲の好癖となれるは、猫を寵愛する事なりき、年老いたる叔母君が猫と共に他に移轉せしに、其猫大に繁殖して、歸省せる時は、一大荷物となりぬ、然るに途中偶々一疋の猫誤つて海に陷りたれば、六フランを與へ、人をして之を救はしめたりと云ふ六フランは當時に於て大金なりき。猫は都合十四疋なりしに、シャ氏は悉皆之を遺物として受けたり。紀元千八百二十四年シャ氏瑞西逗留の際に記せるものを見るに

『痩せ衰へたる一疋の黒猫が、小魚を獲らんとて足をすべらして、大桶の中に陷りぬ、此時桶には、池水滿てり、我は之を見て無比の氣晴としぬ』

と。

(たばり)

阿佛尼の傳

文學士　吉丸一昌

(一)　鎌倉時代の文學

十六夜日記を讀みたる人は、著者阿佛尼の名を記臆するならむ。阿佛尼とは剃髪後の名にて、また北林禪尼ともいふなり。佐渡守平度繁の女にして、若き時、順徳天皇の皇后安嘉門院(高倉天

皇の皇孫女邦子内親王)に仕へて、右衞門佐といひ、後に四條と名のれり。後、藤原爲家の後妻となりて、二男一女を生めり、紀内侍、阿闍梨慶融律師源承、爲相、爲守是なり。前妻の子に、已に爲氏、爲教ありて此十六夜日記は、實に繼子たる爲氏が、父爲家の病死せしに乘じ、幼弟の讓受けたる和歌所の領地を奪ひたれば、是を鎌倉の政所に訴えんが爲に、出で立ちたる時の紀行文にして情信に、辭巧に、一字悉く一涙にして、讀む人もまた泫然として袖を濡すを覺ゆ。阿佛尼は此外に、夜の鶴(一名阿佛口傳、群書類聚第二百九十二卷)といひて詠歌の方法を述べて、歷代の勅撰和歌集を評論したる、消息文體の文章と、めのとの文(一名庭の訓群書類聚第四百七十七卷)とて、其女紀内侍に、座臥進退の末より、女子道德の心得ともなるべき事を、反覆丁寧に書きつらねたるものと、うたゝねの記(群書類聚第三百三十一卷)とて京に宮仕へしてありける時、契りし人に忘られて、薄命を嘆ち幾度か身を無きものにせんと悲みまどひ、はては、父につれられて、遠江の國にさすらひ、まもなく、育みし人の病の音信に、またまゐりのぼりし折の日記にて、はかなく哀に書きなしたるものなれども孰も文章としてはさまでの名文とも見えず、十六夜日記の感慨淋漓として痛切を極めたるに似ず、冗漫にしてくだくだしく、いたく洗錬を缺ぎて、殆ど同じき人の手とも見えざるほどなり。されば、げにや、阿佛尼の名は、十六夜日記一篇の紀行文によりて、芳しき名を百世に垂るゝものといふべきなり。

阿佛尼は、弘安六年四月八日死去せるよし、屋代弘賢が輪池叢書の阿佛眞影の記といふに、死去の年月は、今まで分明ならざりしが、ゆくりなく

も、舊記を得て知ることを得たるなりとあれども、其四月八日は、佛世尊の誕生日なれば、同じく阿佛といふやう、思ひ付たる洒落の戯ならずとせんや。そはともかく弘安六年の死去とすれば、徒然草の著者、兼好法師の生れたる時にして鎌倉幕府は、北條時宗の執權にて、かの元兵十萬を博多の沖に擊破したる、翌々年なれば、順德天皇の皇后安嘉門院に仕へたりといふより考へて、其在世は鎌倉將軍源實朝の末年よりかけて、六七十年の間なりしならむ。

されば、紀元千五百年代醍醐天皇の朝、遣唐使の止められてより、彼我の交通全く絶えて、漢學の勢漸く振はず、大學國家の制も、いつしかに廢れ、僅に北條氏の金澤文庫のみ曉天の一星を望むが如き有樣なれば、漢文は殆んど其格を失し、遂に和漢混淆の異樣の文章起り、宮廷の裡にありし中古文學は、今は政權と共に、全く武家に移りて、思想を文字に寄するものは、貴紳宮媛のみならず、武人剛健の氣を以て、公家の優雅の風に雜へ、微妙莊嚴なる佛敎の想を以て、激しき盛衰の跡を記すに至り、文武和合し、上下都鄙相融和して、剛壯なる漢語、悽哀なる佛語、力ある俗語を利用して、奔放自在なる、特種の光彩を放てる鎌倉文學の盛世にして、是を譬へは山城三月、春濃にして、晴暉に媚び、芳草名花、天地を埋むるの境を過ぎて、王立する千峯の間に入り、遠く雷霆を聞て萬壑に對するが如きの觀あり。見るべし、保元、平治物語は、質實に、源平盛衰記は、莊麗に、平家物語は、淸婉に、曾我物語は、悲壯に、孰れも字句雄渾、覇氣を帶びて、さながら當時の人を見るが如きを。然れども、宮廷の公卿貴族及是に緣故ある一派のものには、尙いまだ中古

文學の面影を止めて、鏤刻彫琢、艶麗閑雅の文を殘したる鴨長明の方丈記あり、藤原信實の今物語あり、橘成季の古今著聞集あり、筆者知らず の十訓抄あり、西行法師の撰集抄あり、女流にては、辨内侍の日記と、阿佛尼か十六夜日記ありて、吟花唱月の奢俗に似たる多涙多情の文字を見るなり。

故に阿佛尼か文を見れば、平安城裡の風流士女が名殘を留めて、楊柳風に堪えざるの趣あり十六夜日記を讀めば、子を思ふ親の心の闇には、吾も不覺の涙にくれまどひ、袂を濡して、三千里故國の天を仰いで實に嗚咽に堪えざらしむ、いでや、其作者阿佛尼とは、如何なる人なるか、以下章を追うて是を說かむ。

（二）阿佛尼とは如何なる人か

阿佛尼とは、剃髮後の名にて、また北林禪尼ともいふなり。若き時、順德天皇の皇后安嘉門院（高倉天皇の皇孫女、邦子内親王）に仕へて、右衞門佐といひ、後に四條と名のれり。後藤原爲家が後妻となりて、繼子爲氏、爲敎のあるが上に四男一女を生めり、紀内侍、阿闍梨慶融、律師源承、爲相、爲守是なり。

阿佛尼の家系は、世には葛原親王十四世の孫、但馬守ともなり、また佐渡守ともなりたる、平度繁の女なりとすれど、是は、續古今集と十六夜日記とに、父平度繁朝臣とあるによりて、かくはいふなれども、十六夜日記の遠江の國までは、むかし父と共に曾遊の所なりといへる、其父なる人は、轉寢の記の遠江紀行の條には、『後の親と賴むべき、ことはりも淺からぬ人しも、遠つあふみとかや、聞くも遙けき道を分けて、都の物詣でせ

むとて、上り來りたる』人にて、平度繁は、實に其後の親と賴むべき人にあらずや。されば、出立の曉に、『人は皆起きさわげども、人知れず心ばかりには、さても如何に謫らふる身の行方にかと』心細き事のみ打歎き、其任所遠江なる濱名の浦の波あらき潮の海路のどかなる、水うみの落ちいたるけじめに、遙々と生續きたる松の木立など繪にかゝまほしきほどなるにも、如何なるにか心とまらず。一月も經ぬまに『人の思ふらむことゝものさはがしく片腹痛けれ』ど、また都に立ち皈り、立ち出づる時にも『こゝとても又立皈らむことも難し』とて、父なる人の家を立ち出づるありさまなどを思ひ比ぶれば、普通の父子の關係にはあらざるべしと信ず。倘想像を逞うすれば、姉なる人は、中院の中將に嫁ぎたれど、妹は、阿佛尼と同じく少くして安嘉門院に仕へ、後には尼となりたる事なれば、思ふに、其實父實母の家は、已に早く頽落し果て其身は、或は遠き姻戚に養はれて、即平度繁に子として養はれたりしにはあらざるか。孰にしても幸福少き家庭に育ち、父といふ平度繁の家にても、實に當時は源氏一族の世にして、政權武權共に鎌倉にあることなれば平族の流を酌めるものは、素より榮達のたよりあるべくもあらず、不遇にして餘裕多からざる廷臣の女なりしならむ。度繁と共に、任國なる遠江の國に赴きたる、紀行文のうたゝねの記に、在所の有樣を記して曰く、

おちつき所の樣を見れば、此處彼處に少しおろうなる家居どもの中には、同じ茅屋ともなど流石に狹からねど、果敢なげある葦ばかりにて結び置ける隔てども、かげとまるべくもあらず、假初あれど、げに宮も藁屋もと思ふには、かく

てしもなか〳〵にしもあらぬさまなり。

とありて、勢もなく、力もなき衰殘の廷臣が、任地にあはれある生活を營めるの有樣、思ふべきなり。また同じ日記に、其宿りを出で立つ時、名殘にとて

忘るなよあさぎの柱替らずば
又來て馴るゝ折もこそあれ

門衰へ祚薄うして、煢々孑立し、孤影相弔ふの窮狀、げに憐れむに堪へたり。

また新拾遺和歌集の中に、題知らずとして、

露ながら漏りくる月をかたしきて
鳥羽田のいほに幾夜ねぬらむ

生家の平家には、外に兄弟などのありしものか、詳ならねど、前にも記せる如く姉妹は二人ありて、姉は、中院の中將といひし人の妻にして、今は三位入道となりて夫妻共に佛門の人となり。妹も阿佛尼と同じく、むかしは、安嘉門院に仕へたりし人なりといへど、其委しきを知るによしなし。其三人の贈答は、載せて十六夜日記にあり。姉なる人には、其幼兒の哺育を頼みたるものゝ如し。

姉君に、幼き人々の事、さま〴〵にかきやるほど、例の浪風はげしく聞ゆれば、たゞ今あるままのことをぞ書きつけゝる

夜もすがら涙も文もかきあへず
いそこす風にひとり起き居て

又同じさまにて、古卿には戀しのぶ弟の尼上にも、文奉るとて、磯物などのはし〴〵も、聊包みあつめて、

いたづらにめかり鹽燒くすさびにも
心やなれし里のあまびと

ほど經て、此姉妹二人のかへりごと、いと哀に

て見れば、姉君、
　玉章を見るに涙のかゝるかな
　　磯こす風はきくこゝちして
其妹の君も、めかり鹽燒くとある返事、さまざまにかきつけて、人戀ふる涙の海は、都にも枕の下にたゝへてなど、やさしくかきて
　諸共にめかりしほやく浦ならば
　　なか〳〵袖に波はかけじを
つゝましくする事どもを、思ひつらねて書きたるもいとあはれにもをかし。
京なる二人の姉妹に、憂を分ちて、共に海藻刈り鹽燒く浦の辛きうき世を嘆つが中にも、まだ世に馴れぬ若き妹の心には、ひとりにこそあれ、諸共に、あらば海士の苅藻に思ひ亂るゝ折はありとも、なか〳〵に、慰むよすがもあらんをとて、つゝましくひと聞き憚るみそかごとをさへ言ひおこして、京の噂を傳ふるも、思へば涙のたねなめり。

安嘉門院に宮仕へしたりけむは、何時頃なりしか、知るによしなけれども、うたゝねの記の成りたる當時なりしは、勿論にて、此時深く契りし人もありて、打ちしきる夢の通路は、一夜ばかりの途絶もあらざりしかど、いかに移り如何に染みける心にか、月草のあだなる色のさても恨めしや。
　人知れず契りし中の言の葉を
　　あらし吹けとは思はざりしを
歎きつゝ身を早き瀨のそこをだに
　知らずまよはむ跡ぞかなしき
憐むべし、薄命の佳人、失戀の痛を受けて、閨愁萬斛の涙を垂れ、果ては、老いたる人の妻となり纎々しき人の母となりて、家庭の紛糾解くによしなく、終に母子訟廷に相爭ふの不幸となり、身を

終るまで、間關流離、涙の乾く暇なく、憂愁身に纏ひて、薄命の生涯を終りしなり。

此の如く、困厄の家に生れ、失戀の恨に傷つき家庭の不和に世を短くしたる其一生の行路は、實に慘憺を極めたるものといふべく、殊に年老いて遠く他の國に至り、客死の悲みに逢ふが如きは、何等の慘絕ぞや。

思ふに其鎌倉に發足したる時は、爲相は十五歲爲守は十三歲の幼童にして、是を殘して、獨り遠國に出で、訴訟を法廷に試み、衰老の身を以て、永く客旅の空に留まるを見れば、氣象雄々しく才發有髯の人を凌ぐの風ありしならむ。

我子ども君につかへむ爲ならで
渡らましやは關のふぢ川
おのづから傳へし跡もあるものを
神は知るらむしきしまの道

一念己に勝を制して、毅然として自ら守るところあり訟庭の舌鋒如何に鋭かりけむ。

ゆかしさよそなたの雲をそば立てゝ
よそになしぬる足柄のやま

是れ鎌倉に下らむとして、伊豆の國、國府を經て、箱根路にかゝり、遙に足柄山を望みて、作りたる歌なり。巍々たる峯巒高く雲の上に拔いて、低く群山を壓するところ、知らず、刀自、自ら贊するものあらざるなきか。

かく氣象健々しく、山の峭嶸たるに似たるか如しと雖も、其文字は多感多涙にして、讀むものまた自ら涙を催す。かの轉寢の記に見るところによれば、深く契りし人のいつしか疎くなりてより懊惱の思日に亂れに亂れては、

歎きつゝ身を早き瀨のそことだに
知らず迷はん跡ぞかなしきと

と、かたみにとて、そぎ落したる髪と共に、挾箱の中に入れて、嵐山の奥に世を遁れて、尼寺に身を潜め、昨日まで故郷の庭もせに、憂さを知らじと秋風は、今は法華三昧の峰の松風に吹き通ひ、眺むる門に面影と見し月影は、靈鷲山の雲井遥に心を送るしるべとなりて、

捨て出てし鷲の御山の月ならで
たれをよな〳〵戀ひわたりけむ

と、うき世の絆を全く切り果てつと歌へども後庭に打ちなびく竹村の音を聞けば、またもや、そゞろに恨めしきつまとなりて、世縁なか〳〵に絶えはつべうもなしや。

世と共に思ひ出づれば呉竹の
うらめしからぬそのふしもなし

と、宵曉の閼迦、怠らず汲むとこそ思ひ定めて來しものを物思へば、戀しさぞまさりける。假の世の夢の中、暗きより暗きに辿らむ長き惑ひを思ふにも、いとせめて、悲しけれど、心は心として猶思ひ馴れにし夕暮の眺めに打ちそひて、ひとかたならぬ恨もなげきも、堰きやる方なき胸をば、人知れず書きながして、獨心やりに怨ずるあり。

みちのくの壺の石ぶみかきたえて
はるけき中と成りにけるかな

此嵐山の奥に住みけるうち、命も危きほどなる病起りたれば、こゝを出でむとて、立ち出でたるに、途にかねて怨じ恨みたる戀ひしき人に遇ひたりけり。阿佛尼自ら當時のことを記して曰く、

おたぎの近きところにて、果敢なき宿求め出で移ろひなんとす。かくとだに聞えさせまほしけれど、問はず語りもあやしくて、泣く〳〵門を引き出づる折しも、先に立ちたる車あり、さき

花やかにおひて、こせんなどこと〴〵しく見ゆるを、たにばかりにかと留めたりければ、彼の人知れず恨み聞ゆる人なりけり。顏知るき隨身などまがふべうもあらねば、かくとは思ひ寄らざらめど、そゞろに車の中恥かしく、はしたなき心地ながら、今一度それとばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくも哀れにも、さま〴〵胸靜かならず、遂に此方彼方へ行き別れたまふほど、いといたう顧みがちに彼處に行きつきたれば、曾て聞きつるよりも、あやしく果敢げなる所のさまなれば、いかにして堪え忍ぶべくもあらず。暮れはつる空のけしきも、日頃に越えて心細くも悲し。

心あるもの何とが容易くは、世を捨て果て得べき、しかも、其契りは疎くこそあれ、なほ戀しき人は同じ世にあるものを。ま垣の谷川は、うき世を隔つれど、此川水の流の下には、むかし人知れず分けて通ひし波の音の、今も立つらむと思へば只今のやうにも覺えて、是も

思ひ出づるほどにも波はさはぎけり
うきよを分けて中川の水

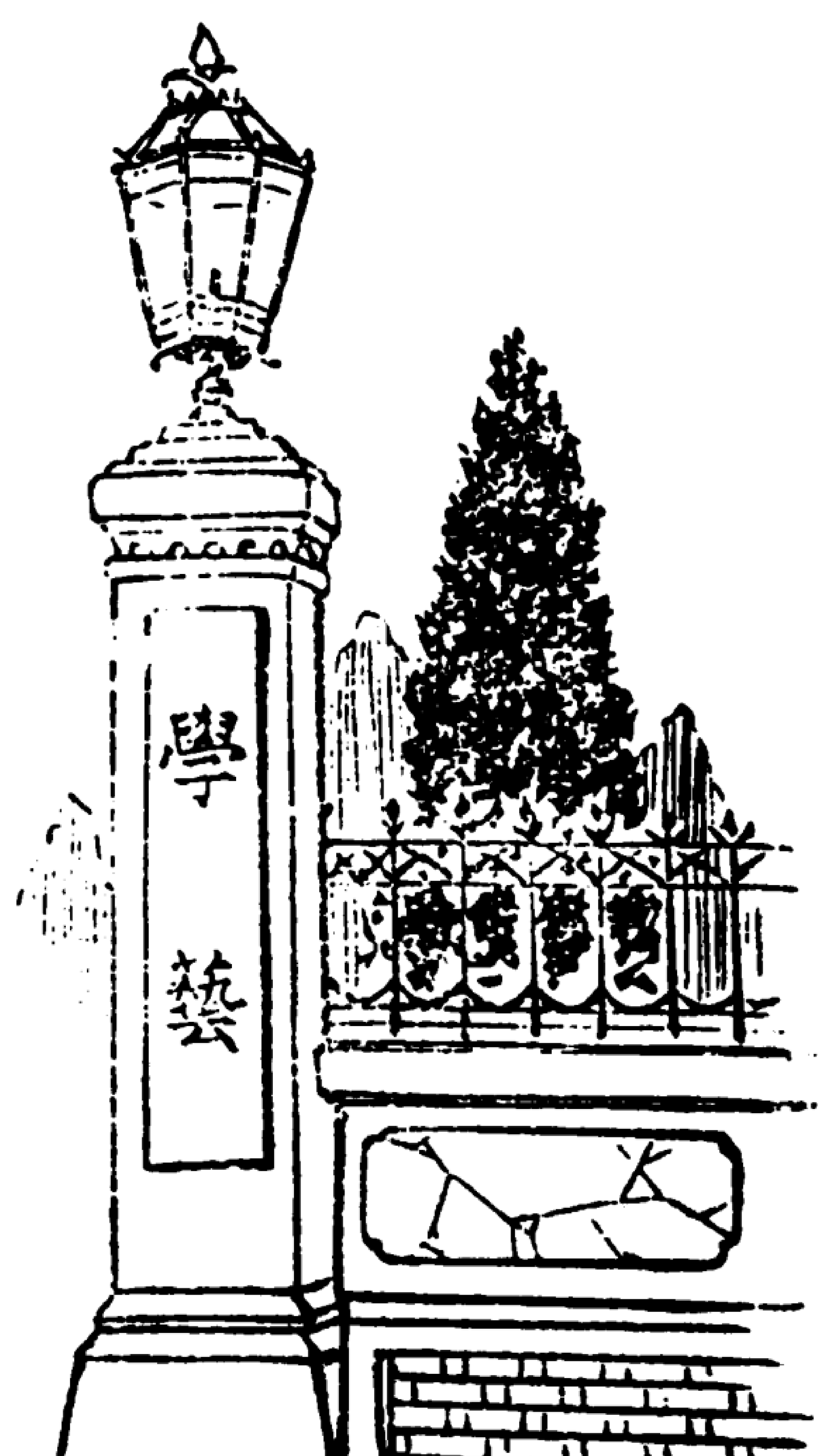
戀を斷たんとして成らず、佛に歸せんとして成らず、世を遁れむとして成らず、身を殺さんとしてまた能はず、懊惱又懊惱、身を措くにところなきが如きも 其惱懊の中、毅然として操守あり、凛乎として世の常の婦女に似ざるものあるを見るなり。げにや氣鋭く情細 かにして、是を後の德川氏時代の春日局に比して、更に優麗嫻雅の風あるものといふべし。譬ふれば、阿佛尼は、片野に咲きたる山櫻にして、春日局は、武者小路の白梅の花か一は、中古時代の餘響を傳へたる平安安裡の風に時の鎌倉天下の武辨の風を交へたれども、一は、

全く武士氣質にして、しかも樽俎折衝を事とする群雄割據の戰國の餘風を帶びたり。漢學敎育の餘韻に、明治の文化を交えたる今日の女學界は、蓋し阿佛尼を出したる當時の思潮に似通ふところなきにあらざるべしと信ず。知らず、才と情と果して再び十六夜日記、轉寢の記を成すの女性ありやなしや。



史學は人の智慮を增し詩學は人の機智を增し數學は人をして精密ならしめ理學は人の思想を深くし道德學は人をして端莊ならしめ文學と論理學とは人をして議論に長ぜしむ

ベーコン



國文學講義

通俗土佐日記（第五）

廣島商業學校敎諭　兒玉彌三郎

五日、風、波止まねば、尙ほ同じ處に在り、人々絶えず訪ひに來、

○此の段、別に取り出でゝいふべき程の處なし、要するに、國人深く紀氏の德に感じて別れを惜みしに、今は旣に舟も出でたらんと思ひしに、

尙は今日も大湊に在りと聞きつけ、喜びて訪ひ來れるを喜べると同時に、紀氏自身は一日も早く此の國を立たんと思へる、彼我の心相反せることと言外に溢れたり、

六日、昨日の如し、

○風波の止まで舟出し難きこと、人々の紀氏尙は此處に在りと聞きつけて、絶えて訪ひ來れること、一日も早く立ちたきこと、總て前日に同じきなり、但し今日訪ひ來し人々は、昨日の人人に後れて聞きつけたること、及び此の國を離れたき情は日一日と增さり行けることをも察して見るべし、

七日になりぬ、同じ湊に在り、今日は白馬など思へど甲斐なし、唯波の白きのみぞ見ゆる、斯かる程に、人の家の、池と名ある處より、鯉は無くて、鮒より始めて、川のも海のも、こと物ども、長櫃に擔ひ續けておこせたり、若菜ぞ今日をば知らせたる、歌あり、其の歌、

淺茅生の野邊にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり、

いとをかし、此の池といふは、處の名なり、善き人の、男につきて下りて住みけるなり、此の長櫃の物は、皆人、童までにくれたれば、飽き滿ちて、舟子等は、腹鼓を打ちて、海をさへ驚かして、波起つべし、

○七日にありぬと、は此の日は人日とて祝ひの儀式ある日なればなり、海だに荒れずば今日あたりは都に歸り着きて祝儀などすべき、日取なれば、彌以て此の國を離れぬを歎けるなり、

○今日は白馬など云々　延喜式に「凡青馬二十匹、自二十一月一日一至二正月七日一、二寮半分飼レ之、云々」とあり、又、江次第抄に「七日、此節以レ引二白馬一爲レ宗、故名二白馬節會一、禮記曰、迎二春於東郊一、以二青馬七匹一、云々、仁明天皇、承和元年、始覽二青馬一」とあり、又、公事根源に「白馬節會を或は青馬の節とも申すなり、其の故は、馬は陽の獸にして、青は春の色なり、是に依りて正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふ本文侍るなり、（中畧）今日の毛つけの奏にも皆、蘆毛とばかりあり、是れ白馬を本とせる故なり」とも見ゆ、又、按ずるに、源氏物語末摘花の巻に「色は雪耻かしく白うて青に、額つきこよなうはれたるに」ともあるが如く、白き極は自ら青きものなるが故に、白馬をやがて青馬といふなるべし、

○甲斐なし　とはいかに思へども舟動かざれば、其の甲斐なきなり、

○波の白きのみぞ見ゆる　とは見度き白馬は見得ずして、厭ふべき白波のみ見ゆるをいふにて、所詮、波高くして舟出されぬを歎けるなり、

○人の家の池と名ある處より　池は地名なるのみならず、其の女の姓にてもありしなるべし、其の地名をやがて姓にしたる例多し、

○鯉はなくて　とは鯉、鮒は常に並べて稱ふるものなるが上に、鯉は魚中最も愛づるものなれば斯く言へるなり、但し鯉の無きを飽かず思ふにはあらで、他の諸種の物の殘る方なく具はれるを思はせんが爲めなり、

○河のも海のも　とは河魚も海魚もといふべきを、上に魚のことを言へるを以て斯く省けるなり、

○ことᵒ物ᵒ　とは魚の外の物を束ねていへるなり、
○長櫃　は今の長持の小なるものなるべし、
○擔ひ續けて　とは長櫃數合なりしをいふなり、
○若菜ぞ云々　とは魚の外種々の厚味の物ありて、若菜は淡薄なるが故に常人は之を重んぜざれど、紀氏は此の女が、舟中の不便を察して用意周到に、此れをも添へたる心の厚きを喜びて、口腹のことはさて措き、特に、多くの物の中より取り出でゝ、斯く、その一字を以て其の重きを示せるなり、此の若菜のこと、公事根源に「内藏寮並びに內膳司より、正月上の子の日、之れを奉る、寛平年中より始まれる事にや、延喜十一年正月七日に、後院より七種若菜を供す」と見ゆ、初めは七日と限らずして、上の子の日に此の儀式を行へるあり、又同書に「七草は芹、菁、御形、すゞしろ、薺、はこべら、佛の座等也」とあり、事文類聚には「人日採二七種菜一作レ羹」と見え、荊楚歲時記には「正月七日、俗以二七種菜一作レ羹、食レ之人無二萬病一」とあり、以て唐風の倣はれるものなることを知るべし、
○今日をば知らせたる　とは今日人日なることを知らせたるの義にて、詞の表は唯今日は人日なるを知れとて彼の女の贈れる由にのみ聞ゆれど、其の實、船中の不便を察したるが上に、彼の無二萬病一といへる義をも思へる情さへ籠りて、他の種々の美味の物よりも特に嬉しき由をいへるなり、
○歌あり　特に若菜に歌を添へたるは、彼の女も京に在りし時より、紀氏の心を知れるものと思はれ、いかに多くの美味を贈れりとも悅ぶ

べき人あらぬを思ひて、斯く淡薄なる若菜に歌を添へたるなるべし、故に此の女も心ある人にて、斯く長櫃數合を贈りたる中にも、若菜を主としたることを知るべし、

○淺茅生の云々　の歌淺茅生は短かき茅の生せる義にて、野には何處にも生ずるものなれば、やがて冠らせて野に續けて讀むなり、

○水もなき池　とは此の女の家ある處を池といひ、やがて氏をも池といへば、信の池ならざるが故に斯くいふなり、但し水もなきといへるは、潤澤もなく干からびたるものなるを含めたるなり、

○若菜なりけり　とは折角摘みたれど、水も無き池にて摘みたるが故、潤澤もなく味も甘からず嘸御心には叶ふまじと歎けるなり、

○一首の意は、家貧しく荒れたるをやがて野といひ、さて、貧しければ、心には思へど心ばかりのことをも得せぬ由を水もなき云々と讀めるなり、長櫃數合の贈り物も唯此の若菜を主としたるにて、其の若菜すら、からびたる由をいふは、他の總ての物は勿論取るに足らぬ由を含ましめたるなり、

○いとをかしかし　とは長櫃數合の贈り物は、口腹に對してこそ用あれ、紀氏を思ふ心の切なるは、いさゝかの物なれど若菜一つにあることを思はせたれば、斯く感賞したるなり、歌を感じたるは即ち其の志の厚さを感じたるなり、

○よき人　とは良家の娘なるべし、

○男につきて　とは其の男と京にて相識りて、土佐に下れるに隨ひて下れるなり、

○昔人重までに　とは普通ならば其れ等には

行き渡るまじき從者子供並びに下文の舟子等の者に下賤の者にまで與へたるをいふなり、

○腹鼓　荘子馬蹄篇に「赫胥氏之時、居不レ知レ所レ爲、行不レ知レ所レ之、含レ哺而遊、鼓レ腹而遊、民能已此矣」とあるが如く、飽くまで飲み喰ひて滿腹したるをいへるなり、狸の腹鼓といふも、其の喜びある時に爲すことなりといひ傳ふ、

○海をさへ云々　腹鼓を打ちて喜び罵る賑はしさの、人の耳を轟かす樣を思はさんとて、海といへる大なる者を捕へ來りて、其の小なる者は言はでも著るを知らしめたるなり、是れ偏へに、長櫃中に美味の物多くありしを以て、衆人の喜び非常なりし由を言はんが爲めにして、やがて、彼の女の一方ならぬ志の程を厚く謝したるなり、

此の間に事多かり、今日、破子持ちて來たる人、其の名何とぞや、今思ひ出でむ、此の人、歌讀まんと思ふ心ありてなりけり、兎角いひ〳〵て、波の立つなることゝ憂ひ言ひて、

往くさきに立つ白波の聲よりも後れて泣かむ我やまさらん、

と讀める、いと大聲なるべし、持て來たる物よりは、歌はいかがあらむ、此の歌を、此れ彼れ、あはれがれども、一人も返しせず、しつべき人も交れゝど、是れをのみいたがり、物をのみ喰ひて、夜更けぬ、此の歌主は、まだ罷らずといひて立ちぬ、或る人の子の童なる、密かにいふ、麿、此の歌の返しせむといふ、驚きて、いとをかしき事

かな、讀みてんやは、讀みつべくば早や言へかしといふ、まからずとて立ちぬる人を待ちて讀まんとて、索めけるを、夜更けぬとやありけむ、やがて往にけり、そも〳〵いかゞ讀みたると、不審がりて問ふ、此の童、さすがに耻ちて言はず、強ひて問へば、言へる歌、

往く人も止まるも袖の涙川汀のみこそ濡れまさりけれ、となん讀める、

斯くは言ふものか、愛しければにやあらん、いと思はずなり、童言にては何かせむ、嫗翁にをしつべし、悪しくもあれいかにもあれ、便あらば遣らむとて、厝かれぬめり、

○事多かり　とは何とも知られねど、訪問の人及び贈り物など數多くありしなるべし、餘りにくだ〳〵しければ、斯く一と束ねにしたるあらん、

○今日破子持ちて云々　此の人も事多かりとある中の一人なるべし、他の諸人は皆別れを惜みて來れるに、此の人は歌を讀まんと思ふ心を主として來れるは他と異なれるが故に書けるあり、破子は食物を入れて携ふる器にして、内に隔てあり、辨當箱の類なり、

○其の名云々　の何とぞやは、何といひけるぞやとの心にて其の名を忘れたりといふなり、是は此の人の上を批評したるが故に、其の名を表はさゞらんが爲め、來人多きに取り紛れて忘れたる體に書き爲せるなり、

○今思ひ出でむ　の今は俗語のおつゝけ、やがてなどの意にて、思ひ出でゝ其の名を記るさ

んとの心なり、
○此の人云々　　此の一句は此の人も他の人々と同じく別れを惜む爲めに來れることゝ思ひの外、歌讀みに來たる不人情さを呆れたるなり、若し此の人、人並みの歌讀みならんも、紀氏の眼に映じては瓦礫に齋しかるべし、之れをも耻とせざるは自負の心あるにて、所詮、己れの非を知らざる者といふべし。
○兎角いひ〳〵て　　とは元來歌讀まんとて來れるなれば、其の心專らなれど、直ちに讀み出でんも不體裁なれば、讀み出だすべき機會を得んとて、心にもあらぬ種々の話をして機會を作らんとしたるなり、
○波の立つなること云々　　是れ歌の讀みしはを強ひて構へたるなり、然して次の歌と相對照すれば此の歌は必ず宿詠なるべし、前後の關係より推して然か思はるゝは文の妙なるが爲めなり、
○往く先きに云々　　の歌、君の行程に立つ波の聲と、跡に殘れる我れの泣かん聲と何れか大きかるべき、思ふに我が聲の方大きかるべしとて別れを詫びたるなり、
○「燈」には此の一段總て實事ならぬを、斯く構へて前の池の女の情深きを思はせんが爲めならん是れも倒語なりとあれどいかにや、
○いと大聲なるべし　　とは波の聲より勝らんと讀みたれば、其の泣かん聲非常に大きなるべしと戯れたるにて、其の實、歌を嘲けりたるなり、
○持て來たる物よりは歌はいかゞあらむ　　とは破子に比して歌の劣れるをいへるなり、
○此の歌を此れ彼れ哀れがれども　　とは舟中

の人々、此の歌を稱美すれど返歌はせずといふにて、返歌せざるは誰も心には賞せざる譯なり、故に哀れがるは唯挨拶にのみいふなるべし、

○しつべき人も云々　　斯く返歌せぬは返歌すべき人なきが故にはあらずといふなり、是れも能はざるにはあらず爲さゞるなりの意か、呵々、

○是れをのみいたかり　　此の歌をのみいたがるなり、いたかるとは、善き方にも惡しき方にも、嬉しきにも詫しきにも、一般に、明確に言はずして各其の意を思はしむるなり、此處のは賞むる樣にて誘れる方なり、

○物をのみ喰ひて　　とは物を喰ふといふ外貌よりして、返しせぬといふ内心を思はせたるなり、物を喰ふ暇あらば返しもすべきに、物をのみ喰ふは即ち返しせんとの心なきなり、返しせぬは即ち語に歌を哀れがりいたがるにあらざるを思はせたるあり、

○夜更けぬ　　とは此の歌主返歌を持ちたれど、誰も物喰ふのみに時を移して拍子ぬげたる樣を示せるなり、

○まだまからずといひて云々　　まだを濁らずして又と讀めるもあり、又、すを清みて讀みてまからんとすの意なりと釋せるもあり、或はずと濁りてまからんずの意とし、罷らんといふ詞を來らんの意に釋せるなど諸說一樣ならず、今は本文の如くせり、其の意は、返歌を待てども誰一人返しするもののなきのみならず、唯物喰ふのみにて手持無沙汰なりし故、下文にもある如く、實際は罷り歸る積りなりしも、明白に歸るといひては、返歌なきが故に歸るよと思はれんも、うしろめたさに、供船の方にて休息にてもする樣に裝ひて、斯くまだ罷らずといひて揚

を外したるなり、而して供船にて返しを待ちしに、尙ほ其の沙汰なければ、待ちわぐみて歸りたるならん、

○或る人の子の童なる云々　或る人の子にて未だ童なるがといふ意なり、

○密かに　とは小聲に言ふなり、大人すら誰も返しせぬに、童にて返しせんといふは差し出たる嫌ありと、童ながらも思へる樣を示せるなり、

○麿　とは謙遜していふ自稱なり、才をかどといふに反して、まろは不才の義なりと契冲の說あり、

○いとをかしきことかな　是れ大人すら返しせぬに、童にして其れをせんといへる神妙さを感じたるなり、

○讀みてんやは云々　俗語の、見事讀むかなといふ程の心にて侮りたる詞なり、下に此の返し善く讀みたる由賞めたるは抑揚なり、

○罷らずといひて云々　童の答なり、是れ歌主の詞を其の儘用ゐたるなり、未だ罷り歸るにはわらずといひて此の座を立ちたる人なれば、程なく復た此處に出で來るべければ其れを待ちて其の上にて讀まんといへるなり、

○索めけるを　とは其の立ちて行きける供舟の方を尋ねたるあり、

○夜更けぬとにやありけむ　とは彼の歌主が思ひたらん心を察していふなり、

○さすがに　とは徃古のしかすがにといへるに同じ、何事にても必ず然かあるべきとの一途にもわらざる由をいふなり、

○徃く人も云々　の歌、徃く人とは紀氏をいふ、とまるとは彼の歌主をいふ、涙川とは袖に

涙の流るゝを、やがて川とはいへるなり、以上は、彼の往く先きに云々の歌を受けて、泣きて涙を流すは、留まる人のみならず往く人も同じき由をいふなり、汀は水際なり、袖を流るゝ涙川の水際との意にて、袖の濡れまさるをいふなり、

○一首の意は、別れの惜しさは、往くも留まるも同じけれど、唯袖の濡れまさるのみにて其の詮もなく、別るゝことの詫しさよといふなり、

此の歌、甚だ勝れたりといふべき程にもあらねど、童の歌にしては口つき老功なれば、是れ等の類は紀氏の讀めるを斯く童の讀めるに書き爲したるなるべし、

○斯くはいふものか　とは童にして斯くばかり愛でたき歌を讀むものかといふにて、かは疑問の詞なり、

○うつくしければにやわらむ　とは此の童の深く愛せらるゝより、歌までが斯く愛でたく見ゆるにやわらんとの意なり、

○いと思はずなり　とは此の歌の善きが案外なるをいふなり、

○賤げとにては何かせむ　とは彼の歌主が、侮りたりと思はんといふ心を以て書けるなり、下文の如く老女、老夫の讀みたる如くせんとの心なり、

○にを　のには然かせんとする心をいひ、をは然かすまじき事を強ひて然かする心あり、古今集に「立ち止まり見てを渡らん紅葉は雨と降るとも水は增さらじ」とあるが如き是れなり、

○便りわらは　とは歌主は既に歸りたれば、若し便宜あらばとなり、

○眉かれぬめり　とは傍より見たる記者の詞

なり、慥かに然か思ひてせしことか否かは知らされど、多分然かあるべしと察したるが故に、。。めりと定めかねたる詞を用ゐたるなり、

○此の一段は、前段の池の女の厚情と此の歌主の薄情とを對照して、前者の愈厚く後者の愈薄きを示せるなり、

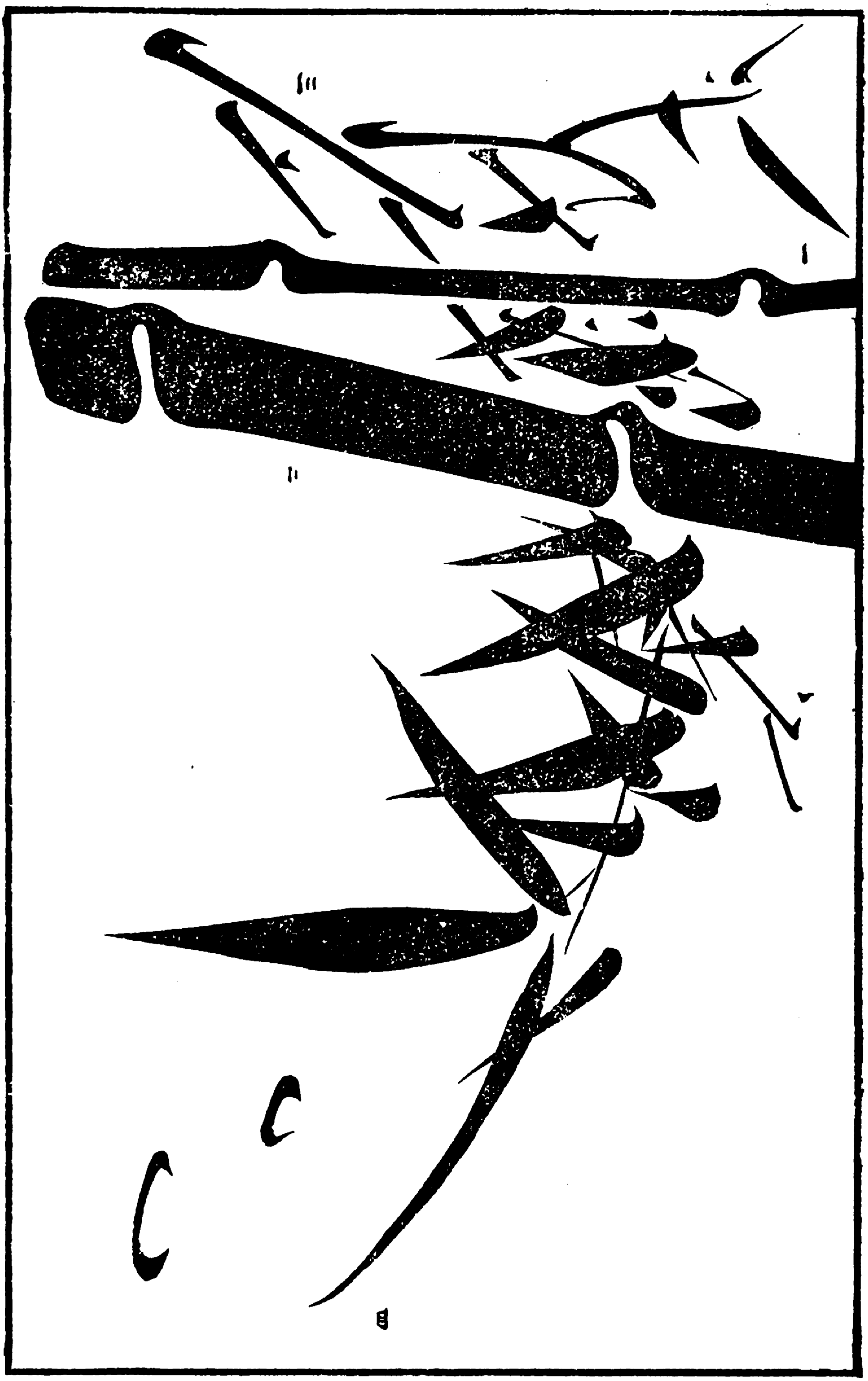
石上ふる野のをさゝ霜をへて
ひとよばかりにのこる年かな　（新古今集）

和畫通信講義（卅七回）

山崎彩峨

竹は多くは、幹眞直のものなれば、手甲を自己の方へ向け、胸部と手腕とをはなして、筆を使用すべし。然せざれば、震曲いづれかになりて、眞直にゑがく能はざるものなり。黒書にては、挾墨にて、幹、并に、小枝をゑがき、濃墨にて、節を入れ、葉は、濃き墨い方より書く。また、淡葉の上に、濃葉を重ねて畫くことあり。その時は濃墨の方を畫きおき、乾きて後ち、淡墨の方を畫き入るゝなり。

彩色にては黄がちの青色を挾墨となして、幹と小枝とを描く、濃墨の部は、藍がちの青色か、または、藍色のみにて畫く。殊に、筆技を嗜好すれば、筆を黄がちの眞青色に浸入し藍色にて、挾墨となして、濃部を描きてもよし。淡墨の部分は、通常、黄がちの青色か、または淡き赭墨にてゑがけども、濃墨に挾墨を使用せし時は、淡部もまた極めて薄き黄がちの青色を、鮮青色にて、挾墨となすか、薄き赭墨を通常の赭墨にて挾墨をしてゑがくべし。節は、薄彩色なるゆゑ濃墨にて入るゝなり。



女鑑改良に就いて

新年の初號なる第二百六十八號は明治三十六年第壹號と改稱し自今毎號順次に此の番號を用ゆ

發刊期日一月は一日及ひ二十日とし二月以後は毎月一日及ひ十五日を以て發刊期日と定む

口繪は是まで毎號凡そ三枚なりしを五枚以上とし女子教育家及ひ之に關係を有せる著名諸子の肖像並に未だ世に顯れざる風景畫等を掲くべし

記事は興味と實益とあるものを用ゐ淫靡浮華風致を害し人心に惡感化を與ふるものを避くると共に無味乾燥砂を噛み臘を舐ぶるが如きことなきを旨とし家庭の讀物なるに適當ならしめんことを期す

歌並に作文月並兼題は著名大家の選擇を乞ふこと已哉の如くなるを以て此際期日を誤らす注意して寄贈せられんことを望む

明治三十五年十二月廿日

女鑑編輯局

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

出版業空前之光榮



◎定價廿五錢◎郵稅四錢◎特製卅五錢◎

畏多くも本書には皇后陛下の御肖像を精巧なるクロタイプ寫眞版にて奉寫したれば坊間に有觸れたるものと類を異にし髣髴御眞影を拜するが如く加之土方伯御珍藏の御眞筆（竪一尺二寸 横一尺七寸）を同伯の許を得て拜寫し皇后陛下菅公の御詠を土方伯に拜寫を乞ひ共に卷頭に奉載し華族女學校學監下田歌子女史の序文を附し而して表紙（坤德）の二字は前皇太后宮太夫杉孫七郎子の揮毫を乞たるもの眞に弊社の光榮出版界空前の盛事なり

本書元篤志者間にのみ分つ目的なりしが發行を聞て頒布を希望するものの相踵くを以て遂に一般に賣捌く事となしぬ嗚呼坤德の廣大無邊なる今更ら申も畏こし四千萬同胞本書を讀んで誰か奉公の心を激勵せざらんや學校其他公共團体より一時に十部以上御申込の時一部金貳拾錢に割引郵稅は弊社支辨可仕候（御注文は國光書房に願上候）



家庭

慈母と愛兒（承前）

出生後の心盡し（つゞき）

山形縣女子師範學校長　津田元德

ドレーパー氏曰く、今俄かに五六度の温度變化を生せんか、爲に地球上の生類幾百萬を地中に埋むるか計る能はずと、成人尚然り、況んや、此孩兒に於てをや、況んや大人尚死すべき三十五度の低温に降るをや。

故に生兒は、必ず暖和ならしめざるべからず、生時は假令土用中と雖も、非常に暖めざるべからざる要を生ずべし。某國にては「土用の中にも綿帽子」なる諺あり。蓋し、出生兒には酷暑中尚綿帽子を與ふべしとの意なり、體温の降下につきては、何等の定見なきも尚數百千年の經驗によりて此必要を知り世の諺に傳へしは豈偶然と雖も、吾人の深く注意せざるべからざる事にあらずや、從て生兒の衣服は、絹類の冷かなるは最も不適當と云はざるべからず。唐縮緬等の類にて、柔かく且暖かなるを最上とす。世の富豪者只徒らに高價なる絹類などを用ふるは、あやまれるものと云ふべし。

●●●●生兒の食物――産婦一睡の後、乳汁を分泌すれ

ば、直に之を與ふべし、若し分泌おそければ、極薄き牛乳に砂糖を加へ、清潔なる布片にて作りたる乳首様のものに付けて吸はしむべし。かくて一二日間を過せば、必ず分泌すべきなり。

我國にては、胎内よりの毒を瀉すと稱へて、鷓鴣菜、五香、又はほゝづきの根などを煎じて飲ましむる習慣あり、三島博士などは、此は頗ぶる危險なりとて禁じられき、實にさもあるべき事にて、今出産時と其後との乳汁の成分を見るに、左の如きものあり、

	普通乳	初乳
蛋白	二、〇%	六、六%
脂肪	三、五%	二、五%
糖	四、八%	三、六%
鹽類	〇、一七%	〇、三一二%

今之を比較するに、初乳は脂肪と糖とに於ては大に劣れども、其最も大切なる蛋白質は三倍餘の多量あり、鹽類も三倍の多きに達せり。

鹽類は凡て下痢の功を爲すものなれば、斯く多數の鹽類あれば、五香などの下痢劑を用ふる要を見ざること明かなり。

只、出生の際、時に或は、不潔物を嚥下せざるなきにあらず、（産婆の取扱に於て）若し其等の掛念ある時は、少許の下痢劑亦決して不可なかるべし。而して、

出産後一二ケ月間は	凡二時間
同　四ケ月以内	凡三時間
同　八ケ月以内	凡三時間半
同十二ケ月以内	凡四時間

毎に哺乳せしむべし、夜間は右三時間以上に於て目覺めたる時與ふべきなり。

胎教の効力なる題目中に述べたる如く、若し母

乳の不潔を見認むる時は、速に牛乳に代ふべし。但し牛乳は成分濃厚なれば、此に水を加へて調和せざるべからず、其割合は、

初一ヶ月半間	牛乳一と水三
三ヶ月マデ	牛乳一と水二半
五ヶ月マデ	牛乳一と水二
七ヶ月マデ	牛乳一と水一半
九ヶ月マデ	牛乳一と水一
十二ヶ月マデ	牛乳一半と水一

右の如くせば大なる過なかるべし。

●●●●離乳の時期――乳汁の外普通の食物を與へて、漸次に乳汁を廢するに至る初期を云ふ。育兒法中頗ぶる緊要の事なれば、從つて諸家の說一定ならす、

七ヶ月とせるは	ビーデルト氏
十一ヶ月は	ウッフエルマン氏
十ヶ月乃至十一ヶ月は	バギンスキー氏
小兒體重の增加緩慢となる時とせるは	フライシユマン氏
門齒の二箇若くは四箇發生の時とせるは	ヤコビイ氏

にして本邦小笠原諸禮には、二百二十日を以て喰初とすとあり、蓋し、齒の發生は、自然が普通の食物を食せしむべき準備たる明かなれば、ヤコビー氏の說に從ふこと最も適切なるべし、但し炎暑の氣節(六七八九月)には、特に之を延期すべし、而して、初めは牛乳(湯及び糖を加へ漸く純乳となすべし)若くは肉羹汁を與へ、漸次に其量と度數とを增し、更に數齒を生ずるに至り發育も善良なれば、更に半熟卵、若くは牛乳にて煮たる米粥若くは牛乳にぱんを加へて煮たるもの、或は肉煮汁を以て調理したる粥、又はぱん等を與ふべし。此の如くして漸次に普通の食物に慣

れしめ、一ヶ年半に至りて全く母乳を廢するも、決して發育に妨げあらざるべし。

●●●●幼兒の便通――分娩後直に無臭濃淡色の弱き酸性を帶びたる粘稠の軟便を下す、之を胎便と稱す、或は時としては、三日乃至四日を經て通ずる事あり、予の生兒は、生後八時間にて多量に之を通せり。

胎便後の乳便は、殆んど無臭にして、弱酸性を有し、其色恰も半熟の鷄卵の如く一日二回乃至四回通ずるを常とす。且初め黃色のものと、永く大氣に接すれば、綠色に變ずる事あり。然れども、直に青便を下し、顏色蒼白となり吐乳するあらば、全く腸胃に疾病の起りたる徵なり、且白きかすの如き物を混へたる時は、同じく腸胃あしく、特に膽汁の欠けたる證なれば、醫の診察を請はざるべからず、又一日中一回も便通なき時は、微温湯又は「リスリン」を微温湯に混じたる液にて浣腸すべし。

予の生兒は、第四日に至りて、顏面及び全身黃色を帶びしが、胎便と乳便との交換期に當り肝臟の作用なるべければ、風と熱とに注意し、平常よりは少しく熱き浴を取らしむべし。衣食と共に便通は最大注意の一と心得べし。

●●●●●幼兒の快不快――幼兒の醫師として、將た養育者として、其任務を充分に盡さんには、必ず幼兒の快不快を知り、併せて其表徵を明かにせざるべからず。今其普通の快樂標式を月に配當せば、

一月中　哺乳、甘味、温浴、静光、静かなる動體、脱衣、（動体を見る事を好むは漸次に發達す）

二月三月中　音樂、唱歌、眷屬の談話、母の認識

四月　戸外の運動、外物の動靜、物を摑む

五月中六月　事、紙片其他のもの、音響、新聞紙其他を破る事、諸物を引き動かす事、

七月八月中九月　自己の影像、動物、時計、犬、馬、等の動靜を見る事、

十月十一月中十二月　身體の動遷、玩具の出納、書冊の開閉、圖書の通覽

之に反し其不快とする所の物、左の如し

飢渴の感情、身體の位置及保持の不適、
寒冷濕潤、空氣の不潔、
衣帶の束縛、齒牙の發生、
哺吸器の不適、

●●●●●

快不快の表出——快の表出大凡左の如し

開眼、眼球の光澤、歡聲、四肢の屈伸回轉、
咽響（獨り猫のみに此表出あるのみあらず、）
活潑、

不快の表出大凡左の如し、

叫號、閉眼、顔皺、頭を他に向くる事、
口の形狀、口角を下方にするは最少の不快にして、口を並行方形又は方形にするは不快の大なるものあり
變色、運動靜止又は緩慢、

以上は出生後に於ける注意の最大項目なるべし、尙慈母と愛兒とに關し、述べたき事非常に多けれど、曩にも述べたる幼兒心理學も遠からず、發達すべければ、詳細はそれに讓りて、玆に先づ筆を擱きぬ。（完結）

挿花の話（つゞき）

金雀子

小畑郁子

此金雀子も馬耳蘭と同く春より夏にかけては餘り挿しよい花ではありませぬ、春さき此青き枝に

黄色のやさしき花がまばらに咲きました所は實に美觀ではありますが、小さな枝に重き花が幾つも咲くのでなよ〳〵と垂れ亂れて、却て面白くありませぬ。秋より冬になりますと葉なども大方は落ちて淋しきやうでありますが、細き枝まで秩序よく整ひそろひて若芽とちがひ、枝端も凋まず力強くなりて居りまして大によろしい、全體金雀子は矯めのよくきくものですから初學の稽古によろしく、本花は勿論ながし物に適して居ります、殊に高ながし、中ながしは最其特性を發揮して宜しいものであります。

挿方形式は前より度々申した通りでありますが、何分葉が細かく、殆んど無いやうですから、枝の矯方に充分注意を致しませんとなりませぬ「根」よりそれ〴〵の岐れ目までに少しにても隙のなきやうに揃ひて出る樣に致さねば誠に見苦しきものであります、殊に注意を要するのは鋏を入るゝ時でありますゝ、何分線の如き小枝が多くあるものですから、自然見切りが多くなります、それを見切り〳〵といひて猥りに切り取る時は遂に裸のものが出來て仕舞ます。そこで形の定りました上氣長く靜に一條〳〵正しく矯め直していよ〳〵不用の枝と見たる處をのみ切り取るやうに致さねばなりませぬ。此手入れが不親切であると實に見惡い花が出來るものであります。

其高ながしの圖は二百五十九號に出て居ますから今は略します。

蔓梅もどき

此花は今頃が最よき挿時で、葉も落ち去り枝もあらはに橙黄色の少き實をつけ、まとに冬枯の物寂しき樣をして居る處は異に、幽人韻士の好に適する風情があります、是は蔓のものでありますか

ら是まで述べ來りましたのとは大に趣が變りて居ります。併し大體の形は別に異るわけでもありませぬが、何分にも蔓でありますから、自分の力で立の事の出來難き處がありま す、其時は他の力ある枝に纏きつけて幾本も纏き合して、よろしいのです、それは蔓の本性でありますから梅もどきにかぎらず、藤でも朝顏でも皆同じ事であります。挿花は自然を寫すものでありますから、蔓は蔓らしく常に這ひかゝらんとする勢を現して置かねばなりませぬ。それ故此梅もどきには細き蔓の先の多きを撰び、其細蔓が他の丈夫なる蔓に這ひ移らんとするさまを挿すのでありま す是は矯めの充分きゝて上より下に垂るゝ性でありますから、なかし物に大によろしいのであります殊に、高ながしに至極であります、又かけ花、釣舟などの花器には最適して居ります。



うめもどき　九本

此處に御傳授致すべき事があります、一體、藤、朝顔其他一切の蔓物は總て天然右に纏きつく事はありませぬ、必ず左まきでありますから、蔓さきを纏きつけますには必ず其心得で、左卷にまきつくる樣に致さねばなりませぬ。

だいどころ

女子東京美術學校講師
石井湧太郎

琉球でんぶの拵方

甘藷の皮を可成丈け厚く剝き少しも黑の處のなき樣にして、小口から一寸位の長さに丸切りにして之れを細く竪に切る、其の切り方も、あまり太くするよろしからず（マッチの軸より少しく細き位）之れを切りたるそばより直ちに鹽水に浸し置き少時過ぎて笊に揚げ水をしたむべし、此の如くして別に鍋の中に砂糖、味淋を等分に合せ、例へば甘藷中太一本ならば味淋一合砂糖十匁を煮つめ、此の内に右の芋を少しづゝ入れて煮るべし、芋煮えて其の色透明やうなりたらば、箸にて靜かに崩さぬ樣皿などに取りならべ、冷し置くべし。又扇ぎてもよきなり、唯煮る時注意すべきは攪きまはさぬ事と、煮汁の煮つまり焦げぬ樣少しになりたる時は跡より味淋と砂糖を同割に増し、始終煮汁の少しく多き位になして煮るべし。

茶碗　風呂吹大根　黑胡麻味噌

◎原料、大根（巣のなきもの）一本〇並味噌　百匁〇黑胡麻　一合〇砂糖　六十匁〇味淋　五勺
水　五勺

◎仕方、大根をよく洗ひ小口から五分位の厚さに切り揃へて總菜ならば其のまゝ客に進む、時は皮を剝き丸き形の角を取りて饅頭の如く形作り（之れを面取りといふ）釜に湯を沸し此の内に入れ蓋をなして茹るなり。茹湯あまり多からず大根にかぶる位にてよろし凡そ四五十分間にして竹箸を貫きて柔に通りたる時を用ふべし、味噌は大根を釜にて茹る間に作るべし初め胡麻を煎り摺鉢にて摺り次に味噌を胡麻の上より加へ尙一層よく摺り然して裏漉にかけて（馬尾篩の裏より飯杓子を以て漉すなり）鍋に取り砂糖（但白砂糖）味淋、水を合せて火の上にかけ文火を以て煉り交せるべし之れにて大根の熱きを器に盛り、上より胡麻味噌をかけて用ゆべし、尤も味噌の煉り加減は少しく、かたき位に煉り置くべし然らざれば食する時大根より水出でゝ、味噌汁の如くなるものなり注意すべし。

椀酢いり 鰯つみ入 薄うち大根

◎鰯つみ入割合、
鰯二十五、食鹽五匁五分、砂糖三匁、味淋三勺、

◎つゆ割合
いわしを湯引たる煮汁八合、醬油六勺、酢五勺
食鹽二匁、

仕方、之れも總菜によし先づ鰯の鮮らしきを撰びて首を取り腹腸を出すべし、然して一度水にてよく洗ひ、次に左の指先きにて首の付きて居たる中骨の先をつまみ持ち、右の指先にて其身をこき落すべし、之れを熱湯の内に一トつ宛箸にて持ちたるまゝのゝ字を三度書く如くして湯引き、摺鉢の内に取りて、充分に摺り潰すべし、（湯引きたる湯は即ちいわしだしなり）然して合鹽五匁餘（但

し一匁は四本の指先きに摘みたる程の量なり）砂糖、味りん、を加へ又摺りませ置くべし此の時少量の摺り身を箸の先きに付け湯の内に入れ味を試むべし、次に大根を四寸程に切り立て四ツ割になし、いてふ葉の如く薄く切り別の鍋にて茹で、其の湯をよく絞りて後、いわし煮汁の方へ入れ、沸騰さすべし、尋で醤油を加へ、鹽を入れ、酢を終りに入るべし、然して摺り身を團子の大さに取りて入れ、浮き上りたらば、椀に盛り柚皮を少しへぎて香に入るべし。

自ら經驗したる後ならでは眞理を含める語の意義を明かに悟らざること多し意外の凶禍に罹り或は失望の事に逢ふときは古言俚諺等を想起す而して其語は平常口癖の様に言ひ慣れたるものなること多し　ミル



保育に就て（つゞき）

醫學博士　三嶋通良君演說

そこで乳を哺ませる方法に立戻ッて御話をしますが、今のやうに親の乳を哺ませれば、自然とそれで子供の「かにばゞ」胎毒が出て仕舞ッて段々丈夫になるのです。偖其乳はドウいふ風にして哺ませたが宜しいかといふと、之に就いては先づ時間

を定めるといふことが必要である。其時間はドウいふ所から定めて來ると云ふと、人の乳は子供の胃の中で何時間掛ッたら消化するものであるかといふことが元であります。是は從來の經驗に依ると一時間と四十五分ぐらゐ掛ッて消化する、先づ之を二時間とします、そこで二時間毎に乳を哺ませさへすれば、先のがこなれた其後へ新しい乳が行ッて又それが能くこなれる、斯ういふ譯になりますと乳の方で御話をしますと、人の乳といふものはドウして出て來るかと云ふに、是は婦人方に於ては平生毎月月經がございます、姙娠すると其血が子宮に入ッて子供を養ふ、產をして子供が生れてしまふと、其血が今度は乳に化して、さうして乳になッて子供を養ふのです。即ち一つ血がズッと循環して月經となり、胎内の兒を養ひ後には乳になッて出て來ると云ふのです。偖其血がこなれて乳になるまでにも一定の時間が掛る、ドウも水道の螺旋を捻ッて水が出て來るやうには行かない、又井戸から水を汲揚げるやうに出るものでもない、即ち血が身體の或機關を循環して乳になるのであります、それを時に拘はらず哺ませると、出て來るは來るが、それが通例の乳では無い、十分に熟して居らぬ、柿で言へば澁い、密柑で言へば酸の拔けないもの、即ち未熟の乳である。乳の方も一定の時が經たなければ熟さぬ、子供の胃の中にある乳も一定の時間が經たなければ消化しない。それでありますから若し時間を早く乳を哺ませますと、先に哺んだ乳は半分しかこなれない、御飯で言へば生煮えのやうなものになッて居る、そこへ又後から哺ませるのが不熟の乳ですから、消化しかけた所へ後から不熟の乳を哺ませるから兩方不消化になッて終ひます。此不消化の乳はど

うなるかと云ふに、仕方がないから子供はさういふ乳は吐いて仕舞ますか、或は青便などになつて出て終ひます詰り胃の長く保ち切れぬから吐く、今の胃の中で幾らこなしたくてもこなれないで、苦しいと思へば子供は吐く、何んにも成らなくなるです。時間を二時間以上隔てゝ哺ませると、先のはこなれて仕舞ひ、後から來た乳も熟して居るからそれで子供が丈夫に育ちます、故に其哺乳の時間を定めるのが必要であります。是が教育の端緒で、さういふ風に時間を定めますと、其子供も矢張時間が來なければ哺みたがらない、啼いたから哺ませるといふのは極惡るい。子供は唯啼くより外は意思の發表のしやうがない、子供が啼く內には時々鼻唄を唄ッて居るやうな事もあるのです、中には喜んで啼て居る時もある君か代などを唄ッて居ることもありませう（笑聲起る）それから又おなかが痛いと云ッて啼き、或はおむつが汚れたと云ッて泣く、少しチク／＼しても泣く、それはおッかさんが側に居て、アレ是はおむつが汚れたからだらうと言ッて直ぐおむつを換へてやる、或は是は何かチク／＼するのか、或はおなかが痛くて泣くのかといふ風に、おッかさんが小兒を研究して見れば直ぐわかる。それで此等を理解して二時間づゝ隔てゝ乳を哺まして行くと、それが規律になりまして大小便の通じまで規則正しくあッて、モウ「しい」をする頃モウ「うん」が出る頃といふことまでおッかさんにチヤンと分るやうにあります。それで大きくなるに從つて、さういふ風に段々時間を正しくして行けば、終ひには四時間くらゐに一遍のませて足りる、さうなつて來ると子供も大變樂です。四時間經つて唯一遍飲む、それで六ヶ月以上も經てばおッかさんも一遍乳を

哺ませれば四時間は呑ませぬでも宜いから、今乳を哺ませたのが三時、さうすると四時五時六時七時までは、哺ませぬでも宜いと思ふから、其間に用達にでも何にでも出られる。斯ういふ會へ出て御話をなさるのも家で小兒がおなかが空たらうといふやうな心配も無し、子供の方でも欲しがらぬから充分用を達し、自分の務をすることも出來ます。斯ういふ風に子供を育てるのに規則正しくすると、親も樂であり、さうして人間が總て規律を守る習慣、秩序に從つて動く習慣といふものをそれから段々養成される、是が一番教育養育といふその淵源です。そこで一つ取外して仕舞つて、我儘育ちにしたらおしまひ、けれどもまだ二ケ月ぐらゐの子供でありますと、二月三月もおつかさんが我慢すれば之を矯め直すとが出來ます。其の代り二日三日は夜分啼かする位のことを覺悟せねばならぬ。から云ふ風にして是まで私が澤山直して上げた例があります。

さういふ風にして子供を育てゝ行く、そこで此子供は今のやうに規則正しく乳を哺まして行くと、乳の方はどうなると云ふに、乳の方はチヤンと子供が成長するに從つて其性分が變つて行く、初めの乳と一ケ月經つた乳と三ケ月經つた乳と四ケ月五ケ月六ケ月經つた乳は、子供が成長するに從つて其養ひに必要の性分を有つた乳が出る。それでありますから乳母が抱へる時分におつかさんが子供を産んだ月と、乳母の子供を産んだ月と餘り違ッて居ッてはいけませぬ、おッかさんの方は三月で乳母は六月といふやうであると、早く申しますと乳が濃過ぎる、それで子供が消化し切れぬ、消化不良といふ病はさういふ事からも初まります。

講話

そこで其子供は生後何ヶ月ぐらゐ乳を哺まなければならぬかといふに、之に就いては別に規則も何んにもございませぬ。唯從來國々は幾らか習慣がございまして、先づ學者が色々の經驗からして此ぐらゐまで哺ませれば澤山だといふ風に考へて居るのもあります。極短いのは七ヶ月ぐらゐ哺ませれば宜いといふ説と、それから十ヶ月――外國あたりでは十ヶ月説が多うございます。併し其乳はソンなら十ヶ月哺めば必ずそれで十分か、それ以上哺ましては害が有るか、餘計哺んではいけないかと、斯ういふ問題を出して見ると、乳は幾ら哺んでも害は無い、それはモウ日本では五つ六つになッても後の子供が出來ぬ以上は哺ませる、けれども子供の方には少しも害は無いが、少し親の方に損がある、そこで兩方の爲めを思ッてドノくらゐで切ッたが宜いかと言へば、先づ滿一年で離乳すればお互にマア餘り損も無し徳も無いといふ所でありませう。歐羅巴では多く早い内に乳を上げます、是には色々の事情があります。社會的の……西洋各國の內瑞典諾威あたりになると、子供は多く親の手で育てます、それで矢張親が子供を懷中に入れて育てますが、其他では親が自分の手で子を育てるのは誠に少ない、歐羅巴では其少ない事情が色々あります。第一は生存競爭が盛んなる爲めに女子が職業を求めねばならぬ、或は敎員になるとか、或は職工になり、或は餘所へ出稽古に行くとか色々職業を求める爲めに、自分自分の子供に終始乳を哺ませることが出來ない。尤も職工あどで子供の澤山有る所では、幼兒預所といふものがございまして其處へ自分が朝出掛ける時にチョッと預けると、自分が働いて歸る時までチャンと腹も空ぬやうに世話をして呉れまして、

工場から自分が歸る時其預所から連れて歸るといふとの仕組もあります。ソンなら中等以上の人はドウであるかといふと、是は交際の爲めに子供があると邪魔になるとか、或は甚だしきに至ると乳を哺ませると早く容色が衰へるとか云ふ、佛蘭西あたりの婦人が多くさう云ふので――自分の容色を長く保たんが爲めに子供に乳を哺ませるのを忌むといふ惡るい習慣がある。世界中――世界中といふのは餘り大き過ぎるか知れませぬが、日本くらゐ親の子供を可愛がる所は餘り無い、其代り非常に弊害が伴ひます、日本くらゐあまやかすことも無い、可愛がるあまやかす……所謂是は舐犢の愛と云ふのです、猫可愛がりと云ふのです。向ふでは子供預所で二十人位の小さい子供を一人の媬姆が預つてチヤンと世話をする、椀白ッ子惡戯ッ子があるか、其二十人ぐらゐの子供を一人のお婆さんが世話をするのであります、其の代り嚴しいこともエライので、チヤンと規則が立ッて居りまして時間が來ない內物を食べでもしますと、それを引ッ手繰ッて取ッて仕舞ひます。日本では物を食べたがる時でも「此次はいけないよ乾度」と言ッて遣る、だから食べてしまうと直ぐに小兒の力で甘く見まして地團太を踏んで「だゝ」を云ふ、さうすると又「此次〳〵」と云ひながらアトをやる。さういふやうなことは外國ではありませぬ、モウチヤンと遣らぬなら遣らぬ、斯ういふ風に規則正しくしますから側から見ると少し殘酷に見える、併しさういふ風にしますから又子供には規則正しい習慣がつくのであります。それが日本ではまるで缺けて居ります、其代り可愛がる、可愛がるからして親が始終子供を自分の乳で育てます。近來になつて大分色々の關係から、子供を

親の乳で育てなくなッて、或は乳母で育て　が。乳母も餘程ムヅかしいもので、完全の乳母を見附けやうといふのは大變であります。私は或時頼まれて乳母を見つけるのに四十三人見ましたが皆落第でした。それは乳母の不作年であつたかも知れませぬ、がさういふ風で完全の乳母を見つけやうといふにはソンなに澤山見ても見つからぬことがあります

そこで人間の乳、　ど良い物は無いが、人間の乳を離れて何が良いといふと、是はマア牛乳をやる外仕方がない。其他に山羊の乳や馬の乳もありますけれども、ソンな物は滅多に得ることは出來ませぬ、矢張牛乳であります。そこで牛乳といふものは何であると言へば、牛が自分の子供を育てる爲めに出す乳で、元と人間の爲に出すのでない、そこで之を人乳に、代用するにはナカ〳〵手が掛る、それは一定の規則がありますが、是のやり方は今日は申しませぬ。私の著書「はゝのつとめ」に委しく書てあります。……そこで牛乳の外にコンデンスミルク（煉乳）といふものがあつて、コンデンスミルクと生の乳とどッちが良いか、是は一概にコンデンスミルクが惡るい、生の乳が良いとも言へず、詰り品物に依ることでコンデンスミルクにも大變良いのがあり、生の乳に大變惡るいのもありますから、どつちが良いといふことは直ぐ申されませぬが、大體から言ふたらコンデンスミルクより生乳が宜い。併し是も子供に依つて生の乳が適する子供と、コンデンスミルクの適する子供とあるやうでドウも生乳を哺ませると始終通じが惡るかッたが、コンデンスミルクにしたらソンなことが無くて存外善く育つた例もあります、それは子供に適する適せぬにあります、一概には申さ

れませぬ。併し大體から生の乳とコンデントとどッちが良いかと申せば――例令ばこなれはどッちかと言へば、生乳の方がこなれが宜いと言はなければなりませぬ。コンデンスミルクの方は先づ平均六割か六割半砂糖が這入ッて居りまして、砂糖の量が多い爲めにドウかすると子供を害する。併し子供の消化器は大人の割にすると能く砂糖に堪へまし、子供の方が餘計お菓子を食べる、其割に胃を惡るくしませぬ、さうすると思つたほど害はありますまいが、マアどッちかと言ッたら前のやうに言はなければならぬ。

比叡山に登るの記

横行書屋主人

京都及び其附近には紅葉の名所數多し、比叡山の麓なる日吉山王社の境内も其一つに算へられ、秋錦の美三尾に勝ると聞きぬれば十一月廿三日輕裝して京都停車塲に抵り馬塲迄滊車に乘り、其處より人力車を雇ひて琵琶湖畔なる三保ヶ崎に抵りて滊船に便乘し坂本に赴く。琉璃を磨ける如き湖水面を東より西北へと乘り切るに、此の日天晴れて空に一點の雲なく風靜かにして細波さへ起らざれば船の上も座敷に居ると異なることなし、瀬田の橋石山寺は遠く隔たりたれば見えず、唐崎の松眼前に横はり蒼色蓊欝として小島の波に浮べるに似たり。之を過ぎて西北へと進めば比叡山無動寺谷の殿舍堂塔、森々たる老樹の間に隱現す、さながら馬遠夏珪の大幅を見るが如し、滊笛一聲坂本の濱邊に着きぬ。

此處より日吉迄車夫は半里余と云へど十二三町には過ぎざるべし、爪先上りの道なれば車行より歩行の方便なり。日吉山王權現は王城鎭護の靈社、

佛法守護の善神として朝野僧俗の尊敬大方ならざるより、往昔山法師等動もすれば此神輿を擔ぎ出して帝都に迫り、常路に向ひ强訴せしこと幾度なるを知らず、其度毎に干戈を動かし畏くも宸襟を惱まし奉りしかば、加茂川の水、山法師、双陸の賽、此の三は朕が心にまかせぬものと嘆かせ玉ひし帝もありしなり。織田信長怒て一山を焚戮せし後は山徒の勢威昔時に似るべくもあらねど本社に對する朝廷の御崇敬は今も猶新にて、此の日は奉幣使の參向あるため道路には盛砂し、神前には幕打廻し裝束せる神官嚴かに奉仕する樣例よりも最神々しかりき。

楓樹は一の鳥居より道路の左右に植られたるが其種類三四に止まらず、深紅あり淺絳あり黄なるあり樺なるあり、そが緑青もて塗つぶせる如き松杉に打雜れる、其隙間より碧瓦丹楹の神殿ほの見ゆる處是は全く土佐住吉極彩色の繪卷物なり。路の屈折せる所溪流に架けし小石橋あり、橋の上より眺むれば下流に尚二個の石橋架る、谷に沿ふて下り第三の石橋より見上れば兩岸の楓樹紅錦を曝して玉を洗ふが如き清流に影を倒し、其間に架れる橋上を種々に粧る男女の行通ふ樣繪にも畫き易からじ、日吉三橋の勝景とて世人の賞美するも謂なきにあらず。日吉の神殿は皆丹塗にて搆造尋常ならず、神前に三拜して延曆寺の途に就く。

日吉神社より延曆寺の中堂迄坂路凡そ二十五町、後人は前人の鞋底を見るとも謂ふべき嶮坂なり、殊に此間水の流もなく休息すべき掛茶屋もあらざれば登山者は水若くは菓物等を用意すべし。南北朝頃度々此處に合戰ありしが、何時も守る方に利ありて攻むる者の敗れしは路の嶮しきに因る。股引脚半の輕裝にてさへ困難なるに身に重き甲冑を

着けて登る處を山上より大木大石を投落し、銳き鏃にて橫矢を射られたらんには、如何に我慢強き九州武者も、意地剛き關東武士も面を向くべき樣なかりしあらん。道の傍に一町二町と路程を刻める石標建てり、行て二十丁の處に到れる時の嬉しさ云ふ計りなし、道の左なる佛堂の下に淸水の落つるあり、走り寄りて盥ひ嗽き、且つ身體の汗を拭うて漸く蘇生せる心地せり。

是より僅四五丁と思へば勇氣頓に加はり足の進みも早く、山門を入り石階を降れば宏大莊嚴なる佛殿の前に出つ、是は即ち根本中堂なり。

比叡山延曆寺は人皇五十代桓武天皇の勅願所にして延曆七年傳敎大師の草創ありし靈山なり。始



め一乘止觀院と申しけるを五十二代嵯峨天皇應仁二年勅して戒壇院を御建立あり寺號を延曆寺と賜る。中堂は棟行廿四間梁行十八間柱數七拾六本(廻り七尺二寸)銅丸搦造と稱す大要は唐土の天臺山に則りて搆造せしもの本尊赤栴檀の藥師如來は大師自作と云ふ、須彌壇は内陣の一段低き處にあり其下は一枚の大石なるよし、寶前に揭げたる三個の燈明は釋迦牟尼佛成道して初めての說法今日で云ふ處女演說の時手づから點ぜられし火を滿座の羅漢法燈として佛敎のあらん限り傳んことを約し、佛滅度の後は師弟相承て護持せしを鳩摩羅什三藏渡唐の時之を天臺山に傳へ、大師入唐歸朝の日又之を

此山に傳へしものと緣起に說けり、大師の歌に
　明けく後の佛の御世までも
　　光り傳へよ法の燈火
とあり、五十六億七千萬歲の後彌勒佛の出世する迄此法燈を維持せんこと今の僧侶の有樣にては餘程覺束なけれど、佛滅後三千年近く揭け來り、其間に淨土宗の開祖法然上人、淨土眞宗の開祖親鸞上人、法華宗の開祖日蓮上人を始め、幾多の高僧知識を養成せしは偏に大師の功と謂ふべし。此山には戒壇、双輪塔、開山堂、等見るべきもの多し然れども信長が一炬に燒蕩したる以後の建築なれば三百年以上のものとてはなし、中堂は豐臣秀吉再建に着手し、秀賴その遺志を紹ぎしも未だ成功に至らずして豐臣氏亡び、德川三代將軍家光大に土木を興して竣工せしめたるものと云ふ、其規模の雄大なる、結構の宏麗なる、流石に豐國大猷二豪の遺物たるに愧ぢざるものあるなり。

中堂の參拜終りて無動寺谷に赴く、大乘院を訪はんとてなり。丘陵を躋え溪谷を涉り六七町行けば琵琶湖の風景を一目に見る勝地に出づ、此處にて目を湖上に放てば、南北二十餘里、東西十餘里琵琶を橫へたる如き大湖の勝景双眸の裏に聚り、萬頃の煙波藍を湛へたる如く、白帆の點々たるは鷗の飛ぶにも似たり。志賀の里、辛崎の松は眼下にあり。右手には三井寺、大津驛、膳所の城、續きて瀨田の長橋、石山の古梵刹、依稀として指點すべし。左手には堅田の浮御堂、比良の高根、白髭の社、竹生島、髣髴として隱現せり。東北面には三上山雲に峙ちて近江富士の名世に高し、古昔此山に巨蜈蚣住みて、湖水の龍宮に寇せしを俵藤太秀鄕乙姬の請に依りて而も此山を七卷半卷きたる大物を唯一箭に退治せしことはお伽話の赤本に

詳かなれば此には略しぬ。八幡、彦根、長濱など皆湖の東に連なれり。北近江には志津嶽、余吾の海、等羽柴柴田兩雄の古戰場にて柳瀬中河内を經て越前に至る、此他名所舊跡枚擧に遑まあらず。

さゞ波や比良の山風うみ吹けば
　釣する蜑の袖かへる見ゆ

と古人の詠歌など思出て時の移るを覺えざりき。抑無動寺の大乘院と申すは往昔慈鎭和尚の住し玉へる寺にて親鸞聖人九歳の春和尚の弟子となり二十九歳迄廿年間勉學苦行し玉へる所なり。此處より中堂迄十八町の坂路を聖人一千日通ひて參籠し女人成佛の儀に付き藥師如來に祈願ありしに滿願の夜御告を蒙りて更に京都の六角堂に百夜參籠爲し玉ひしに滿願の夜觀世音菩薩聖僧の貌を示現し偈を說て宣く。

行者宿報設女犯。我成玉女身被犯。一生之間能
莊嚴。臨終引導生極樂。

爰に於て聖人在家の凡夫五障の女人を極樂へ導くべき一宗を開かんと思立給へるなりと。觀音示現の有無は暫く措き、聖人は皇太后の大進正五位下藤原有範の子、當時少僧都聖光院門跡寺務たるの身を以て、無動寺谷より京都の六角堂迄凡そ三里半の路を一百日の間夕に山を降り、曉は山に昇り一日も怠らざりしと云ふ、其剛根には實に敬服せざるを得ず、一宗の開祖として六百餘年間幾億萬道俗に尊敬を受くるもの又謂なしとせざるあり大乘院には聖人廿六歲の時自作せし木像あり、六角堂には聖人草鞋を着け叡山を上下せし時の肖像を安置し之を泥足の御影とて信徒頂禮す。

抑も男尊女卑の陋風は宗教の上にも吹き及ぼし、諸高僧概ね皆五障三從垢穢重惡と排斥して女人は

永劫成佛の期なく、未來は三惡道に輪廻するものとして之を度外に置きしに、特り聖人彌陀大願の功力を宣べて女人往生の宗門を開き玉ふ、實に聖人は婦女子の恩人と謂ふべし。

無動寺谷より加茂川端迄は二里余あれど、下坂なれば格別難儀ならず、午後一時過山を下り四時頃松原通大宮ある假寓に着しぬ。疲勞甚しく迚も翌日復び登山せんと抔は思ひも依らず、此に於て益々古人の剛健なるに感服せり。比叡山へ登るに京都よりすれば坂路六七十丁に及ぶ、坂本よりなれば坂急なれど二十五丁故登山者は此路を取るを便とすべし。

さゝすとも誰かは越ん逢坂の
關の戸埋むよはの白雪



ロートケッペン（西洋お伽話）

佐藤天風譯

一遍見れば、どんな人でも可愛がられずには居られない様な、柔順しい小娘がありました、中でも祖母様は、此娘が可愛くて可愛くてたまらないのです。

だが此祖母様は、何を此小娘にやつたら喜ぶかといふ事も分別らないので、赤い天鵞絨で作た、小さな帽子を、此小娘に贈りました。ところが此帽子は、外の子供が被ては、少しも似合はないが不思議に此小娘だけには、實によく似つかはしいのです、それだもので、人が、此小娘をロートケッペン（譯せば赤い小帽子）と呼びました。

或る日母様が、ロートケッペンを呼びまして、

ロートケッペンや、此肉と此酒を祖母樣の所へ持てつておあげ、祖母樣は、今病氣で衰弱してなさるからね、それで前々から、お前に來る樣にと云て居らしやるから、お前がいけば、屹度お喜びなさるのよ、だから、途中で外見をしたり、お酒の壜を落したり、碎したりしてはいけませんよ、祖母樣は、何にも食べるものが、なくなりなさるからね、其からもう一つは、祖母樣の所へ行たら、今日はと挨拶をして、きよろ〳〵四方を見回はす樣な事があつてはいけないんですよ、ねえ、わかつたの、

え丶、屹度母樣の云ふ通りにしますよと、答へて、ロートケッペンは可愛らしげにあるいて行ました。

祖母樣は此村から丁度、半里程も隔てる森の中に住まつて居るのです、其處をロートケッペンは無邪氣にチョコ〳〵し、面白そうに歩いて、森の中にかゝると、さあア其處に、狼が來ました。

然し、ロートケッペンは、無邪氣な子ですから狼は恐ろしいものであるか、又惡い獸であるか少しもそんな事は知らないのです。

え、今日は、ロートケッペンさん、

そうね、狼さん、

ロートチッペンさん、今日は又た何の御用で、こんな早くから、何處へいらつしやるの、

あゝ、うちの祖母樣とこへだよ、

なにを、あなたは前垂に持て居らつしやるの、

え、肉と、お酒なのよ、あたし達は、昨日たべたんだがね、祖母樣は病氣で、弱て居らつしやるからねー、健康になる樣に、持てつて上げるの、

ロートケッペンさん、祖母樣ていのは、何處に

居らつしやるの、
え、森の中をね、七八町ばかりのところよ、あの大きな柏樹が三本あるでしよう、あすこに、其下に家があるでしよう、あすこなのよ、お前のすきな、それ、胡桃の樹の下さ。

すると惡い狼奴の考へるのには
こりやあ、あの年寄よりは、餘程甘そうだ、肉が柔かくて、丁度一口に喰べよさそうだ、よし、よし、上手に欺騙して、二人ながら、喰べてしまはふと、腹のなかで思ひながら、ロートケッペンの側について、一處に參りました。

ロートケッペンさん、一寸あの奇麗な花を御覽なさいよ、ほれ、わたし等の回りにあるぢやありませんか、なぜあなたは四方を見ないの、はれ、また鳥が面白そうに鳴いてますよ、あなたには聞えないの、乾度、あなたは學校にでも行た樣に行儀良くしてるんでしよう、だがねー、森だから、ちつとは學校と違つてもいゝんですよ。



却々狼奴甘いことを云ひます、
ロートケッペンはつひ其氣になつて、四方を見回しました。

すると美しい太陽の光は、生々として色々な花の彩色を輝し、あらゆる美しい花は、歩るく途に滿ち滿ちてるので、元來親切な子ですから直にかういふ事を考へました。

若し新しい奇麗な花束を造つて、祖母樣の處へ持てつて上げたら、どんなにお喜びなさる事でしやう、なに、まだ早いから、少し位は遲くなつて

もいゝでしやうと、思つて、遂、母様の云い付けを忘れて、森の中へ途をそらして、色々な花を採がしました、赤のを採ると、白のがほしくなり、紫のがあると、茶色のが採りたくなり、つひつひ森の深々に這入てしまひました。すると狼はロートケッペンの側を離れて、驅けて、祖母様の處へ參りました、戸をトントンと敲きますと、中から、

どなたです、

ロートケッペンなのよ、肉とお酒を持てきたのよ、

ぢやあ、鈎鐶をお押し、

狼奴は鈎鐶を押す、戸はする〳〵と開く、開くや、否や、づか〳〵と中に這入て、物も云はずに臥してる祖母様を呑みこんでしまつて、其着物を自分が被て、床の中へ寢て、ロートケッペンのくるのを待て居ました。

扨てロートケッペンは、奇麗な花を採り、最早持されぬ程になりましたから、さあ　祖母様の處へ行こうと元の途へ參りました。

それて祖母様の家へ來ると、戸が開いてるから、不思議だと思つて、中へ這入てきながら、祖母様に變がなければいゝ、と、心に祈りました、そうして部室に這入ながら、今日はと申しましたが、返事がない、更に這入て來ると、其處に祖母様が臥て居ました、そして顏に、深く被物をして、如何にも様子が妙ですから、

祖母様は、大きな耳があるでしよう、

と云ふと中から

あゝ、お前の云ふ事位は、よく聞えるのを持てるよ、

ぢや祖母様、大きな目を持ていらつしやるの、

あヽお前を見る位なのは持てるよ、
ぢや祖母樣手を持てるの、
わヽお前を握る位なのは持てるよ、
ぢや、祖母樣、口を持てるの、
すると狼奴は、なにお前を喰べる位なのはと、云ひもわへず、いきなり床から飛び起きて、可愛らしい、ロートケッペンを呑んでしまひました。
其處で狼は、腹が一杯になりましたから、床の中へ這入て、鼾をかいて、よく眠込んでしまひました。ところが此家の前を、一人の獵夫が通りまして、中に大きな鼾聲がするから、なにか祖母樣が變つた事でもありはせんかと、づか／＼と部室の中へ這入て來ました。すると其處へ狼奴がちやんと眠て居ました、
えい、忌々しい、畜生だ、先きから、貴樣を探してたんだぞ、

と云ひながら、鐵砲に丸を込めましたが、圖らずも、祖母樣が腹の中へ、まだ生きては居ないかと思ひ、今度は腰の刀を拔いて、寢てる狼の横腹をぐつと、一刺つきました、續いて二刺つくと、なんだか赤い帽子の樣なものが見へますから、猶一刺切りますと、なかから、可愛らしい小娘が出てきて、
わヽ驚いた、狼の腹の中は眞暗いこと、
と叫びますと、續いて祖母樣もまだ、死なずに出て來ました、ロートケッペンは直ぐ大きな石を拾ひ、默て狼の腹の中へ容れましたものだから、狼は、石の腹の底に沈むに從て死んでしまひましたのです。
祖母樣は、そこで肉と酒を頂いて健康になり、獵夫は狼の皮を裂いて持ていき、ロートケッペンも、祖母樣に可愛がられて、三人で大喜をしま

した、そうしてロートケッペンは、二度と森を通るまいと思ひました。

◦　◦　◦　◦　◦

然し其後に、ロードケッペンが、餘儀なく又祖母樣の處へ行かなければならない用事が出來ました、しかし今度は、話をしられても、狼には一言の返事もしないで、眞直ぐに急で、祖母樣の處へ參り、途で狼に出逢ふた事を申しました。

よし、それぢや、戸の中へ這入てこないようにと、戸を堅く閉ぢて、祖母樣と話をしてゐると、今度は狼は戸を、トン〳〵と敲いて、ロートケッペンの眞似をしながら、

祖母樣、ロートケッペンですよ、戸をわけて頂戴いな、甘い物を持て來ましたから、

然しこちらでは、默て戸を開けないで居ると狼も計畫の破たのを覺り、家の回りを、ぐる〳〵繞り遂には、屋根に跳び上りて、ロートケッペンの歸るのを、待て居ます、其は、ロートケッペンを追驅て暗所で喰べて仕舞ふと思ふてるのです。

だが祖母樣は、狼の考へてる處を察して、今度こそは、復讐を取てやらうと決心しました、丁度屋根の下の所に、大きな石の槽があるのです其處に前日こしらへた、甘い肉の料理がはいつて居りますから、ロートケッペンに云ひ付けて、其に水を一杯になる程容れさせました、ところが屋根で、狼奴其匂を嗅いで、其の甘そうなのに堪えられませんで、鼻をヒク〳〵させ、舌を鳴らして、しまひには、屋根の上から、首を伸ばして、石の槽の中を覗き込みましたが、だん〳〵前の方へ、のりだし、遂には、體の重量が前脚にばかりいつて、がたと音がすると同時に、見事足を踏み損ねて、此大きな石槽の中に、眞逆に落ちこみ、

出る事が出來ないで、水を呑んで、溺れ死ましたのでございます。

もう畏ろしいものが居ないから、ロートケッペンは、喜んで家に歸りました、《終り》



つまさだめ

《中》

柳絮生

『もう一つ位、好いでせう、エ先生、一盃限りじやア、餘りおつけないじやアありませんか、ねエ先生。』

『イヤもう何で……』

『イヤもうじやア困りますねエ、今夜は貴下のお床上げの内祝ひじやアありませんか、併しお肴ッてば、妾の手づくねの、ホ……あの百科全書に敎はつた西洋料理なんですから、進まないのも無理じやアないけど。』

『何、決してその、阿母さんの御料理が口に合はんなど丶、ハイ、其麼ことは御坐いませんが、酒の方は御承知の不調法なのですから、御免が蒙りたいので。』

『それはもう知つて居ます、居ますがね、日常でないのですから、身體に障らない様に、一つ二つ過して下さいなねエ先生。』

『では頂きませうが、萬望阿母さん、先生先生と

仰しやらずに、猶且その謙太郎謙太郎と御呼びなすつて頂きませう。」

「ホ……、だつて先生に違ひないじやアありませんか、立派な學者をつかまへて、いくら自分の產んだ兒だつて、何時まで呼び捨てに出來ますものか、三十にもなる紳士をさ。」と、眼を細くして硝子盃を執り上げた。

「阿母さんは萬望小子にお搆ひなく、お酌は小子が致しますから」と、前の瓶を執つた。

「今夜は貴下の床上げのお祝ひですもの。」

「ですから阿母さん、御遠慮をなさらんで。」

「ホ………、遠慮するかも判りませんわ。」

「さう仰しやらずに、阿母さんはおなりなさるお口ではありませんか。」

「ホ………、妾は正覺坊ですからねエ。」

「決して左樣では」と、眞面目に言譯をする。

親三盃の兒平盃、膝も崩さず語調も亂さぬが、和氣の靄々たるのは、全く春の如しで。

阿母さんと云はれる人は、四十六七で、肉附きの良い、ぽちや〳〵とした、極愛嬌のある方で、身長の小作りなのが、年齢を十年も若く見せ、娘盛りに髷も入れずに、自毛で島田に結へた程の毛を、束髮に結んで、毛織の茶萬筋の綿入れに、黑縮緬の羽織を引ッかけて、ほんのりと紅を潮した顏を、惜氣もなく電燈になぶらせて居るのを見ては、阿母さんと呼ばせるのが、不憫至極の次第なのである。

床上げの主人、阿母さんの云ふ先生、これが園城寺博士で、つい三日程前に三十になつた許り、眉毛が濃くて、鼻が高くて、口元の一文字に締つた、色の白い、が、苦みのある、それは鼻下に蓄へた、八字髯の所爲でもあらうか、ではあるが、黑眼勝

ちの女に欲しい涼しい眼は、何時も側から其苦みの半分を打消して居るのである、頭はくり〳〵の一厘苅で、今夜は黒羽二重の五つ紋の着物へ、大巾の濱縮緬を無雑作に捲きつけて居る。

阿母さんは、三十になる博士を、口では先生先生と云ひ乍ら、三つ四つの小兒かの様に思つて、可愛さを満面に湛えて、立派なものだと、口まで出たのを、僅に呑み込んだのである。博士も絶えず微笑して、酌に怠りはない。

『あの先生。』と、阿母さんは、故らに低く呼びかけたのである。

『謙太郎で御座いますか』と、博士は答へた。

『さう〳〵、先生ッちやア叱られるンでしたねエ、が、御前、今夜のお目出た序に、些と相談があるんですがねェ御前』と、博士の顔を下から覗いて、その氣配を窺つたのである。

『ハテ、御相談とは。』と、博士は膝を直して、容を端したのである。

阿母さんは、前へ置いた盃を、グッと干して、博士に屬しながら。

『さう改まつてお呉れでは御話が出來ませんが、實はね』と、前置きをして『實はそのお前の嫁の事なんですが。』と、先一の矢は放たれた。

嫁の一語を博士は如何感じたか、身顫ひをして、太く長い息を漏らして、腕を組んで眼を閉ぢて了つたのであつた。

日常ならば、博士に眼を閉ぢられては、もう二の句を續がぬのが、例の様になつて居る阿母さんも、今宵ばかりは盃中の物を味方に膝を進めたのである。

『謙太郎、今夜はねェ、確乎としたお前の挨拶を聞かして貰はないと、妾が先方へ向つて返辭をす

ることが出來ないから、ねエお前。』

『…………』

『何もお前が可厭だと云ふのを無理に强ひ附けやうと云ふンじやアないが、あの伊集院の絢子さんならば、誠に似合つた好い緣談だと妾は思ふのさ、貴族女子學校では優等の卒業生でさ、標緻といへば殿方の評判じやアない學校の御朋輩が、伊集院小町と云つて居なさるのでも知れて居るじやアないか、その上に又一つの見識を有つて居てさ、歲こそ若いが交際場裏でのきけもので、貴婦人方や令孃達が絢子さんの顏を見ると、襟を正して迎へると云ふじやアないか、ねエお前、その絢子さんが、先方から是非ともと云ふ譯で、新華族ではあるが、正三位伯爵夫人が妾の前へ手を下げて娘をどうかと御賴みなさるのだものを。』

阿母さんは、稍々乘地になつたのである。博士は始めて眼を瞬いたのである。

『阿母さん、その人ならば、知つて居ます。』

『さうかエ、お前が知つて御在なら、もう妾が、お饒舌をするには及ばない、がお前、どうだね、彼の孃でも尙不足なのかエ。』

『ハイ。』と、膠もなく博士は言ひ切つた。

阿母さんは後へ仰け反つて、眼を丸くして博士の顏を瞶めて居る。

『ハヽヽヽヽヽヽ。』

博士は哄然として大笑したのである。

『何をお前はさう御笑ひなの。』と、阿母さんは、頗る不平の面地であつた。

『イヤ、餘り阿母さんが御熱心で在つしやるから、それが可笑しくてつい。』

『熱心にもなりますさアね、否、熱心になるのが當然だらうと思ひます、が、併し萬事御心得のお前

に、女の淺い智惠で何を云つた所で追つくものじやアなしさ、御前が可厭とお言ひなら、御斷り申すより外はないが、妾には何だか彼の娘に未練が殘つてねエお前。』

『世間は存じませんが、小子の目では、其麼に阿母さんが、お惜みになる程の價値は御座いますまい、第一あの鼻の先へ。』

『鼻の先ッ。』と又驚いて、『黑子でもあつてそれがお前の氣に入らぬとお言ひのかエ。』

博士は身體を一寸斜にして嘯いて。

『さア阿母さん、尙お一盃。』と、前の瓶を執つたのは博士である。

『確か黑子なんぞは無かつた筈だが』と、博士の瓶には一瞥も與へず、阿母さんは頻りに自身の記憶を喚び起して居るのであつた。

『阿母さん』と呼び懸けて、微笑した博士は、

『黑子ではないのです。』

『黑子じやアないの。』

『學問なのです、それも雀の淚程の、、、、。』

『鼻の先、學問』と、獨語した阿母さんは、急に襟を正したのである。

『謙太郞。』

『ハイ。』

『よく解りました、爵位なんぞは妾も大禁物、お前の大禁物なのはよく知つて居ます、が、その爵位のある人の娘をも構はず、お前に勸めたのは全く、彼の娘を明治の夫人の龜鑑とも、模型とやらとも、見たからの事さ、併しお前の目は妾より高いから、お前の見た方が確には違ひあるまい、が、謙太郞、お沒れになつたお前のお父上様が、日常仰しやつた、(完きを望めば遂に得ず)といふ御言葉をもう一遍考へて見てねエ謙太郞、それも無理

とは。」

阿母さんの目は、何故かもう潤んで居た。

『殊に種々御心配をかけまして』と、博士は首を低れたのである。

一座は白け渡つた。

不圖氣の注いた阿母さんは、盃を取り上げて博士に勸して、博士の油斷を滾々と注いだのである。

『妾が談話の出し時が惡るかつた御蔭で、節角の御祝ひの席を、寂しくして了ひました、サアお前それを一盃グッとねエ、さうして機嫌を直して下さい、ねエ謙太郎。』

『ハ、、、、有難いとこそ思へ、何で機嫌など損じてなるもので御座いませう、併しさう〳〵、御心配を頂きますのも恐入りますから、小子は小子が妻とすべき者に就ての希望を御話し致しませう、先第一が園城寺文學博士の妻にならうと云ふものは眞平御免なので、若しも園城寺謙太郎の妻にならうと云ふものがありましたらば、容貌の美醜、學問の有無、那麼ことは小子の問ふ所では御座いません、喜んで即時に迎へますが。』

『はてね。』と、阿母さんは其意を悟り兼ねて居る。

『イヤ、申上げやうが、惡う御座いました、小子は、名利以外に超然として女子で、人間の最も神聖なる同情と云ふものを有つて居る女子が妻に欲しいので御座います。』

『仕合せと、さう云ふ人があれば善いがね。』

此時始めて陶然として博士は、音吐朗々漢詩を歌ひ始めたのである。

『盡日尋春不遇春……。』

次の句に移らうとしたとき、次の間から襖をするすると開けたものがある。

銀杏返しは現れた。
『あの渡邊樣が御光來になりました。』
『おうさうか、手紙を遣つて置いたで、とうに成る筈ぢやと待つて居た、構はず此處へ通して呉れ。』と、銀杏返しに命じて、『阿母さん、通しても差支は御座いますまい。』と尋ねた。
『あゝ、お前さへよければ――、併しお前渡邊といふと。』
『ハイ、この先の派出所に勤めて居る、巡査なので御座います。』

(下)

修身不犯の人とまで評せられた文學學士園城寺謙太郎其人の、居間の床には、母なる人が御先祖からの舊例だと、大三寶の上に供餠を据ゑたその上には、海老に橙はんだわら、目出度き明治三十六年の一月の、八日も更けて、午後の十時といふに、供餠の前に机を出して、筆を揮つて居る女がある。

夜眼にも判るのは彼の着て居る黑の着物に白々と染め拔かれた、園城寺家の紋所と、彼が艶々結ひあげた大一番の丸髷の濡羽色と、而して金簪、而して燃ゆる斗りの緋のてがら。
彼は電燈に照されて居る羽二重の樣な雙の頰へ、ぱつと時ならぬ薔薇の紅を散して居るのは、頗る熱心といふことを現はして居る。
韻文か散文か、そも彼が憂身を窶して居るのは何であらう、これを朱髯朱顏で彼の向ふの供餠の上に、りきんで居る海老將軍に尋ねたれば、將軍は云つた、(いろはにほへと)と。こゝに刈り取る眞柴垣、熱心なる彼の後へ覗ひ寄つた。曲者一人、曲者は唐突に。
『良好良好、八重御前は何時の間にさう上達をし

だらう、實に一心と云ふものは恐ろしいものだ。』
『あら貴夫可厭よ――』と、大丸髷は、身を以て机の上を覆うて、頭を上げて怨めしそうに曲者の顔を瞶めて、『もう御就寝になつたかと思つたら、まあお人のお惡いこと、何時の間に妾の後なんぞへ、眞正に後生ですから、あつちへ行つて頂戴な………、じやあなかつた、彼方へ御出遊ばして頂、ホヽヽ、まア如何したら好いんだらう、眞誠に後生一生の御願ひ………。』
『ハヽヽ、お前は解らん人だ、文字は何の爲に習ふのだと思つて居るかエ、書いて人に見せればこそ、用を達すのではないか、併し未だ善く書けぬからと、お前は云ふだらうが、それは他人に對つて云ふことで、夫たるこの園城寺謙太郎が、妻たるあぐり………ではなかつた、夫人たる八重に對つて、その書いた文字を見る、見せる、恥かしいことも何もない、惡い所は直して遣るで、これさ八重。』
園城寺博士はお八重夫人の肩に手を懸けたが、夫人の身體は堅きこと恰も石の如しである。
『これ八重、さう强情を張るものではない。』
『でも。』
『でもの事はない、見せるのが本道だ。』
『明晩は乾度見て頂きますが、今晩は萬望。』
『では見せられぬと云ふのだな。』
博士は態と語調を强めたのである。
『じやアないけど』と、夫人はもうおろ〳〵聲。
博士は知らぬ振で。
『八重、そう乃公の言語を用ひぬと、阿母樣へ申し上げるがよいか。』
夫人は机から飛び退いて、博士の前へ平伏して、欷歔をしながら。

『お目に懸けます、妾が惡う御座いました、申し上げるの丈けは、御勘辨遊ばして下さいまし、御願ひで御座いますから。』

博士は滿面笑み崩れたのである。

『それ見たことか』と、手を伸べて、机の上の草紙を執つて『立派なものだ、少しも恥づるには及ばぬではないか、ア、八重。』

讃められる程倘つらく、夫人は忽に涙を拂つて、夫の側に寄り添つて。

『貴夫は讃めて下すつても、ひの字と、むの字が、可笑しくッて、いくら書いても書けないんですものを』

博士は至極眞面目なのである。

『少しも可笑しい事はない。』

『ホ……………。』

袖を口に當てた夫人は、始めて笑顔を見せたのである。

『だつて貴夫、ひの字とむの字が、全然箪笥のかん見たよーなんですものを。』

博士は膝を打つて失笑して。

『ハ……、云はれて見れば、少し似て居るやうだか、良矣良矣、乃公が手を執つて敎へて遣らう。』

夫人は嬉し氣に机に向つて。

博士の右の手は夫人の右の手に重つた。

博士の腮は夫人の丸髷の上を越して、鼻が蘭麝の饗應を受けて居るのであつた。

ひむの二字に時を費す三十分、紙を費す十有數枚、夫人は手を合せて博士を拜んだ。

園城寺夫人はいろはの卒業であつた。

『オイ八重、先生に禮をせんか。』と博士は夫人を顧みて微笑した。

『御禮』と、首を捻つた夫人は、やがて頷いて次

の間へ立つたのである。
博士はマニラの口を切つて火を移した。
夫人は恭しく、何物か目八分に捧げて來た。
『イヤ、これは御馳走、丁度咽喉の乾いた所であつた、結構々々、ビールに林檎とは忝ない、サア酌をして貰らはう。』
　硝子盃を突き出した博士、夫人は浪々と酌をして、膝に手を置いて、四角四面に座を占めたのである。
博士は三盃のビールに陶然として。
『八重、一つ合ひをせんか合ひを。』
　屬された硝子盃を受けた夫人は、飲む眞似をして、博士に返盃したのである。
『ハ……、何故眞誠に受けぬのかね。』
『でも。』
博士は仰反つて大笑して。

『よく(でも)を遣ふ人だ、でもがどうしたと云ふのかエ、ハ……、其の硝子盃は、鑵笥のかんには似て居はすまいに。』
『ホ……。』
『何が可笑しのかエ。』
『でも。』
『ハ……、又か。』
『で、ホ……。』
　やかで博士は無理やりに、ビールを注いで夫人の前へさしつけたのである。
夫人は再び容を端して。
『貴夫。』
『何かね。』
『あのビールもお酒で御座いませう。』
『さうさ、酒といへば酒、茶といへば茶のやうなものだがそれが如何したのかエ。』

『どうもしやしませんけど。』

『ハ……、今度けどかエ。』

夫人は何とも感じなかつた。

『貴夫、此間國から親父が出て來たとき、妾に云ひますには、わぐり、手前は果報者だ、金束あたりの水呑百姓の娘が、此麼立派な家の嫁になつて、那麼立派な聟殿に添ふといふのは、乃公アまだ眞の事とは思はない、全然夢の樣に思つて居る、だから手前は、氣を沭ける上にも氣を注けて、日常勿體ないことだといふ事を忘れてはならぬ、手前がかう云ふ身分になつたのも、第一がお不動樣の御利益で、其次が渡邊といふ巡査樣の御蔭だから、好いか、聟殿を神樣と思ひ、姑樣を佛樣と思つて、身を粉にして仕へなければならぬ、へらず口は叩くなよ、酒と名のついたものは白酒でも、こゝの家を追ひ出される敵だと思うて、一滴も飲んではならぬぞ、可愛がられたとて、のさばるな、叱られたとて脹れるな、必ず共に、土百姓の娘は那麼ものかと、人樣に後指さゝれるやうでは、第一聟殿が手前を見拔て下された、其眼玉を曇らせると云ふものだから、これこの通りこの親が手を合せて頼むによつて、と、涙を翻して云はしつた、それを忘れては濟まぬによつて。』

夫人は膝に一雫。

無言の博士は、夫人の前の硝子盃を執つて、一息の瀧飲み、ビールは茲に明き瓶となつてその任務を了つたのである。

『八重。』

『あい。』

『お前は好い女だなア。』

夫人は流石に顏を赧らめたのである。

『御串戯はもう……。』

『イヤ串戯ではない、日本國の夫人が皆……學問も場合によると人の天性を損ふことがあるが、それは疑問として。』

『貴夫、もう御就寢になりましては。』

『さうさのう。』　（をはり）

柳紫生白す、本編は曩に、柳浪先生の閲を願ひ、國光社に寄せたるに、如何なる行違ひにや、合作の名義にて紙上に現はれ、為に罪を柳浪先生に得て、畏れて其閲を願はれぬ場合となりたれば、覺束なくもひとりにて結びをつくる事とはなしぬ、看ん人その思召にて。

立のぼる烟ならずば炭がまた
　そこともいさや峰の白雪

風さへて寄せくる波のあともなし
　氷る入江の冬の夜の月

難波風入江にわたる音さへて
　あしの枯葉のかげぞ寒けき



文林

寒松　徳大寺實則

色かへぬまつのみさをそしられける
　ふゆかれはてしみねにのこりて

冬月　鍋島直大

うす雪のふれりと見しはにはの面の
　しばふにさゆるつきにそありける

海眺望　長岡護美

大そらのくものひまよりつきさして

うなはらとほくふねのゆくみゆ

苔上落葉　竹屋光昭

みどりなる苔のむしろにくれなゐの
おちばのにしきちりかさねつゝ

遠山初雪　宮地嚴夫

めづらしく黒かみやまのいたゞきに
見えそめにけりけさのはつゆき

野逕霜　北郷久政

苅かやも尾はなもかせにをれふして
ましろにおける野路のあさしも

池水鳥　小出粲

浮ふへきいけのおもてはひろけれと
ところせけにもつとふをしかも

寒樹風　植松有經

木からしに吹さらされてくぬきはら
はねのことくにみななりにけり

雪遲　大口鯛二

のどかなる日數のみこそつもりけれ
ことしのふゆはゆきなかるらむ

和布刈　遠山英一

わたつみの底のわかめはみやつこも
かみのちからをかりてかるらむ

待雪　蜂須賀隨子

黒かみにつもらむこともわすられて
うなゐとゝもにゆきをまつかな

自轉車　柳原愛子

人の手もからてのりゆく小くるまは
ときもおそきもおのかまに〳〵

松上初雪　南郷柳子

夜からしにふる葉はおちし松の上に
けさめつらしくかゝるゆきかな

行幸　小池道子

御いくさを習さむためとかしこくも
　あら野のすゑにみゆきますらし

冬興　北島以登子

かれ芝のうへにあらそふたまあそひ
　ふゆのさむさもしらぬけふかな

忘年會　常磐井文子

もろともに又こむとしのしたしみを
　かねてもちきるまとゐたのしも

冬森　田中瀧子

夕へゆふへかへるからすも冬かれの
　もりのねくらやさひしかるらむ

冬河風　中村禮子

ひををまつせゝのあしろき霜みえて
　ふくおとさむき夜半のこからし

殘菊宴　小川直子

さきのこる菊をかさして舞ふひとの
　たもとにそゝくむらしくれから

小野道風　河村重子

淺ちふの小野のふるみち千代かけて
　かをるもゆかしわきはきのはな

母の三年の靈祭に詠める

下田春興

たらちねの母のみことば　上をあがめ下を憐れみ
親を思ひ子を慈くしみ　いもせの契りもふかく
友垣のむつびもからく　人のゆく道をまもらひ
露ほどもたがはね人と　行きかよふ人もいひ月
なみの子の我もゝしきは　代の中はすべなき者か
人の代はあへなき者か　一とせにひと度だにも
いたつきの床にもつかす　健やかにましける者を
まさきくてありけるものを　もみぢ葉の匂へる宿の
秋霧の八重立つ園に　ゆくりなくいでたちまして
村時雨ふりのすさびに　若葉なすちりましにけれ
別れてゆ朝に日にけに　こふらくのやむ時をなみ

茜さすひるはしみらに　面影に立たぬときなく
ぬは玉の夜はすがらに　夢にしも見えぬ時なく
ぬえ鳥のうらなきをれば　小車のめぐる月日は
夢のまに一とせすぎ　いつしかも三年を過て
けふしもみ靈祭ると　榊葉をみかげと仰ぎ
海山の品とりよろひ　榊にはしめをとりかけ
其しめにゆふをとりして　榊なすときはかきはに
白木綿のきよき心ろに　其のしめのいや遠く長く
やすらけく鎭りませと　父君もうからもつどひ
はらからもやからもよりて　大前につかへまつれば
ありし代の其の面影の　まなかひにもとなかゝりて
われはもよわきてこよひそしぬひかねつる

瓦焼く今戸の烟くれに
　すみだかはらに千鳥なくなり
春を待つ心ばかりはうなゐ子の
　むかしに猶もかはらざりけり
惜めども暮行く年はとゞまらで
　殘るひとよもはやふけにけり



十二月廿日兼題

雪中興

天　東京四谷區元鮫ヶ橋五十八番地　安井京子

おもふどち舟さしてみむますかゞみ
　すみだかはらのゆきのあけぼの

評。一段興深し

地　筑後國三井郡草野町　鋭山増代子

いひしらぬあはれそこもる玉くしげ
　ふたみのうらのゆきのあけぼの

評。いひしらずめでたし

人

肥後國熊本市東吉原町　田代艶子

雪見さけうちすゝろひてしつか家に
とよとしうたふこゑそきこゆる

評。よく題意にかなへり

甲之部

埼玉　前野ふさ子

このねぬるわさけの庭にふりつみて
つきとはなとにまかふはつゆき

大阪　伊勢村春子

さむさをもうさも忘れておもふとち
ゆきの空と居のおもしろきかな

乙之部

みや人もすたれかゝけてめてつらん　肥後　坂本美智子
けさおもしろくつもるしらゆき

おもしろしふしみまろひみ犬の子の　札幌　山田静子
たはれたはるゝゆきのあしたに

ちりのよの塵はうもれてかれきにも　札幌　山田ふみ子
はなと見るまてつもるしらゆき

むつましき友うちつとひにはもせの　東京　積山鏡子
ゆきなめてつゝかたるたのしさ

こゝろあひの友なはとひてけふひとひ　栃木　青木たま子
ふりつむゆきなめてはやさまし

あけまきかうちよろこひて雪つふて　神戸　井上品子
なけうつまゝそなかしかりける

ふる雪なおもしろしとてうなゐこか　長崎　八尾いへ子
まれふいくさもいさましきかな

ふる雪にいとゝいさめる男の子らの　和歌山瀬　戸榮子
いくさあそひやたのしかるらん

ふれ〳〵とそてなかつきて少女らの　三河　永井さい子
ゆきにうたふもおもしろきかな

しろたへにふりつむ雪はわかにはの　肥後　德永多瑠子
うめにさくらにはなさかせけり

野へ山へはなとも見ゐてふりつもる　埼玉　横田音羽子
ゆきおもしろきけさのみわたし

春ならぬこゝろのこまもいさむまて　伊豫　竹村竹里子
野やまはゆきのはなそさきける

梅か枝にふりつむゆきなうくひすも　大阪　大阪谷新子
はなとめてゝやはつれなくらむ

ゆきのみか友のこと葉のはなさへも　大阪　伊勢村花子
ともにつもりてめつるけさかな

こからしにあれし野山なおもしろく　本郷　篠田圓子
ふりうつめたるけさのしらゆき

ふゆかれの木々のこすゑも花とみる　大阪　橋本ふさ子
ゆきのけしきのおもしろきかな

ふりつもるゆきもいとはて來し友と　大阪　橋本しか子
ふくろもしらてかたるうれしさ

誰なかもとふとはなしにけさもまた　下谷　椎野清子

うへのゝやまにゆきをふみつゝ　下谷　椎野秀子

なすまきてみわたす峯のまつがねに
けさおもしろくゆきふりにけり　下谷　椎野薫子

おもふとちふろしらゆきを花とみて
はろこゝちせりうつみ火のもと　下谷　椎野鋭子

ふく風のみにしむほともわすられて
たちいてにけりゆきのあさには　芝　林環子

よしのやまかせにちりゆく雪見れは
はゐのながめもしのはるゝかな　東京　三好珍子

歌にゑにとり〳〵はけむともがきの
ゆきのつとひのおもしろきかな　麹町　高橋松江子

うつみ火をたよりにおくる老の身も
はつゆきこそはたのしかりけれ　淺草　内田とく子

うつろひし野へも山へもおしなへて
きよくなしても見するゆきかな　麹町　戸塚てつ子

うなゐらがさむさわすれてふる雪を
なげうつさまのおもしろきかな　三河　河合ぬひ子

さとの子のさむさわすれてゆきの山
つくろけしきもおもしろきかな

丙之部

ときならぬふゆ木の枝にふたつ三つ
四つ五つ六つのはなそさきける　長門　紀まき子

おしなへてふろしら雪をめつる間は
うきよのちりもわすれはてけり　肥後　板井ぬい子

とよ年のしろしをみせてふりつもる
ゆきにかれ木のはなもさきけり　肥後　德永雪枝子

敷しまのみちはしられと富士の根の
ゆきをめてつゝふでをそめはや　肥後　前川文子

雪はれてつきもすみたにこくふれの
とものかとよりかへるものかは　東京　山本茂子

冬かれてこすゑのはなとふりつもる
ゆきみるけふそたのしかりける　神奈川　田邊房子

雪ふれはまつおくかれてともかりと
さそさしいそくす田のかはふれ　東京　山本梓子

六つの花ちりかふよはのかせのまに
かすかにひゝくいとたけのこゑ　遠江　夏目松枝子

みやひとはともうちつれて雪みさけ
くみてめづらむあかぬけしきを　京都　坪内りき子

人かけをつくりてけふもおもふとち
みゆきのなかにくらしけるかな　富山　長谷川初枝子

おもふとちこすゑにかゝるしら雪を
しなさためするけふそたのしき　相州　岩橋花子

寒さをもわすれてあかすながめけり
わらやにつもるゆきのけしきを　横須賀　中山ふみ子

うなゐらのつくるほとけを埋み火の
かたへより見てゑにやかゝまし　奈良　澤田とし子

冬はたゝさひしきものとおもひしに
つもれはたのしゆきのあけほの　肥後　德永萬壽子

降しきるゆきにうかれてたのしけに
つふてきそふやおほわらはまで　横須賀　上田まき子

つむ雪にこゝろうかれてをさな兒が
身をもわすれてはしるをかしさ　肥後　德永廣子

をふれこく淀のあたりをみわたせは　埼玉　横田秋子

ゆきおもしろのやはたやまさき
むらすゝめ軒端にさわくこゑすなり　岐阜　佐藤蒼生子
けさめつらしきにはとりのこゑ
ふる雪もはなとみねつゝつもる日は　肥後　千知波橘子
ふゆのさむさもわすられにけり
里のこのさむさわすれてまろはせる　伊勢　池田梅子
さまおもしろしけさのしら雪
春ならぬこゝろのこまもいさみけり　廣島　衣笠澄子
野やまはゆきのはなさかりにて
かれはてしこすゑにゆきの花さきて　熊本　田代綾子
またちるにはのおもしろきかな
こゝのへのみ歌のしろにゑらまれし　下谷　高橋野利子
雪つむたけのおもしろきかな
ふりつもる雪のけしきのおもしろく　下谷　高橋津音子
さむさわすれてうたけするかな
めつらしなかれきも雪のきねぬまは　筑後　宮崎しけ子
ふゆさへはるのはなとこそみれ
たとへてもいはんかたなしあり明の　筑後　武田外代子
つきかげみねてふれるしらゆき
まゝとゐして庭のこすゑやことの葉の　埼玉　前野須賀子
つむもうれしきけふのゆきかな
ちりの世をのかれいてたる心地して　大阪　大阪谷信子
こゝろもきよきゆきのたかとの
ふりつもるゆきそうれしき敷しまの　大阪　橋本ふく子
ことはのはなのさくとおもへは
おちはして枝のみかはすにはの面に　東京　椎野ぬき子
やかてはなさくけさのしらゆき

れくらよりとひ立からすふたつみつ　肥後　佐々有鄰子
くろくみゆるやゆきのやまさと
をとめこに立ましりてそおもしろき　肥後　佐々小夢子
ゆきのはなみのふゆかれのには
しらゆきのつもりかちなる我か庵は　東京　鶴原貞子
うき世のほかのなかめなりけり
いつになく火ともすことも忘れけり　東京　戸賀崎梅子
ふみよむまとのゆきのゆふくれ
老の身に見るもをかしきうなゐ子か　東京　戸賀崎潤子
ゆきのあしたのにはのたはふれ
みゆきふる松には絶ねしかせのおとを　東京　戸賀崎久子
にねゆに聞きてあそふ今日かな
月はなのなかめおよはしふるゆきは　東京　戸賀崎治子
としある御代のしるしとおもへは
おもしろく野へも川邊もゆきのはな　東京　平尾あさ子
一夜のほとにさきてけるかな
酒のみて脊をやまつらんゆきの中に　東京　片山あや子
ふりかくされぬけふりたつなり
しつか屋の竹のさゝかきうつもれて　東京　片山ふみ子
ゆきにへたてぬはやましけやま
春のはなあきはもみちとなかめしも　東京　川村松子
きくよりのちはゆきのはなその
さむさをもわすれてこゝにたつた山　東京　吾妻ちか子
のこるもみちにかゝるしらゆき
目なれたる松のこつゑもことさらに　東京　大川ふく子
こゝろにとまるゆきのあさかな
うなゐらかつとふあしたの雪いくさ　東京　北島功子

敎の庭

おりたゝまほしきこゝちこそすれ

とも垣のへたてぬなかのことのはゝ
うつみもはてぬゆきのたのしさ　　三河　本多きさ子

ふりそめし雪のあしたはこゝろなき
いぬの子すらもめてはやすみゆ　　岐阜　吉村せい子

糸たけのたへのしらへにたぬかたき
ゆきけのそらもおもしろきかな　　遠江　夏目一枝子

雪ふれはふゆかれはてしこすゑみな
はなかとそ見るあしたたのしも　　茨城　内田さだ子

たのしさはなにゝたとへんしら雪の
よのまにつもるあけほのゝそら　　茨城　荒野たに子

まとおせは麥はたしろくゆきにあけて
くろいぬのせにうめのはなさく　　大阪　曾谷しけ子

おもふとちいさたちいてゝまろ山の
ゆきのはな見むはるならすとも　　和歌山　長尾小榮子

思ふとちかたらひかはすうつみひの
もとにはつもるゆきもしらしな　　伊豫　竹村竹里子

うなゐらのむれにましりて雪たるま
つくるわか身もたのしかりけり　　愛媛　附　濟子

とけぬれは濁るみゆきと知りつゝも
しはしなくさむわかこゝろかな　　長門　岩田章子

ゆたかなるみよのためしにつもりして
ゆきはきことのはなとみるまて　　秋田　三浦さわ子

さむさをもわすれて遊ふをとめ子か
ふり分けかみにかゝるしらゆき　　東京　敷島うた子

ふりつもる雪おもしろみゆくちこの
すそにもつるゝいぬのをかしさ　　東京　比田井元子

煤取

東京府下荏原郡大井村二四八　天　三好珍子

起よとの曉鐘に、故郷へかけ渡せし夢の浮橋中絶えて、目さむれば、ほのくらけれど今日は煤取なれば、例はいぎたなき身と早う起出つ、先身仕度をなし母君もろとも一年か程の塵を拂はんと、やり戸くりつゝはたきをかけ、あるは障子をはづし諸道具など庭に出しとり〳〵取かゝるに、もの音にや目をさましけむ、幼き弟の目をする〳〵起出來りて「よべより早う起してよとかね言せし」を、などむつかりつゝ、いづこよりか笹など持ち來り手傳すとて、人々の邪魔をなしありくに母君よりおこゞと給はりて、終には逃げ行くもいとをかしかなたよりは妹の涙すゝりつゝ何やらんもて來るにとへば、簞笥の陰より出たりとて、先つ頃京都の伯母君より給はりし京人形の哀や、頭手足は鼠の餌となりけん、綳帶などなしたる、いとをかしきものから、哀にやさしき妹の心もさこそと忍ばれぬ。是を聞し弟のやよなげき給ひぞ、鼠退治に參り仇をとりて歸るべければ、とて手遊の刀劍な

ど持ち來り獨さわぐさまいそがしさも忘れて皆々笑みくづれぬ。晝過より障子はりかへなどし、夕日西山にかたふく頃やう〳〵かたづきたれば、身を清めて夕げの膳にむかひたる心地よさ。早一年の塵も拂ひたり、春着もぬひをへたり、暮行年は惜けれどさりとてとまるにもあらねば、同は悦びを重ねて新しき年を迎んなど、話しつゝ弟のかた見やれば、つかれたりしにや、ひざを枕にねふれる樣の罪なき顔、己が幼き時をも忍ばれて、けがれなき幼心の羨しう。人の心の塵もをり〳〵拂ひたらんには、いと便よからんになど、思ふにも愚かなる身には殊更ぞ口惜う覺えてなん。

評。京人形の一段、趣巧なか〳〵に面白く。恰も目に見るが如く覺ゆ。全体よく整ひて、非難すべき點あるを見ず。

地　長門萩奥玉江　岩田章子

いで、母樣、表も裏も清め侍り。冠りの物とりませ。父上も、はや、箒捨て給うて御湯に。年の暮とも思はへぬかな。後の畑、鷄の聲のどやかに、小春の如き快さ。今、隣に煤拂ひ終へたるらし。竈の烟緩やかく、籔の間を縫ひ上れる見ゆ。廣からねども吾が家、麗はしからねども吾が家、父母ゐまし、夫あり、子あり、今年も亦、まどゐ樂しう、年を送り迎ふるは。「元日や、何はなくとも親二人」黄金の波と漲りし八束穗の稻は、美しう庭に俵と積み上げられ、肥えたる若駒は厩に嘶く。障子も張り、疊の表も改め、羽子、紙鳶、國旗、皆々新しく調ひぬ。裏の籬垣には、老いたる梅の蕾や賑ふ。こは來む新玉の春、畏くも君が御影に奉るべう、村の學校より仰せける、さうなき榮ある花なりかし。

はや、鎭守の社に夕神樂の太鼓、愛し子の歌聲あなたの畔道をわたる。今日、峠の居酒屋に、新しばり賣り初むるとか。いで、今宵は、新しき樽えて、父上や、夫の君の御唄承はらん。

評、人生の清福は陶朱の富にもあらず、王侯の位にもあらず、たゞ家庭の平和と健康とにあるなり。樂しき年の暮よ、かゝる家族の新年の祝ひの酒宴に、吾れも侍りて其樂を分たんことを望む也。

地　相模國横須賀町逸見九七安西醫院内　名木山勝子

彼方の山はまだ黑く、明星さへきらめきたる朝まだき、肌を刺す計りの寒さをも冒して、勇みたちたる人々よ。をのこは衣の裾高らかに引からげて、

いが栗の頭に鉢巻さへしかと結ひ、をみなははた、赤きたすき掛けて、家の主も、しもべも諸共に、かひ〴〵しういでたち燈火かきたてゝ、天井の裏、床の下迄、つとめて淸らかにす。こは何事ぞ。大方の家の、やがて來ん新らしき年迎へんとて、煤打拂ふにぞあなる。汚を厭ひ、淸を好むは、心誰しも皆然なれど、つかさ人に戒められて、ペストなどいふやまひ防がん爲に家は空騒ぎ、物を淸むる時のわざよ。それとこれと行ふわざに、聊か違ふゝしはなけれど、如何にぞや、思へばさても其時々によりて、人の心の自ら異なれる事よ。即ち疫拂はんの爲になす時は、人の心やゝ恐れてふ事を抱き、年の暮になしつるは、各々のぞみの光かがやきて、めでたき日を心に忍びつゝすなり。されば何れも同じ忙しき事なれども、みな人々をかしき事に思ひて、はた、よそめよりするも、此かたぞ、音きくだに、松竹たてならぶらん樂しき日の、そゞろ、心に畫かれて、つねに腰重き人まで、輕々しう立働くめり。

いでや人々よ。煤取る人々よ。いやが上にも打ち拂ひ淸めて、樂しき年を迎ひませかし。いな我は家のみを淸めよとはいはず。心をもあはれ人のいとも要なる此心根をも煤拂ひ淸めてとこそ願へ。いつはり多き世の中になど煤つかざることのあらむや。

評、才情流露して句として艶麗ならざるなし。每ながら才筆と云ふべし。

人

松山市一番町　宇高松子

男も女も同じ樣に、頭には手拭着物の上には單衣をかさねて、たすきかひ〴〵しく、女子は本箱机手文庫など輕きものを運べは、男子達は力自慢などしつゝ、具足櫃さては簞笥長持など持はこぶに日頃尋ねわびし筆記帳の其後におち込みありしを見上出たるうれしさ、これも煤取りの御蔭とよろこぶ、妾に引かへて、妹のお手玉を見いでしとも喜びしかひもなく、中の豆は皆鼠に食はれて、側の切のみ殘りたるはいと氣の毒なりし、かくて道具も運びをはれば、襖障子もとりはづされ疊も上げられて、外にはそを打たゝく音、内には天井拂ふ笹の音、掃く音、はたく音、打まじりて其さわがしさいはんかたなく、あたりの空氣はちりほこりにけがれて、こゝち惡しきまでに覺ゆ。然れど夫もしばしが程にてやがて疊も元の如くに敷かれ、

敷居かもゐ天井其他殘る方なく、拭ひ淸められて、道具類も順序正しくもとの場所へ納め終れる時のうれしさよ。やがて浴も終れば、朝よりの疲れのみかは、心のちりさへ身うちのけがれと共に洗ひ流しゝ心地して、其快さいはん方なく、殊に淸き室内に親兄弟もろ共に夕げの膳に打むかへる時の樂しさ、世は冬がれの空ながら、此室のみはまだき春風のかよへる心地せられてあん。

評。煤取の實景描き出して甚だ妙也。

人

東京市赤坂區靑山北町三丁目六十八番地　山本梓子

近くてとほきといへりけむ、師走のつごもりも、二十日あまりをへたてたる程とはなりぬ。あはれ月日と共に、つもりにたる、伏屋のちりうちはらはむとて、朝まだきより、こゝのくまかしこのすみの、煤打はらひ、はともなき家屋の、いとゝくすまして、見やれば、心もすが〳〵しう、のどかにおぼえて、新らしき年立ちこむも、いそかるゝこゝちす。さはれ、おのが身をかへりみれば、おこたりのちりのみつみて、かき拂らふわざもせず、飛鳥川のながれて早きとし月を、いとゝいふかひなくすごしきつるは、あさましきかぎりにこそ、いでやいまより、心のちりうちはらひて、朝に夕にいそしみなば、春の日の長閑けき心地にも、なりなむなと、思ふまゝにかくは。

評。簡潔して首尾よく整ひたり。

長野　松澤まつ子

春の花、秋のもみぢは、などいひ、昨日と思ひしに、あはれ今年も暮れなんとす。常には淋しき片山里も、人足しげき年の市。おろかなる身の、今更に、ゆめさめし心地して、心の限りをしめどもせんなし。されば、我等も、家をも、身をも淸めて、樂しき御代の春をむかへなん。いざ物せんとて、昔、しのぶも、實にせはしう物取り片づけるに、下男どもは、絲とりて、すさまじき音立て、煤打拂ふ樣、げに怠りの鬼も、病の鬼。、あはてふためき逃げ出づるならんと、おもほいて、おかしや。斯くてすみ〴〵迄も拂ひ終ひける時、月ほの〴〵と登りて淸き家を照らせり、あはれ玉のうてなも物かは。いでや、己は、心の煤をも、拂はゞやとそゞろ庭に下りたてば、あな床し雪をおかして、三ツ四ツ二ツ、薫りも高く春待顏に、にほひ出でたる梅が枝に、月は、氷の如くかかれり、サッと吹き來る夜嵐身にしみ〴〵て、兩手をかたくにぎりしめ、眺め入るに、ふと思ひぞ出づる、今年、彌生の初つ方、しかも此月、さる君の御庭に、里の名におふ櫻色、雲かとばかり咲き出でたる、木の間より、おぼろににほひ出でたる、ゆふべ、幾夜か、妾は、其下かげに、たゝずみて、さる君の御袖にすがり。、學ばゞ、月の桂も、手折らん、御身の只いたづらに、過ごし給ふな勝、ちぎる　ばかりなげきしに、君には、すげなくも、其袖ふりはらひ給へば、何の淚ぞ、はら〴〵と、二人の衣手にかゝ

りしを、限りなき空の月は、限りある人の命を示すかの如く我等が、袖に宿りぬ、そを君ば、何とか見給ひけん、あはれ妾が心づくしは、其末つ方散り行く花と諸共にはかなく消へ失せぬ。さはれ花は、やがて春風立ちなば、咲き出づれど、妾は、君を勵まして奉らんよすがはなし。あはれ月よ心あらば、其さやかなる光もてさとりかれたる彼の君の御心をてらし給ひてよ。

折しも長念寺の鐘の音いどさへ渡りて聞ゆしが、年の名殘の、其れの如、末細々と消へ去りぬ。

肥後　佐々有鄰子

十二月の今日は、煤取の祝日なれば、父上母君は年來の掟をとりすてたまはず、年のいそぎのひとつにかぞへて、朝日のさしのぼるころより品さだめなしたまひ、年男には老いたる仁三郎、鉾女には老女の勇喜ぞよかるべきと言ひつけしたまひて、祖靈社小竹神社に煤取の告文をとなへたまふ。次に年男は煤竹とりて旗前を三度はらへり、次に鉾女は鉾木とりて四隅八面をはけり、次に客殿雜屋。次に所々の建物。次に門扉にいたる。かくはらひきよめて。鉾竹は海老の姿に造りとゝのへて、神庫にをさめぬ、新舊の海老は家の榮を守護がほなりや、直會式に侍りて、小まづかひの智滿女が。白さく。今日の席のはぎおぎは仕まつらんと、立出たる姿ば海老茶色の袴をつけ、煤竹の小枝葉をとり。水手桶の底うちたゝき。歌よみけらく。

人皆樣　五人汲
ひとみなさま。いつたりぐみ。
八百千代　懸　持來　黒酒
やほちよかけもてこくろぎ

とうたひて。舞かなつるさまは、歌のみ六言四句の神代めきたるものを以て一興をそへけるものか、あな田舍ぶりがいかに。

周防　小山常子

屋内、調度のこりなく拂ひ清め、塵の世を去りしよと思ふ我が心は、なんとなう淸らかにして、新しき希望の滿てる世に出づることのいとうれしき。世の人は、年の暮になりぬれば、煤とり拂ひて、年内の禍をはらひ去り、新年を迎ふすゞろに幸福を希ふ淺ましき心に、形のみ煤取するなり。アゝ知らざるにや、思はざるにや。已が心の汚れを拂ひ淸め、新しき光に新緑の燃え出づるそれの如く、天眞の誠を現はし、いよゝ人の道を修めんと希ふを。

愛媛　南育女

幼兒らのいと嬉しげに、指折りかぞへつゝ、待ちにまつ、新年も最早近づきぬれば、いでや今日こそ、煤拂ひせめと、思ひたち、やがて母上と共に障子襖などをはづし何くれとあたりの器具を取かたづけつゝありしまに、父上は早藪の方より長き竿を持ち歸り給ひて、お手づから高き處を打拂ひ給ふれば、日頃は鉾持ちにし事もなき弟まで、いざ僕もせんとて、壁たゝきつ、出る塵多しとて、をかしげに、力のまゝにかなたこなたをうちめぐるも勇ましく、幼き妹は我れもとて、かひ〳〵しう、赤きたすきをかけて、母上妾などの成すがまゝを、傍より眞似するも、なか〳〵にあどけなしや、かくて諸共に勵め働きて、常は見ねざりし、棚の隅奧奧より出したるちりの思ひかげなく、さはにありしに、打驚けば、折しも弟の我は顏に、ちりひぢも積れば山となるてふ諺にもれず、かゝるは、日頃の掃除の怠りの、つもりしなりよ、など〳〵云ひ出たるも、思へばげにことはりとこそ、打うなづかるれ、さていたらぬくまなく、淸めつくして、全く終りし、は午後四時過ぐる頃なりき。

げにや年のうちに、つもりたるちりを、拂ひすてゝ、いと淸らになりたるあとの心地よさ、何にたとへん、いざもろ共に樂しく

こん年を迎へまし。一とせにつもりしちりを打はらひ春まつやとそたのしかりける

肥後　田代鶴子

年のあゆみだに、心せかるゝ、年の暮とて、ましてや、呉竹の、ひとよふたよが、ほどゝなれゝば、人は春もうけに、いそがはしく、ちまたは、松竹、門飾の、よび聲、いとかまびすし、きのふけふは、煤はらひするにや、こゝかしこ、物うちたゝく、音のみきこゆ、昔は年に一度の、煤拂とて、ことぐしう、ものしたりしとか、さあれ、今は衛生を、重んじ年に幾度となき、大掃除に、家の内外、ちりさへ、とゞめぬも、あまれき、大御代の、みめぐみなれや、或ひぢりの、正月は、めいどの旅の、一里塚とかや、いひけむも、うべ、人は、常に、動脉の、大鼓を、うちて、絶ねず、死地にと、進むなるを、限りなき、命とやら、心得て、あすをたのみて、怠りしこそ、かへすぐも、くちをしゝ、あはれ、屋上には、すゝこそ、つまれ、身には、いかばかり、ちりや、つみけむ、いざ、けふは、煤はらひて、心のちりも、ともに、はらはん。

長崎　八尾いへ子

梓弓いろが如くもなとは、常に誦しなれて心にもかゝらぬを、今年も早お指折る計りになりぬ。年の市らうかはしう行かふ人も賑はふ此頃、來ん年の事はじめせんとて小笹もて煤拂ふ音もさやぐと聞ゆていと勇まし、さるにても朝夕に拂ひかちなる煤はつもりてくもの巣にからまりながらさかりたるもあなり、此煤の糸にひきかへて我なしたる業は何程かあると心に問へば、これとて答ふるふしはひとつもあらず。はた都にありてもの學ぶ兄弟の上もかふかへられて心細く今年の煤も殘りなう拂ひ盡し。水まき濟めて釜の灰かきよせうら合すれば吉になんあへり、されば兄弟の身につむものは徒に齡のみにもあらじなどおもへば、來ん年もまたいそがるゝになん、あなあたらしの年の暮やあなうれしの煤拂と、老たる人も若き男の子もすみになりてよろこびのゝしるも、治まる御代のしるしにて、目出度業とやまをすべからん。



雜報

○皇后陛下の御歌　皇后陛下には此程數多くの國風を御詠わらせられ高崎御歌所長に示すべきやうにとの御内旨ありし由に付き御歌所錄事加藤義淸氏は御歌を捧持して先日汽車にて葉山なる高崎男の別莊に趣きたりと

○歌御會始諸役　明年一月十八日宮中に於て行はせらるべき歌御會始讀師を從二位公爵二條基弘氏に講師を從五位滋野井實麗氏に發聲を正三位

子爵綾小路有良氏に講頌を正三位伯爵大原重朝、正四位伯爵室町公大、正四位男爵西五辻文仲、正四位男爵金子有卿諸氏に仰付けらるべく正二位東久世通禧伯讀師控のことに伺ひ濟みの上御治定相成りたりと

○共立女子職業學校の名譽　神田區一ッ橋通り町なる共立女子職業學校にては去明治廿四年十月、天皇陛下特に侍從を差遣はされ同校の摸樣何くれと御下問わらせられ且生徒の製品を叡覽に供すべき旨御沙汰ありしを始めとし爾後毎年一兩回必ず此恩命を蒙り居りしは同校にとり無上の榮譽とする所なりしが今年も亦本月四日北條侍從親しく同校へ臨まれ同樣のり有がたき聖旨を傳へられ校員生徒一同聖恩の優渥なるに感泣し吿て製作に着手せりといふ



○女子修養會　神田仲猿樂町女子東京美術學校にては十一月三十日午後一時半より女子修養會の第一回を開き會長藤原惟郭氏開會の辭を述べ同校音樂科生徒の唱歌あり次で文學士芳賀矢一氏は國民の嗜好と題し下田歌子氏女子同感性と題して一場の演說を爲し富田豐春氏の一弦琴、福城可童氏の尺八にて姫小松、明石二曲の管絃合奏ありて閉會せり

○女子講習會閉會式　帝國敎育會にては十一月三十日午前十時より女子講習會の閉會式を擧行せり辻會長開會の辭を述べ講師の告辭講習生の答辭等ありて來賓には茶菓を饗せり

○女子敎育會の新施設　新潟縣女子敎育會にては來年の事業として會員の義捐補助

を以て會員女子に手輕料理法、負傷者應急手當及來客接待方の實地練習を爲す企なりといふ

○歡迎會の片影

（松方伯と大藏喜八郎君）

赫奕たる電燈は晝の如く輝き、卓上に美酒佳肴あり、幾多の紳士の並列せる中央には今宵の來賓たる松方正義伯あり、其の差向ひには亭主役の一人たる大倉喜八郎氏座を占めぬ

大「大隈サンの普請も出來ました樣でゲスが、流石は大隈サンだけ有ツて、立派な者でゲスな

松「中々立派ですの

大「シカシ日本の普請も、先づ當分の内は和洋衷折としなければなりまんから、不經濟でゲスな



松方伯は微笑しつゝ説き出しぬ

松「家が和洋折衷、洋服に和服、下駄に靴は不都合で、コイな習慣は、早く直さにやならぬ、漫遊の時露西亞の女子貴族小學校を見たが其着物が目に立ち申した、袖は肱で切ツて、肱から手の所まで別な布片を用ひ、其の布片　色合は、階級で別けるのぢや、胸から膝あたり迄は白い布片の胸懸けを着けるから、幾度でも洗へる

大「ハ、ア

松「誠に便利な者でな

大「成程、是は便利でゲしよふ

話頭は一轉せり、伯はカーネギーと對話せし事に付て語り出しぬ

松「カーネギーにも逢ひました、私は働く事が好

きですが、貴君も能く働きますでしよふと言ふので、私も左様ぢやと言つたら、カーネギーが申すに……………

大「成程

松「凡そ大事業をなすには、笑うて困難を凌ぐ膽力がなくてはならぬ

大「如何に是れはそうでゲす

松「それから健康ある身體が必要だから私は一週間に二回は、如何に忙がしい時でも、チヤント休んで運動をします、貴君も能く運動をなさないとカーネギーが申してな

大「成程、運動は一週間二回……

松「それで私に運動器械を呉れました

大「へ、エ、器械を献上致しましたか

松「實に私もカーネギーの心掛けに感心致したな

大「イヤ大事業をする者は中々違ッた者でゲスて

大倉君は左右を顧みて、頻りに感服の音頭を取りぬ、會衆は何れも首を傾けて、「ナアール程」と感嘆の聲を發しけり



○新潟縣の學校基本財産　曩に縣立各學校生徒の授業料を積立て百萬圓に至るを待ち以後の教育費は之を以て其の幾分を補助せんとの議ありしが今回更らに案を改め向ふ卅九ケ年間に總計一千萬圓を積立て其の以後は右利子五十萬圓を以て一切の縣立學校費を支辨する事となし縣會に於て滿場一致を以て可決したり積立つべき項目は各學校の授業料、及び保育料、教育に關する諸收入　教育に關する諸寄附金及び學校基本財産よ

り生ずる諸收入にして明年度に於ては授業料及び保育料合計五萬七千五百九十圓を積み立て年五分の利子を生ずるものと假定し明治四十六年度に於ては廿一萬七百三十八圓同五十六年度に於ては三百十九萬三千六十三圓同六十六年度に於ては六百四十二萬二千六十一圓を蓄積し明治七十四年度に於ては千四十一萬五千二百十三圓を得る見込なりと而して右は各學校實收豫定授業料の中より一割五分を減じて積算したるものなれば、之より增加するとも決して減少するの憂なく殊に諸寄附金等は全く此の計算以外に置きたるを以て實際は豫定の期限よりも早く一千萬圓を蓄積し得るならんと



○淸國留學生と女子師範學校　去る頃與汝綸氏が小石川區竹早町なる女子師範學校を參觀せし以後每木曜日には淸國留學生の來觀せざること殆ど無く同校にても喜びて其が接待に力め居れるが聞く所によれば此等留學生は卒業後歸國して各地の小學校を經營敎授すべき任務あるものにて日本語をも巧にし運動場に出でて女生徒のテニスなどに熱中するを見ては日本の女子は活潑だな……金さん最つと那裏へ行かうよなどは彼等の口より輕く巧に聞かる丶言葉なりとて何れも僅の時日の練習にて能く此の如くならしめたるに感嘆せざるは無しと

○新刊批評

◎少年世界文學（自第一編至第三編各一册價拾貳錢）

第一編は不思議の魚等二編は猿太郎第三編は神代のはなしを載す表紙口繪などの意匠よく整ひもて奇麗なれば少年娯樂の友として面白く愛讀せらるなるべし（東京富山房發兌）

◎ともかき第一册（非賣品）

愛敬女學校の機關雜誌として發行したるものなり下田義天類氏の發行の辭中里日勝氏の愛敬の說を始めとし文苑雜俎などありて見所おほし（東京愛敬女學校同窓會發行）

◎學界の偉人（佛人リギヨル氏講演）

學界に於ける物質、靈性の兩主義を評論して古來著名の學者は多く靈性主義の人なることを結論して惟物肉慾主義の今日に向ひて鞭撻を加へたるものなり（東京三才社及昌平館發行）

◎福音の門（同人）

基督敎の聖書に於ける福音に關して其の定義、編纂、區分、解釋等を陳べ終りに基督の性行、敎訓、學術と福音との關係等を論じたるものにて新敎に取りて有益なる小册子なり（同上）

○新刊書目

令徳	第四卷第十一號	令徳會本部
婦人と子供	第二卷第十二號	フレーベル會
日本婦人	第三十七號	帝國婦人協會
女子の友	第百二十八號	東洋社
女學世界	第二卷第十六號	博文館
愛國婦人	第十八號	愛國婦人會
婦女新聞	第百三十五號	婦女新聞社
体育	第百八號	日本体育會
商業之友	第九號	時事新報社
藥石新報	第四百四十七號	藥石新報社
女子新聞	第八、九號	女子新聞社
ともがき	第一輯	愛敬女學校同窓會
少年世界文學	第一、二、三編	富山房
福音の門、學界の偉人		リギヨル

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分前金五拾七錢
十二册半年分前金壹圓拾錢
廿四册一年分前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字一行金參拾錢
半頁金八圓
一頁金拾貳圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十五年十二月十九日印刷
明治三十五年十二月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊栄一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 鹽木巨雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八）

明治卅六年 女鑑教の庭 歌文月並兼題廣告

選者

◉歌 樞密顧問官 正三位子爵 黑田清綱先生

◉文 華族女學校教授 井上頼圀先生

		歌	文
一月	一日	寄海祝	元日書感
	廿日	富嶽	松の内日記
二月	一日	野若菜	初めて鶯を聽く
	十五日	晨鷄	若菜を送る
三月	一日	柳間鶯	春日古都を過ぐ
	十五日	春雨	音樂會の記

投稿〆切期限は總て發兌期日の十二日前、則一日分は前月の十八日、十五日分は其月三日とす

但し**一月二十日**の分は**同月十二日**を締切期限とす

投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても随意投稿することを得。

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事。

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。

○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。

○投稿題文中、天地人を撰び、天には壹圓、地には五十錢、人には三拾錢以下の書籍を贈呈す

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

文學士 小林雨搭著

新刊

勾當内侍

（四六三切袖珍各十三錢郵稅二錢）

名媛を以て名將に配す。是れ千歲の佳會也。而かも忽ち生別となり、忽ち死訣となる。豈復千古の恨事に在らずや。宮禁秋凉夜闌なる時、美姬半簾を捲き、月に對して玉琴を彈ざれば、名將千草の露を踏み、馬を佇めて戀に泣く、何等の風流ぞ。而して一たび天の憐みを受けて、鳳凰の契なるに及んでや、即ち亂離の厄に遭ひて、長く恨を北國の青山に留む。又何事の悲慘ぞ、時人或は傳へ曰ふ嵯峨野の奥、往生院の邊、まだ裏若き尼法師の、右手に花槽を携へ左手に珠數爪繰りて、口に稱名をふ唱ろにあふものありきと、是れ勾當内侍が義貞の後世を弔ふ也。抑も義貞の半面を知らんと欲せば、勾當内侍を知らざるべからず、勾當内侍を知るは義貞を知る所以なれば也古忠臣の魂、古名媛の怨籠りて此の小册子の中に在り、雪夜寒燈に對して之を讀む、誰か又一滴の涙なきを得んや。

新刊

袈裟御前

文學士 濱田康著

定價 金拾參錢
郵稅 金貳錢

新刊

顏世御前

文學士 長田偶得著

定價 金拾參錢
郵稅 金貳錢

東京築地二丁目
株式會社
國光社發兌
電話特新橋八八電話新橋二六九三

細川十洲先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十版賣切第三十版製本中

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金卅五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女學世界

明治卅六年の大改良

第一號 一月一日發行

歐西文明の潮流世界を風靡して女子の教育家庭の改良は刻下の一大急務となれり女學世界創刊年を閲すること僅に二回開版以來日尚淺きに拘らず今や毎月の發刊數萬部に達し創刊以來部數を計上すれば無慮八十萬部の多きに達せり一婦人雜誌として此の如き多數の流布を見ろは我國文化の程度に於て聊か異數と爲すに足るべし是れ元より江湖愛讀諸君の眷顧によるものとは云へ畢竟我女學世界の內容時世に切實にして家庭と學窓に對して多少の貢献ありしによらずんばあらず是に年改まると共に更に一段の改善を施し体裁を新にし實質を強び又新に欄を起して從來の遺漏を補ひ以て平素の愛顧に報ゐんとす

口繪 每號銅版寫眞十二頁を襍む材料は名媛の小照大家の繪畵彫刻內外風景風俗建築家庭庭園遊戲室內裝飾等其他

論說 本欄は社會家庭女子教育に關する時代の潮流を捉へ時事の問題を解くを主として名流大家の意見を紹介す

家庭 家政の學問をして實際に適應せしむるは本欄の主張にして衞生經濟慰樂育兒料理裝飾等日常必須の事を蒐む

文藝 本欄は國語漢文學西洋史學の大要を簡潔に平易に記述し初學婦女子の思想を啓發し氣品を高尙ならしむ

史傳 本欄は東西古今の賢婦烈女才媛の傳記逸事を掲け偉人傑士の事歷を尋ね德性を養ひ育兒の一資料たらしむ

科學 專ら學術上の利益を與ふるを目的とし自然界の萬象に就て最も趣味ある說示をなし科學的智識の啓發に資す

手藝 婦人の技藝は極て多し本項は繪畫彫刻裁縫編物刺繡造花等の實習其他の手引を掲けて婦女獨立の準備に資す

小說 妙齡女子小說を讀むの利害は世の疑問なり然れども本誌は其材と品とを撰み娛樂の間人情の機微を知しむ

雜錄 家庭以外社會諸般の事柄を最も趣味ある筆を以て記し風俗習慣生活上の巨細を知るの料となさしむるなり

職業 居家處世の上に於て婦人の職業極めて多く晩近女學の勃興に伴ふて其地步大に開拓す蓋し本誌は其餘師

詞藻 歌は心の花文章は思想の錦此欄に江湖才媛の手になる錦繡を敍せり絢爛の美紅滋の彩詠すべく歌ふべし

彙報 本欄は一月內の婦人界の消息を網羅し其社會上の著しき出來事其他の奇聞異報を報道して女界の事情を盡す

新年附錄 は畫はかき四葉を添ふ意匠を四季に取り筆者は玉枝、晴翠、耕霞、小蘋、の四氏なり

定價金 一冊二十錢四冊前金七十五錢八冊前金壹圓四十五錢十六冊前金二圓八十錢●郵稅一冊金貳錢づゝ

((第二號以下毎月一回五日發行外に定期增刊年四回))

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

女鑑

明治三十五年十二月廿日發行

毎月二回五日廿日發行
第貳百六拾七號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

（東京築地株式會社 國光社印刷）